

福岡市埋蔵文化財年報 VOL.34

—令和元（2019）年度版—



2020

福岡市教育委員会

序

福岡市では、文化財保護法の趣旨に基づき、埋蔵文化財の適切な保存と活用を図ることを目的として、公共及び民間の各種開発事業の事前審査、記録保存のための緊急調査、また重要遺跡確認調査等を実施しております。

文化財部は平成24年度より教育委員会から市長部局の経済観光文化局へと移り、教育委員会の補助執行として、文化財活用を含め多岐にわたる文化財保護業務に取り組んでおります。

本書は、平成31（令和元年）年度における埋蔵文化財保護行政の概要を報告するものです。開発事業に起因する事前審査件数は大幅な増加傾向をみせており、これに伴う緊急調査件数は平成25年度より微増し続けています。今後とも埋蔵文化財保護業務については適正で迅速な対応を進めたいと思います。

本書が文化財保護に対するご理解の一助となり、また学術資料として活用いただければ幸いです。

令和3年3月25日

福岡市教育委員会
教育長 星子 明夫

例 言

- ・本書は、埋蔵文化財課、文化財活用課、史跡整備活用課が平成31（令和元）年度に実施した各種開発事業に伴う事前審査と発掘調査の概要及び本報告、ならびに新指定文化財の概要について収録したものである。
- ・本書に記載ある令和元年度調査のうち、調査番号1908、1916、1918、1919、1921、1929、1936、1946、1956はこの年報をもって本報告とする。また、平成30年度調査のうち、1833、1843についても年報において本報告を行う。
- ・Ⅴの各調査の概要及び調査報告は各調査担当者が分担執筆した。Ⅶについては文化財活用課（星野恵美）が執筆した。
- ・上記以外の執筆並びに本書の編集は本田浩二郎が担当した。

表紙：史跡元寇防塁追加指定地区

目 次

I 令和元年度文化財部の組織と分掌事務	2
II 開発事前審査	3
III 発掘調査	5
IV 公開活動	5
V 令和元年度発掘調査概要および報告	6
VI 令和元年度国指定史跡（追加指定）	82
VII 令和元年度福岡市新指定および新登録文化財	84
報告書抄録	90

I 令和元年度文化財活用部の組織と分掌事務

文化財活用部の組織と分掌事務

文化財活用部 51

文化財活用課 10

管理調整係(事4)	部の総括、予算・決算、庶務・経理、文化財施設の管理
調査普及係(文1、学1)	文化財保護審議委員会、文化財の調査、普及事業
歴史資源活用係(学1、文2)	歴史文化基本構想の策定、文化財の活用推進

史跡整備活用課 8

福岡城跡整備係(事1、文2)	福岡城跡の調査・整備・活用、課の庶務、福岡みんなの城基金に関すること
鴻臚館跡整備係(文1)	鴻臚館跡の調査・整備・活用
史跡整備活用係(文2、事1)	史跡の整備・活用

埋蔵文化財課 25

事前審査係(文4)	公共及び民間開発事業に係る埋蔵文化財の事前審査
主任文化財主事(文1)	
調査第1係(文5)	課の庶務・主に東部地区の埋蔵文化財の発掘調査及び保存
主任文化財主事(文4)	
調査第2係(文6)	国庫補助事業総括・主に西部地区に係る埋蔵文化財の発掘調査及び保存
主任文化財主事(文3)	

埋蔵文化財センター 7

運営係(文2事1)	施設の管理運営、埋蔵文化財の収蔵・保管・展示等、教育普及
保存分析係(文2)	埋蔵文化財の保存・分析
事：事務職 文：文化財専門職 学：文化学芸職	

埋蔵文化財課の職員構成(文化財専門職)

埋蔵文化財課長	菅波正人	調査第1係長	吉武学			
事前審査係長	本田浩二郎	係員	木下博文	吉田大輔	松崎友理	神啓崇
係員	中尾祐太(～令和元年9月)	主任文化財主事	佐藤一郎	池田祐司	屋山洋	上角智希
	松崎友理(令和元年10月～)	嘱託員	中園将祥			
	朝岡俊也 山本晃平					
主任文化財主事	田上勇一郎	調査第2係長	大塚紀宜			
		係員	久住猛雄	清金良太	加藤良彦	荒牧宏行
			今井隆博	三浦悠葵	三浦萌	
		主任文化財主事	大庭康時	蔵富士寛	常松幹雄	
		熊本市派遣	清金良太(上半期)			
			中尾祐太(下半期)			

II 開発事前審査

1. 概要

本市では、土木工事等の各種開発事業に係る埋蔵文化財の取り扱いについて、開発事業計画地における埋蔵文化財の有無を確認した上で、保存に係わる協議等を行っている。

公共事業については、関係機関・部局に次年度の事業計画の照会を行い、埋蔵文化財の保存上問題になると判断される事業についてはその取り扱いについて協議を行っている。

民間の開発事業については、都市計画法に基づく1,000㎡以上の開発事業、建築基準法に基づく建築事業等を対象として事前協議を求めている。また建築等の計画策定段階での照会にも窓口やファックスで応じ、埋蔵文化財の保存上の措置について必要な指示を行っている。平成24年8月からは本市ホームページにて、包蔵地外町名リストの公開を開始し、利用者の照会の便宜を図っている。

2. 令和元年度の事前審査

令和元年度の事前審査件数は、表1のとおりである。福岡市域の開発事業を反映するように増加傾向となるが、平成22年からは年間2500件前後で高止まり状態となる。平成26年度から令和元年度にかけて、若干の増減はあるが、ほぼ横ばいの状況となっている。

表1 平成16～令和元年度事前審査件数

事業	内訳	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	R1年度
公共	事業照会審査件数	662	668	665	769	862	1,143	1,191	1,181	1,181	1,220	989	1,381	1,381	1,280	1,322	1,443
	申請審査件数	112	113	133	161	202	228	195	191	184	135	290	155	164	137	115	139
	審査件数計	774	781	798	930	1,064	1,371	1,386	1,372	1,365	1,355	1,279	1,536	1,545	1,417	1,437	1,582
民間	照会照会件数	5,842	6,126	8,309	7,226	6,144	5,555	6,225	6,791	7,195	6,491	12,301	12,356	14,349	14,773	16,687	16,520
	FAX照会件数	1,499	2,296	3,354	3,990	3,537	3,729	4,584	5,716	7,170	7,999	8,648	9,317	9,936	9,904	10,524	10,749
	照会件数計	7,341	8,422	11,663	11,216	9,681	9,284	10,809	12,507	14,365	14,490	20,949	21,673	24,285	24,677	27,211	27,269
	申請(審査)件数	1,207	1,257	1,090	1,011	1,000	924	1,184	1,176	1,261	1,339	1,140	1,147	1,123	1,134	1,265	1,348
	公共申請審査件数計	1,319	1,370	1,223	1,172	1,202	1,152	1,379	1,367	1,445	1,474	1,419	1,302	1,287	1,271	1,380	1,487
公共審査件数計	1,981	2,038	1,888	1,941	2,064	2,295	2,570	2,548	2,626	2,694	2,439	2,683	2,668	2,551	2,702	2,930	
試掘調査実施件数	365	419	327	384	364	345	371	371	379	443	318	286	267	254	353	323	

申請内容(表1・2)

公共事業に伴う依頼は139件となり、昨年度からわずかに増加している。事業者別では、国機関9件、福岡県1件、福岡市129件となる。事業別に見ると水道・電気等74件、道路19件、学校関係13件、空港関係9件、市営住宅の建て替え事業12件、その他の開発・建物は4件である。このうち公有財産の売却等の土地調査にかかる事前審査依頼は1件であった。なお事業照会件数は1,348件で、昨年度から微増する。事業別の内訳は、上下水道983件、学校6件、道路は120件、公園54件、空港施設関連11件であった。民間事業1,348件の届出内容は、事業別では個人住宅378件、戸建住宅328件、共同住宅193件、宅地造成57件、個人住宅兼工場または店舗3件など住宅関連事業をあわせると959件となる。土地売買に先立つ事前の調査依頼は45件であった。専用住宅・戸建住宅の割合が前年より大幅に増加し、売買に先立つ事前の調査依頼件数も急激に増加している。

公共・民間の申請件数の合計を区別に見ると、東区116件、博多区369件、早良区344件、西区191件、南区261件、中央区45件、城南区161件となる。前年と同様に博多区・早良区・南区の開発が高水準で継続していることが分かる。

指導内容(表2)

公共、民間各事業の事前審査の結果、事業者に指導した内容は表2のとおりである。次年度への継続、取り下げを除くと審査件数(申請件数)は1,481件で、前年より100件程度増加した。総体的に見ると書類審査での回答1,143件、踏査6件、試掘310件である。審査結果は開発同意97件、慎重工事1,184件、工事立会89件、

発掘調査 81 件、要協議（設計未定、売却予定で遺跡ありなど）27 件である。

窓口等照会（表 1）

民間業者等による窓口での「埋蔵文化財の有無に係わる照会」等は 16,520 件、ファックスでの照会は 10,749 件、あわせて 27,269 件で、平成 30 年度実績 27,211 件より微増している。平成 24 年 8 月より本市ホームページにて、包蔵地外町名リストの公開を開始し、利用者の照会への便宜と照会件数減を図っているが、窓口件数は大きく増加している。ファックス照会件数は 22 年度以降毎年増加しているが、30 年度から大きく増加し 10,000 件を超えた。ホームページ「福岡市の文化財」では、「福岡市埋蔵文化財包蔵地分布図（Web 版）」を整備・公開しており、窓口のみでしか閲覧できなかった埋蔵文化財包蔵地分布図が遠隔地からも確認できるようになった。

試掘調査・確認調査（表 3）

包蔵地内で行われる確認調査、包蔵地隣接地・包蔵地外で行われる試掘調査（以下試掘調査と総称する）は令和元年度で 323 件実施した。区別の内訳として東区 40 件、博多区 99 件、中央区 11 件、南区 50 件、城南区 22 件、早良区 63 件、西区 38 件となる。対象とした遺跡数は 123 遺跡である。10 件以上試掘した遺跡としては博多遺跡群 16 件、比恵・那珂遺跡群 24 件、有田遺跡群 16 件となっている。包蔵地隣接地および包蔵地外の試掘調査は 36 件であった。確認・試掘調査 323 件のうち補助対象は 316 件、現物重機等による調査は 55 件となる。

表 2 令和元年度事前審査内訳（※民間事前審査 8 件取り下げ）

区名	事業	審査種別（書類審査・現地調査・試掘調査）でみた判断指示の結果													区別審査件数					
		開発同意			慎重工事			工事立会			発掘調査			協議			審査継続	取り下げ	公民別計	区計
		書類	踏査	試掘	書類	踏査	試掘	書類	踏査	試掘	書類	踏査	試掘	書類	踏査	試掘				
東	公共	4			9			1	1				1			1			17	116
	民間	17	1	1	41	1	20	5		3	2		3	2		3			99	
博多	公共	1			38		2	3					3						47	369
	民間	4	1		170		66	21		6	8		36	8		1		1	322	
中央	公共				8														8	45
	民間	5			15		8	4		1			2	2					37	
南	公共	4			8		1	1											14	261
	民間	10		2	167	2	37	12		2	4		6	4				1	247	
城南	公共	1			2														3	161
	民間	8			119		19	4		2	2		2	2					158	
早良	公共	2			19			1											22	344
	民間	17			230		50	8		2	3		7	3				2	322	
西	公共	5			18		3		1	1									28	191
	民間	13	1		102		29	8		2	2		2					4	163	
小計	公共	17	0	0	102	0	6	6	1	2	0	0	4	0	0	1	0	0	139	1487
	民間	74	3	3	844	3	229	62	0	18	21	0	56	23	0	4	0	8	1348	
合計		91	3	3	946	3	235	68	1	20	21	0	60	23	0	5	0	8	1487	

表 3 令和元年度確認調査・試掘調査一覧

区	東	博多	中央	南	城南	早良	西	計								
件数	40	99	11	50	22	63	38	323								
補助	26	14	83	16	11	0	43	7	19	3	55	8	31	7	316	55
包蔵地内	37	88	10	41	17	61	33	287								
包蔵地隣接地	2	10	1	7	5	2	5	32								
包蔵地外	1	1	0	2	0	0	0	4								

Ⅲ 発掘調査

1. 令和元年度の発掘調査（表4・5）

令和元年度の発掘調査件数は、表4に示したように、30年度からの継続事業6件、令和元年度新規事業65件の計71件で、このうち9件は令和2年度に継続である。新規調査65件は文化財保護法第93、94条に基づく記録保存のための発掘調査63件のほか、史跡整備に伴う調査2件を含んでいる。

65件の発掘調査総面積は21,168㎡で、前年度と比べ調査件数は倍増し、これに伴い調査面積は大幅な増加となる。公民別では公共事業が2,712㎡、民間事業が18,996㎡であり、民間が全体の89%を占めている。公共事業総面積が前年度比で200%とほぼ倍加し、民間事業についても約40%増加している（平成24年度から、国立大学法人関係の調査は民間事業扱いとしている）。今年度についても前年度に続いて圃場整備事業に伴う発掘調査は実施していない。

個々の発掘調査の面積としては、100㎡以下が22件、101～300㎡が29件、301～500㎡が14件、501～1,000㎡が6件、1,001～10,000㎡が7件となり、小規模な開発事業の増加が著しい。300㎡以下の小規模調査は51件と、前年度の17件から件数・比率ともに増加した。1件あたりの平均調査面積は326㎡、公共事業で2,712㎡、民間事業では297㎡である。区ごとでは東区9件、博多区32件、中央区6件、南区6件、城南区3件、早良区9件、西区0件となり、博多区に調査件数が集中する傾向が昨年度に引き続き顕著である。

各区の面積では、東区6,649㎡、博多区8,898㎡、中央1,318㎡、南区960㎡、城南区209㎡、早良区3,134㎡、西区0㎡である。博多区は調査件数では他区を大きく上回る状況にあるが、これは近年の市内の宿泊施設不足問題や宅地の再開発分譲事業等に起因するもので、調査件数全体の増加に直接関連している。なお博多遺跡群、箱崎遺跡などでは複数の遺構面を調査するため、実際の発掘面積は増加する。

表4 令和元年度 発掘調査区別調査件数・面積（前年度継続分6件・学術調査7件を除く）

令和元年度	東	博多	中央	南	城南	早良	西	全市
公共調査	1	0	0	0	0	0	0	1
民間調査（民営+令達+補助）	8	32	6	6	3	9	0	64
計	9	32	6	6	3	9	0	65
調査面積総計（㎡）	6,649	8,898	1,318	960	209	3,134	0	21,168
平均調査面積/1件	739	278	220	160	70	348	0	326

参考 学術調査7件 5,100㎡
継続6件調査面積 5,654.57㎡

表5 発掘調査件数の推移（ ）前年度からの継続件数、なお学術調査2件(H30)、5件(R1)は除く

事業	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	R1年度	
民間	21 (6)	30 (0)	27 (1)	22 (2)	42 (4)	50 (5)	47 (5)	48 (7)	38 (5)	41 (4)	70 (6)	
調査面積（㎡）	11,190	15,649	6,175	15,333	20,293	15,786	10,687	12,807	16,498	17,534	24,111	
圃場整備	4 (0)	4 (2)	1 (2)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	
調査面積（㎡）	0	9,775	1,984	0	0	0	0	0	0	0	0	
公共	16 (3)	16 (3)	23 (3)	19 (2)	5 (1)	6 (1)	8 (2)	2	0	3 (2)	1	0
調査面積（㎡）	33,099	22,856	14,322	14,440	3,315	1,996	6,842	1,728	2,909	1,335	2,712	
合計	41 (9)	50 (5)	51 (7)	41 (4)	47 (5)	56 (6)	55 (7)	50 (7)	41 (7)	42 (4)	71 (6)	
調査面積（㎡）	44,289	48,280	22,481	29,773	23,608	17,782	17,529	14,535	19,407	18,870	26,823	

※調査件数・面積は前年度からの継続件数も含むが、大学による学術調査7件は含まない

Ⅳ 公開活動

市民への公開を目的として、記者発表や現地説明会、体験学習および福岡市埋蔵文化財調査報告書の刊行等がある。令和元年度は博多区博多遺跡群第221次調査にて近隣住民の皆様に対しての現地説明会を実施した。また市内小中学校の体験学習の一環として発掘調査や整理作業への参加を受け入れており、令和元年度は、福岡市立那珂中学校・姪浜中学校の生徒を対象に市内の発掘現場及び整理室において、職場体験学習を行った。

公開・活用に資するための埋蔵文化財報告書・年報は、表8のとおり計20冊が刊行された。

V 令和元年度発掘調査概要・報告

調査概要・報告は表7の調査番号順に掲載し、位置番号は右ページの調査一覧表と一致する。

また、各報文の図〔1.調査地点の位置〕の()内は、左から福岡市都市計画図図幅番号・図幅名称・遺跡番号・縮尺である。

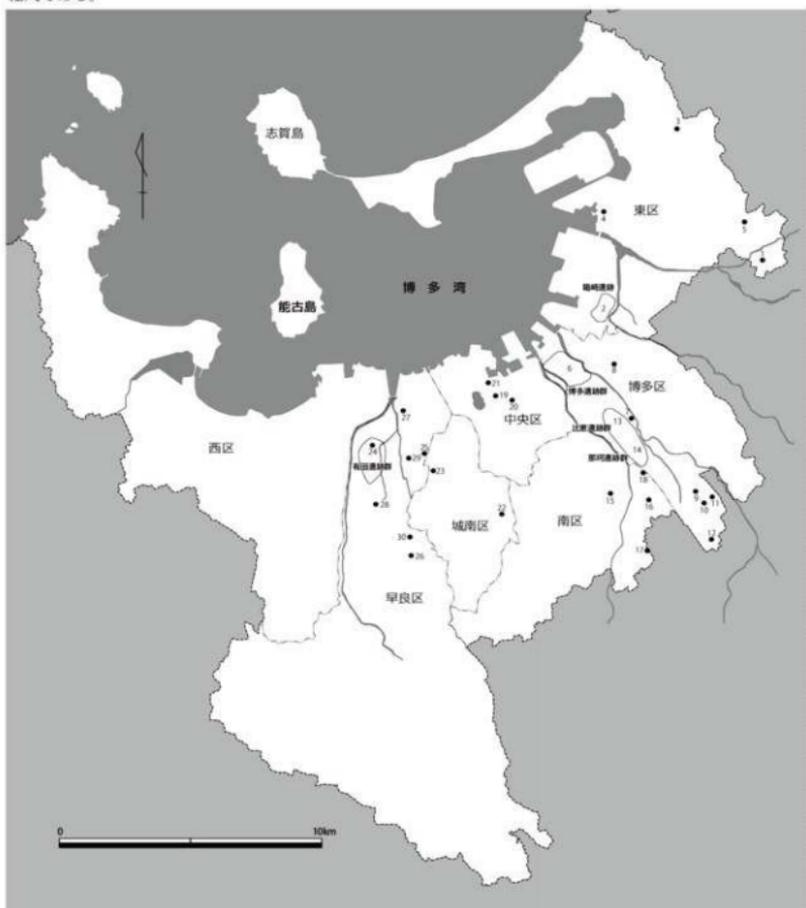


表6 令和元年度発掘調査遺跡一覧表

1. 蒲田部木原遺跡	7. 東那珂遺跡	13. 那珂遺跡群	19. 史跡福岡城跡	25. 飯倉A遺跡
2. 箱崎遺跡	8. 吉塚遺跡	14. 比恵遺跡群	20. 福岡城跡	26. 重留B遺跡
3. 高節遺跡	9. 麦野A遺跡	15. 三宅遺跡群	21. 福岡城下町遺跡	27. 藤崎遺跡
4. 名島城跡	10. 麦野C遺跡	16. 井尻B遺跡	22. 宝台遺跡	28. 次郎丸高石遺跡
5. 名子遺跡	11. 井相田E遺跡	17. 弥永原遺跡	23. 飯倉C遺跡	29. 原遺跡
6. 博多遺跡群	12. 中ノ原遺跡	18. 五十川遺跡	24. 有田遺跡群	30. 野芥遺跡

表 8 令和元年度刊行報告書一覧

集	書名	副書名	収録調査番号
1386	有田・小田部59	有田遺跡群第266・267・268次調査報告	1819・1822・1831
1387	雀居13	雀居遺跡第15・16・17次調査報告	1508・1509・1532
1388	雀居14	雀居遺跡第18次調査報告	1605
1389	山王遺跡11	山王遺跡第13次調査の報告	1735
1390	山王遺跡12	山王遺跡第14次調査・第15次調査	1806・1827
1391	那珂80	那珂遺跡群第170次調査の報告	1704
1392	那珂81	那珂遺跡群第173次調査報告	1803
1393	那珂82	那珂遺跡群第174次調査の報告	1816
1394	野方久保遺跡 5	野方久保遺跡第 6 次調査報告	1640
1395	博多166	博多遺跡群第209次調査報告	1638
1396	博多167	博多遺跡群第211次調査報告	1701
1397	博多168	博多遺跡群第212・219次調査報告	1709・1801
1398	博多169	博多遺跡群第217次調査報告	1734
1399	羽根戸原C遺跡 5	羽根戸原C遺跡第 6 次調査報告	1719
1400	原遺跡21	第35次調査報告	1841
1401	比恵88	比恵遺跡群第151次調査報告	1738
1402	福岡城跡	第75次調査報告	1714
1403	麦野A遺跡10	麦野A遺跡第26次調査報告	1602
1404	席田平尾遺跡 1	第 1 次調査報告	1726
埋蔵文化財年報VOL.33		平成30(2018)年度版	
		笠弥郷B遺跡第8次調査	1802
		原東遺跡第4次調査	1807
		有田遺跡群第265次調査	1808
		弥永原遺跡第14次調査	1810
		高節遺跡第1次調査	1812
		野芥遺跡第17次調査	1815
	比恵遺跡群第153次調査	1826	
	飯倉E遺跡第3次調査	1837	

令和元年度の発掘調査件数は、表4に示したように、平成30年度からの継続調査6件、令和元年度新規調査65件の計71件で、このうち9件の調査については令和2年度に継続である。新規調査65件は文化財保護法第93、94条に基づく記録保存のための発掘調査63件のほか、史跡整備に伴う調査2件を含んでいる。文化財保護法第92条に基づく調査は、主に九州大学箱崎キャンパス跡地で実施されたもので調査主体は九州大学埋蔵文化財調査室となる。表3・4に記載したように令和元年度には7件の調査が実施された。このうち2件の調査は平成30年度からの継続調査である。調査番号としては1839、1840、1922、1923、1943、1945、1967がこれにあたる。このうち1943(九州大学調査番号HZK1902)は中央図書館南側の防音講義室解体に伴う学術調査であり、建物基礎下に石積み遺構が列状に残存している状況が確認された。九州大学と埋蔵文化財課が保存についての協議を行い、建物基礎撤去により石積み遺構に影響を及ぼす可能性がある範囲については、未撤去のまま現地に石積み遺構とともに残置させ、石積み遺構については養生作業の後現状保存することとした。

本年報においては各調査の概要について報告を行うが、例言に記載したとおり調査番号1908、1916、1918、1919、1921、1929、1936、1946、1956はこの年報をもって本報告とする。また、平成30年度調査のうち、1833、1843についても年報において本報告を行っている。これらの調査はいずれも短期間、狭小な対象面積を対象に行ったものである。

継続調査および新規調査の内容を見ると、博多遺跡群が計18件と全体件数の25%を占めている。次いで箱崎遺跡14件で19%、比恵・那珂遺跡群6件で8%となっている。このうち箱崎遺跡調査14件のうち7件については九州大学埋蔵文化財調査室による調査であり、7件については福岡市による開発事業に先立つ発掘調査となる。各調査の詳細については、各報告および巻末に掲載した抄録を参照されたい。

1901 東那珂遺跡第8次調査 (HGN8)

所在地	博多区東那珂一丁目 425 番、426 番
調査原因	共同住宅
調査期間	2019.4.8 ~ 2019.5.23
調査面積	235㎡
担当者	板倉有大・三浦萌
処置	記録保存

調査の概要

東那珂遺跡は福岡平野の中央部、御笠川東岸の沖積地上に位置する。遺跡の周辺地形は那珂川や御笠川等の大小河川の浸食によって形成された中低位段丘と沖積地によって構成されている。本遺跡は沖積低地上に位置し、現在は水田を埋めた宅地となっている。周辺遺跡には西側に那珂遺跡群、東側に雀居遺跡などがある。

第8次調査地点は遺跡範囲中央部の西側に位置し、第1次調査の東側に隣接した狭長な敷地となる。調査で検出された遺構は、柱穴やピット、溝、方形土坑1基、掘立柱建物2棟等である。

遺物は遺構や調査区全体から古代に属する須恵器や土師器、黒色土器、越州窯系青磁などがコンテナケース7箱分出土した。遺構の主要な時期は第1次調査と同時期の8世紀ごろと考えられる。



1. 調査地点の位置 (23 雀居 2635 S=1/8,000)



2. 調査区南半全景 (北西から)

1902 福岡城下町遺跡第3次調査 (FUM3)

所在地	中央区大名2丁目 279 番、280 番
調査原因	ホテル建設
調査期間	2019.6.10 ~ 2019.9.13
調査面積	319.0㎡
担当者	屋山洋
処置	記録保存

調査の概要

福岡城下町遺跡は福岡城北側の砂丘状に位置し、3次調査地点は福岡城下町の復元図によると南側の武家屋敷地区と北側の町屋地区の境界に位置する。遺構は江戸時代初頭の盛土や生活面、地簾遺構の他に18世紀代の可能性のある火災に伴う整地層などを確認した。Ⅰ区南側(敷地中央部)では火災による整地層は確認できないが、多数の井戸や土坑が切り合うなど北側とは様相が異なる。Ⅱ区はⅠ区南半同様に多数の井戸と土坑、溝のほか火災に伴う廃棄土坑などを確認した。

溝は調査区の南端からⅠ区中央部まで確認し、この溝の東西では遺構の分布、盛土に使用した土などが異なるため、区画溝の可能性が考えられる。遺物は廃棄土坑から多量の瓦の他に陶磁器、瓦器等が出土した。調査区の北側、中央、南側、南西側とそれぞれ盛土方法や遺構の分布が異なっており、近世の土地利用などを把握する上で重要である。



1. 調査地点の位置 (60 舞鶴 2888 S=1/8,000)



2. 調査区南半全景 (東から)

1903 博多遺跡群第 226 次調査 (HKT226)

所在地	博多区綱場町 107-1、107-2、108
調査原因	共同住宅
調査期間	2019.4.8 ~ 2019.6.20
調査面積	78.1㎡
担当者	松崎友理
処置	記録保存

調査の概要

本調査地は遺跡範囲中央の北側、「息浜」の南側端部付近に位置する。対象範囲西側をⅠ区、東側をⅡ区と設定した。Ⅰ区Ⅰ面の南側では固く締まる黄褐色土が厚く堆積し、黄褐色土周囲には布掘の柱穴列にともなう根石が多数確認され、黄褐色土で土間を形成したとみられる。Ⅰ区Ⅲ面の北側では標高約 1.7m で天板付の木桶が検出された。さらに標高約 1.3-1.4m と標高約 1.0m で、横板と杭が東西方向に並列した状態で検出された。横板の北側（内側）には白色砂が敷かれ、その上には汚泥と粗砂で形成された客土が堆積する。標高 1.0m の段階まで一度埋め立て、その後約 20cm 北側に横板と杭を打ち込み、標高約 1.3 ~ 1.4m まで埋め立てたと考えられる。出土遺物から 14 世紀代と推定される。

遺物は土師器、輸入陶磁器、木製品、土製品、骨等がコンテナケース 70 箱分出土した。



1. 調査地点の位置 (48 千代・博多 0121 S=1/8,000)



2. 天板付木桶全景 (南東から)

1904 博多遺跡群第 227 次調査 (HKT227)

所在地	博多区中興服町 56 番
調査原因	事務所建設
調査期間	2019.5.8 ~ 2019.5.13
調査面積	82.0㎡
担当者	田上勇一郎・中尾祐太
処置	記録保存

調査の概要

第 227 次調査地点は博多浜と息浜の接続部周辺の息浜側に位置する。以前の建物等で広範囲に攪乱を受けており、上層の遺構は残っていないが、標高 2m 以下の砂丘面では一部遺構が残存していることが確認され調査を行った。

調査では 12 世紀前半から 13 世紀後半の土坑、井戸、ピット等の遺構が検出された。中央部で発見された井戸は一度掘り直されており、いずれも木桶を井戸枠にしていた。鎌倉時代、13 世紀後半のものと考えられる。

中国産の青磁、白磁、陶器や朝鮮半島産の陶磁器のほか、瓦器碗や土師器などがコンテナケース 2 箱分出土している。

調査の成果として中世港湾都市博多の一角を確認することができた。今回の調査地点では平安時代後期の 12 世紀前半より人々の生活が始まったことが判明した。



1. 調査地点の位置 (48 千代・博多 0121 S=1/8,000)



2. 調査区全景 (南東から)

1905 博多遺跡群第228次調査 (HKT228)

所在地	博多区中呉服町183番
調査原因	共同住宅
調査期間	2019.4.22 ~ 2019.6.25
調査面積	160.0㎡
担当者	吉田大輔
処置	記録保存

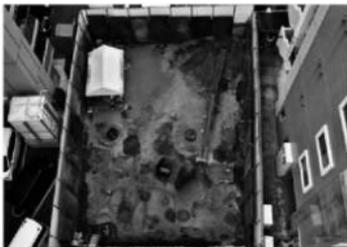
調査の概要

第228次調査地は、博多遺跡群が展開する砂丘列のうち、最も海側に位置する「息浜」の東側に立地する。現在の標高は4.9mで、中世段階には砂丘の東側斜面に位置し、南側と東側に向かって傾斜していたと考えられている。

調査では、標高3.6~3.7m程度の第1面、標高3.2~3.5mの第2面の二面の遺構面について発掘調査を実施した。第1面では、中世後期から近世、第2面では14~16世紀と考えられる遺構群を検出した。検出した主な遺構は、掘立柱建物2棟、石組遺構2基、廃棄土坑1基、土坑50基、ピット多数である。出土遺物は、近世の国産陶磁器や土師器等、中世の輸入陶磁器等がある。検出された掘立柱建物や石組遺構の軸はやや東に振れており、町筋の方位を示す可能性があり、太閤町割やそれ以前の中世「息浜」の町筋等を検討するうえでの重要な成果を得ることができた。



1. 調査地点の位置 (48 千代・博多 0121 S=1/8,000)



2. 調査区全景 (南西から)

1906 博多遺跡群第225次調査 (HKT225)

所在地	博多区店屋町20-1・2、21-1・2、22-11・12
調査原因	ホテル建設
調査期間	2019.4.1 ~ 2019.6.12
調査面積	128.4㎡
担当者	蔵富士寛
処置	記録保存

調査の概要

第225次調査地点は博多浜の北端部にあたり、近隣では第40次調査、第161次調査などの調査が行なわれている。

調査は標高2.3m前後から開始し、11~13世紀を中心とする遺構、遺物を検出した。標高2m以下は自然堆積層であり、白磁を中心とする陶磁器や木製品が多量に含まれている。調査では複数の遺構面を井戸、土坑、柱穴、石敷等の遺構を確認した。井戸は計6基を検出し、その内には井戸側瓦組が1基、桶組が3基がある。前者は近世段階、後者は13世紀頃に位置付けられる。遺物は中国製陶磁器や土師杯・皿、箸・下駄・櫛・板材といった木製品を中心とし、コンテナケースで60箱分が出土した。

今回の調査により、砂丘縁辺部における人々の生活の様子が明らかとなった。出土遺物も多く、博多遺跡群における人々の活発な活動をうかがうことができる。



1. 調査地点の位置 (49 天神 0121 S=1/8,000)



2. 調査区全景 (北西から)

1907 吉塚遺跡第18次調査 (YSZ18)

所在地	博多区吉塚3丁目360番1の一部
調査原因	店舗建設
調査期間	2019.4.12～2019.6.6
調査面積	230.3㎡
担当者	三浦悠葵
処置	記録保存

調査の概要

第18次調査地は遺跡範囲の北東端に位置する。南東側で行われた第5次調査では飛鳥時代を中心とした遺構と土師器・須恵器などが確認されている。

調査では溝2条と井戸2基、土壌8期の他多数のピット等の遺構を検出した。溝と井戸は共に古代のものであり、2基の井戸の基底部にはそれぞれ木製の井戸枠が残存していた。遺物は縄文時代後晩土器、弥生時代中期後半から後期前半の甕や壺、器台、石包丁など、古墳時代から古代にかけての土師器の甕、高坏、須恵器の坏などが出土しており、その他ごくわずかに青磁等の陶磁器小片が出土した。以上より、本調査地とその周辺では、明確な遺構は見られないものの縄文時代後晩期、弥生時代には人の活動があったことが想定される。古墳時代から中世にかけて集落が営まれ知多ことが判明した。



1. 調査地点の位置 (25 吉塚 0123 S=1/8,000)



2. 調査区全景 (南東から)

1908 宝台遺跡第4次調査 (TKD4)

所在地	城南区樋井川4丁目367番13
調査原因	専用住宅建設
調査期間	2019.4.12～2019.4.24
調査面積	68.0㎡
担当者	上角智希
処置	記録保存

調査の概要

調査に至る経緯

福岡市教育委員会は平成30年11月25日付で上記地における埋蔵文化財の有無についての照会を受理した(事前審査番号30-2-897)。これを受けて、埋蔵文化財課事前審査係は申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である宝台遺跡に含まれていることから、平成30年8月21日に現地において確認調査を実施した。

その結果、弥生時代と考えられる遺構が現地表下50cmで検出された。遺構の保全等に関して申請者と協議を行ったが、住宅建設工事による埋蔵文化財への影響が回避できないと判断されたため、工事が行われる範囲について記録保存のための発掘調査を実施することとした。発掘調査は条件整備が整った平成31年4月12日に着手し、同年4月24日に終了した。



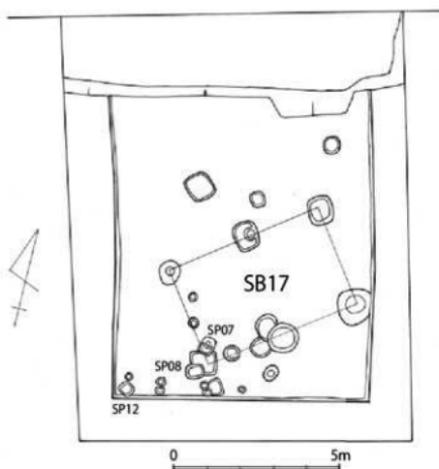
1. 調査地点の位置 (63 長尾 0208 S=1/8,000)



2. 調査区全景 (北から)

立地と環境

福岡市の中央に鴻ノ巣山を中心とする平尾丘陵（高度60～100m）があり、南は油山山麓へと繋がっている。この南北に貫く丘陵地帯の東側が福岡平野、西側が早良平野となっている。宝台遺跡は平尾丘陵の一部である上長尾丘陵に立地する。宝台遺跡周辺は山あり谷ありの非常に起伏が激しい地形で、4次調査地点は丘陵の頂部にあたる。本地点周辺は古くから宅地化が進んでおり、昭和35年作製の地図に市営長尾住宅と記載しており、現在も当時の町割りを引き継いでいる。現況では宅地が道路面よりも1m以上高くなっているが、当時は宅地と同じ高さに未舗装道路があり、赤土のため雨が降った時は滑りやすく往来が大変であった。後に地面を切り下げて舗装道路がつけられたと地元の方から聞いた。本調査区の北東側20m地点で第2次調査（報告書名は長尾遺跡）が、南側隣接地で第3次調査が実施されている。これらの調査では弥生時代の方形竪穴住居や土坑等が検出されている。

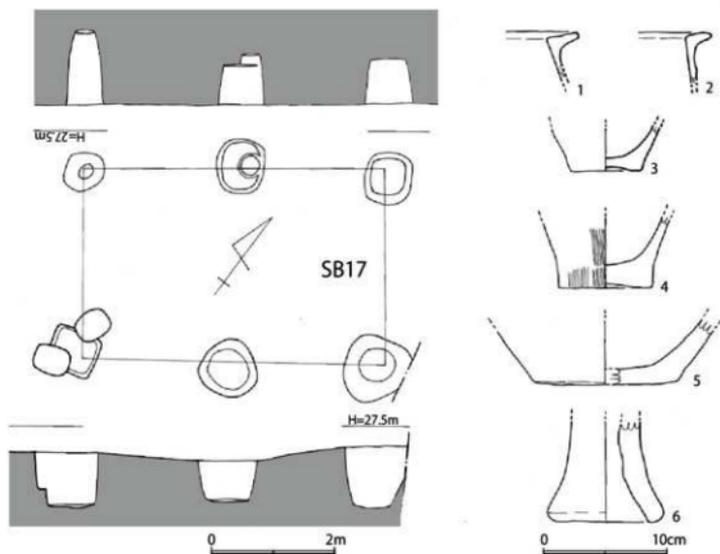


3. 宝台遺跡第4次調査遺構全体図 (S-1/150)

これらの調査では弥生時代の方形竪穴住居や土坑等が検出されている。

検出遺構と出土遺物

表土を50cm程度除去すると、橙色のローム層が現れ、この面で遺構を検出した。検出した遺構は、弥生時代の柱穴・



4. SB17 遺構実測図 (S-1/80)・出土遺物実測図 (S-1/4)

小ピット約 20 基で、1 × 2 間の掘立柱建物 1 棟 (SB17) を復元できた。出土した遺物は弥生土器と黒曜石でコンテナ 1 箱分である。いずれも小片で図化できるものは少ない。

SB17 は、1 間 × 2 間の掘立柱建物で、長辺 4.9 m、短辺 3.1 m を測る。柱穴は直径 80 ~ 100 cm、検出面からの深さは 70 ~ 100 cm のものが多く、北西隅だけ直径 70 cm、深さ 130 cm で若干形状が異なる。1・2 は甕の口縁部である。口縁が逆 L 字に折れ曲がる。3 は甕の底部か。底径 6.0 cm。

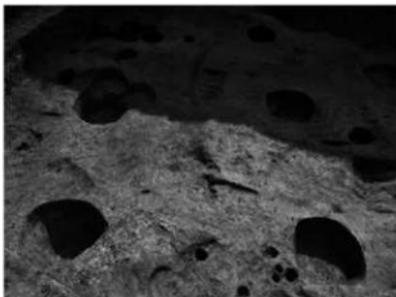
4 は甕の底部である (SPO8 出土)。5 は壺の底部である (SP07 出土)。6 は器台である (SP12 出土)。

まとめ

本地点からも弥生時代中期の柱穴・小ピットが、かなり密に検出された。丘陵頂部はさほど広い面積がないが、周辺調査成果と合わせて該期の小さな集落が立地していたものと推測される。



5. 調査区全景 (北から)



6. SB17 検出状況 (北東から)

1909 博多遺跡群第 229 次調査 (HKT229)

所在地	博多区店屋町 16 番 1 他 8 筆
調査原因	ホテル建設
調査期間	2019.4.15 ~ 2019.7.26
調査面積	201 m ²
担当者	常松幹雄
処置	記録保存

調査の概要

第 229 次調査地点は、博多浜の北西部、海側に緩やかに傾斜する標高 5.3 m の地点にあたる。第 1 面は地表から 1.8 m 下の最初の生活面では厚さ 0.6 m の土蔵の土壁をささえる石基礎が検出された。その北東の赤い焼土付近では、無文銭が 30 枚以上出土した。銅を加工する工房跡とみられ、無文銭の流通が終わる頃の様子を示すものとして重要である。室町時代後期の 15・16 世紀頃と推定される。地表から 2.5 m 下の第 2 面では、南北にのびる幅 5 m ほどの道路跡が確認された。南北にのびる道路跡はこれまでの調査成果を裏づけるものとして注目される。地表から 3.0 m 下の第 3 面では鎌倉時代の 7 基の井戸跡が検出された。直径 0.6 m ほどの底のない桶を重ねる構造と推定される。

今回の調査で検出した遺構と遺物から、中世の博多を解明するうえで重要な所見がえられた。



1. 調査地点の位置 (49 天神 0121 S-1/8,000)



2. 調査区全景 (北東から)

1910 高節遺跡第2次調査 (TKF2)

所在地	東区下原4丁目907-6
調査原因	宅地造成
調査期間	2019.4.22 ~ 2019.9.10
調査面積	544㎡
担当者	中園将祥
処置	記録保存

調査の概要

高節遺跡は、標高30m前後の丘陵尾根部分に立地する遺跡である。昨年度の第1次調査(調査番号1812)に引き続き実施した第2次調査では、古墳3基を検出した。調査区東端で検出した1号墳は6世紀後半の直径約26mの円墳(前方後円墳の可能性もあり)、2・3号墳は7世紀前半の直径約13-17mの規模の円墳であった。1・2号墳には、天井部分の石や側壁の石の一部は盗掘により抜き取られていたが、石室が検出されており、残存状況は良好であった。遺物としては、石室及び墳丘から古墳に伴う副葬品、祭祀用としての須恵器・土師器が100点以上出土した。

今回の調査では、6世紀後半から7世紀前半の古墳が検出されたが、周辺にはこの時期の集落跡遺跡は現在知られておらず、今後の古墳時代における当遺跡周辺の環境を考える上で重要な調査となった。



1. 調査地点の位置 (16 唐ノ原 2741 S-1/8,000)



2. 3号墳石室全景(南から)

1911 博多遺跡群第230次調査 (HKT230)

所在地	博多区上呉服町170番、171番
調査原因	ホテル建設
調査期間	2019.5.22 ~ 2019.8.10
調査面積	100㎡
担当者	木下博文
処置	記録保存

調査の概要

博多遺跡群は博多湾に面した三列の東西方向の砂丘上に立地する。第230次調査地点は、遺跡の中央北寄りに位置し、内陸の砂丘北東部にあたる。聖福寺の寺中町の範囲内である。近隣地では140次、107次、74次調査が実施され、13世紀末~14世紀初の道路、12世紀前半の経塚などが検出されている。

今回の調査では計4面の調査をし、中世期の柱穴・土坑・井戸・溝などを検出した。標高4.0mにあたる第2面では、灰褐色土による整地層を確認し、それ以下の層では13世紀前半の青磁碗が出土していることから、整地の年代が13世紀後半であることが判明した。第2面で検出した土坑からはクジャまたはイルカの椎骨がまとめて出土している。遺物はコンテナケース50箱分の貿易陶磁器・土師器類等が出土した。



1. 調査地点の位置 (48 千代・博多 0121 S-1/8,000)



2. 西側調査区全景(北から)

1912 名島城跡第8次調査 (NZE8)

所在地	東区名島1丁目2414-7、2420-92
調査原因	共同住宅建設
調査期間	2019.5.13～2019.5.31
調査面積	24㎡
担当者	佐藤一郎
処置	記録保存

調査の概要

第8次調査地点は名島城本丸の東側、中央から南側に開く谷の東斜面に位置。石垣を延長3.6m検出した。40-80cmの角礫を用い、基底部から2段分、高さ1m前後が残る。

石垣の面には裏込めに用いられた拳大～人頭大の礫群がみられた。検出された石垣の南端から西側にかけてL字に裏込めとみられる礫群が広がり、石垣が南で折れ西へ延びていたと推定される。石垣基底部下で地山の風化頁岩となり、基底部の石垣のレベルまでは造成土が縞状に堆積する。現況では2段に造成されており、石垣は上段の平坦部で検出された。下段は大きく削平を受けている。造成土上面の土砂・転石除去の際、瓦がコンテナ3箱分、他に中国明時代の青花片や国産の土師器片が数点出土した。

調査で検出された石垣はその下部にとどまっており、上部は福岡城築城の際に、石材が抜き取られと見られる。



1. 調査地点の位置 (32 名島 0115 S=1/8,000)



2. 石垣基底部検出状況 (南西から)

1913 福岡城下町遺跡第4次調査 (FUM4)

所在地	中央区赤坂1丁目175-1～3
調査原因	共同住宅建設
調査期間	2019.5.15～2019.6.14
調査面積	195.04㎡
担当者	加藤良彦
処置	記録保存

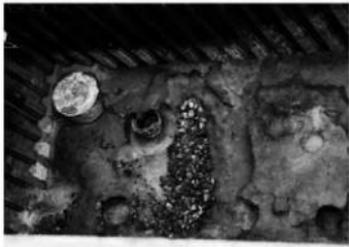
調査の概要

第4次調査地は遺跡南西部に位置し、近世福岡藩上級家臣の屋敷地、後期には福岡藩郡役所が移築された敷地内に位置し、1次調査区の西に隣接する。標高約2mの砂丘砂上面で、江戸後期の枯山水庭園池2基、土塀21基、井戸1基、溝2条を検出した。枯山水池は径9m程の大型土塀を被熱瓦を含む多量の瓦片で狭めて、中央に陸橋を設けた幅2.5～4m程の二つの枯池に改築し表面を粘質土で被覆する。底面は瓦片を露出し、南岸に石積で犬走を構築して露出し景色としている。文献では文化12(1812)年中老の斎藤家屋敷が火災にあい、文政元(1814)年、城内にあった郡役所が移築されており、枯山水の構築状況は家老屋敷の火事場処理に適切、郡役所開設時の遺作の可能性が高い。

遺物は織物様式向付や茶道具、文具が目立ち、家老屋敷・郡役所の裏付けとなる。



1. 調査地点の位置 (60 舞鶴 2888 S=1/8,000)



2. 枯山水庭園伏道構検出状況 (北東から)

1914 箱崎遺跡第96次調査 (HKZ96)

所在地	東区箱崎1丁目2928番、2929番
調査原因	共同住宅建設
調査期間	2019.6.3～2019.9.21
調査面積	482㎡
担当者	佐藤一郎
処置	記録保存

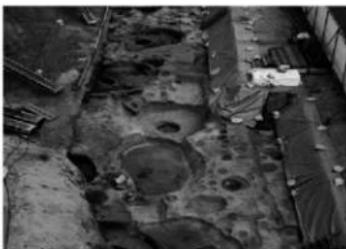
調査の概要

第96次調査地点は遺跡範囲の北西、砂丘前面域の最高部よりやや下がった位置に当たる。標高3.0m前後の黄灰色砂上面で、12世紀後半～13世紀後半の溝6条、井戸15基、土坑35基、柱穴・ビット状遺構400個余りを検出した。溝はいずれも幅0.3m前後で、1条を除き東に30°振れた現況の町割りと同じ方位である。土坑は径1～2mの不整形円形、楕円形ものがほとんどで、多くは廃棄土坑とみられる。土師器の多くは神厩用とみられる。柱穴・ビット状遺構は後世の井戸や土坑等に切られるが、建物や柱列として10棟ほどまとまられた。現況の町割りと同じ方位の一群と、さらに東に10°振れる一群とに大別される。

遺構から出土した遺物の大半は土師器であるが、13世紀後半の遺構からは博多遺跡群でも希少な南宋後半の龍泉窯青磁片が、高い頻度でみられる。



1. 調査地点の位置 (34 箱崎 2639 S=1/8,000)



2. 調査区全景 (北から)

1915 博多遺跡群第231次調査 (HKT231)

所在地	博多区須崎町16-1-3、17、31-1、31-2、32
調査原因	ホテル建設
調査期間	2019.6.10～2019.11.1
調査面積	315㎡
担当者	上角智希
処置	記録保存

調査の概要

第231次調査地点は博多遺跡群の北西部、息浜の西側海岸線付近に位置する。これまでの発掘調査や文献史料から、中世前期(平安時代後期～鎌倉時代)の時期にこの一帯で人々が生活を始めたことがわかっている。

調査では12世紀代から江戸時代までの堆積層を5面にわけて面ごとに遺構を確認した。最下層となる標高1.2m付近の砂丘面で遺構面を検出し、12世紀頃の貿易陶磁器類を確認した。その後、近世になってから盛土造成を繰り返しながら集落化していく様子が確認され、調査地点は12世紀代には那珂川に向かって緩やかに下る海岸線付近に位置していたことが判明した。

遺物は土師器、貿易陶磁器類、瓦器などがコンテナケース69箱分出土した。



1. 調査地点の位置 (49 天神 0121 S=1/8,000)



2. 調査区全景 (南東から)

1916 麦野A遺跡第27次調査 (MGA27)

所在地	博多区麦野5丁目 131517185054
調査原因	共同住宅建設
調査期間	2019.5.10～2019.5.17
調査面積	180㎡
担当者	上角智希
処置	記録保存

調査の概要

調査に至る経緯

平成30年11月16日付で上記地における埋蔵文化財の有無についての照会を受理した(事前審査番号30-2-801)。これを受けて、埋蔵文化財課事前審査係は申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である麦野A遺跡に含まれていることから、平成31年3月11日に試掘調査を行った。現地での確認調査では、古代の時期と考えられる遺構が現地表下-30cmで検出された。遺構の保全等に関して申請者と協議を行ったが、工事による埋蔵文化財への影響が回避できないと判断されたため、建設工事が行われる範囲については記録保存のための発掘調査を実施した。発掘調査は条件整備が整った令和元年5月10日に着手し、同年5月17日に終了した。

立地と環境

麦野A遺跡は御笠川とその支流である諸岡川にはさまれた中段段丘上に立地する。その包蔵地指定範囲は南北約1.2km、東西約0.4kmの細長い立地となっている。遺跡周辺の地形は、丘陵が侵食されて狭い谷が入り込んで八つ手状に舌状の台地を派生させており、そこに麦野B遺跡、麦野C遺跡、雑餉隈遺跡、南八幡遺跡などが立地している。複雑な地形に合わせて細い道路が複雑に入り組んでおり、微地形の高低差がかなりある。昭和初期の地図を見ると、丘陵部に集落が形成され、周辺の低いところには水田が営まれている。

調査の概要

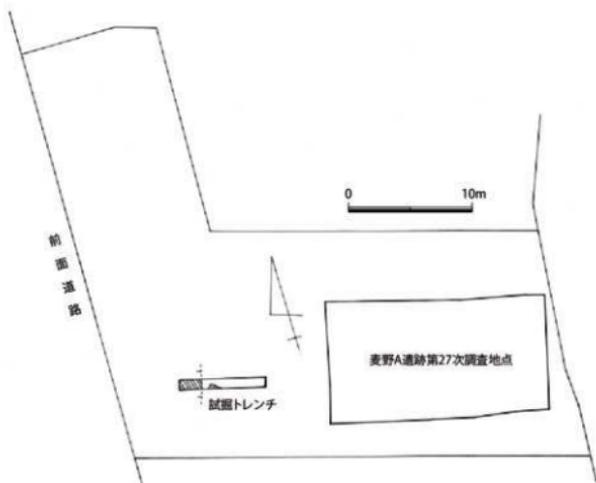
現況は、本調査地点である宅地のほうが敷地西側の道路面よりも約1m高くなっている。昭和初期の地図においても、この道路を境に東側が集落、西側が水田になっている



1. 調査地点の位置 (12 麦野 0048 S=1/8,000)



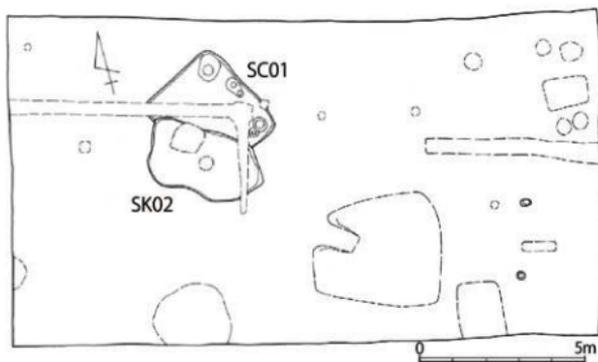
2. 北側調査区西半全景 (西から)



3. 第27次調査地点位置図 (S=1/400)

ので、旧来の地形を反映しているのであろう。標高 14.2 m 付近（道路面 + 40cm）で鳥栖ロームになり、この面で遺構を検出した。遺構密度はまばらで、奈良時代の竪穴住居跡 1 軒、不整形の土坑 1 基、柱穴 2 基を確認したのみである。竪穴住居の深さが約 10cm しか残っていないことから、旧地表面はかなり削平されていると思われる。古代の遺物がコンテナ 1 箱分出土した。

本調査では建物の建設予定範囲に限って発掘調査を行ったが、確認調査を行った際に、敷地内の本調査区より西側で竪穴住居 1 軒と大きな溝 1 条が検出されている。これらの遺構については、工事による影響がないと判断されたため、現地において保存されるものとし、調査対象から除外している。



4. 第 27 次調査遺構配置図 (S-1/150)

検出遺構と出土遺物

SC01

SC01 は長辺 3.2 m、短辺 2.8 m の方形竪穴住居である。埋土は黒褐色土である。現代の下水管と古代の不整形土坑 SK02 に切られており、遺構全体の南側半分は消失している。床面までの深さは、約 10cm 強であり、旧来の地表面は削平を受けているようだ。埋土から古代の土師器・須恵器がごく少量だけ出土した。

出土遺物

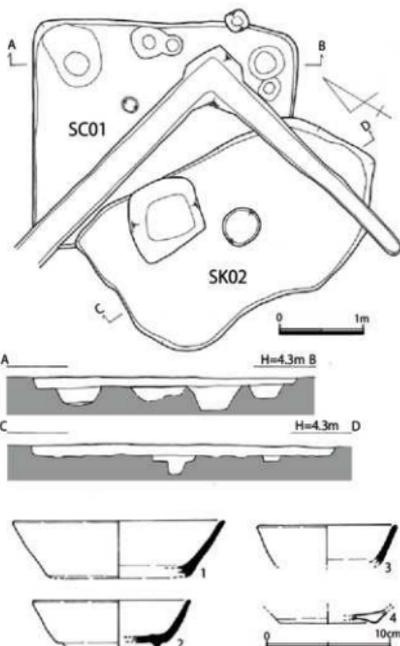
3 は須恵器の環である。復元口径 11.4cm を測り、底部には高台が付くであろう。

SK02

SK02 は長辺 3.5 m、短辺 2.0 m 程度の不整形の土坑である。床面までの深さは約 10cm で、床面は平坦ではなくかなりでこぼこしている。埋土は、黒褐色で橙色ロームのブロックが混じる。古代の土師器・須恵器がごく少量だけ出土した。

出土遺物

1 は須恵器で大型の環である。復元口径 17.2cm を測る。2 は須恵器の環である。復元口径 13.8cm、器高 3.9cm を測る。4 は土師器の環である。高台を有する。



5. SC01・SK02 実測図 (S-1/60)、出土遺物実測図 (S-1/4)

まとめ

過去の地形改変により大きく削平を受けているため遺構の密度は薄いのが、奈良時代の竪穴住居と土坑を検出した。また、調査対象範囲外ではあるが、敷地内にはほかにも竪穴住居と溝が存在することが確認調査でわかっている。これらの遺構から、第27次調査地点付近にも当該期の集落が展開していたことが判明した。麦野A遺跡の4次・14次調査地点では10件以上の竪穴住居が確認されているが、両調査地点は100m以上離れており、同一集落としては認定しがたい。遺跡範囲内に同時期に小規模集落が点在している社会構成であったと考えられる。



6. 北側調査区全景（西から）



7. 南側調査区全景（西から）



8. SC01・SK02 検出状況（北東から）



9. SC01 完掘状況（南西から）

1917 箱崎遺跡第97次調査 (HKZ97)

所在地	東区箱崎1丁目2535、2534、2560
調査原因	店舗建設
調査期間	2019.6.17～2019.8.9
調査面積	256㎡
担当者	神啓崇
処置	記録保存

調査の概要

箱崎遺跡は博多湾岸の砂丘上に立地し、中世を中心とする遺跡である。第97次調査地点は遺跡範囲の北東に位置し、南北に狭長な敷地である。

調査では、中世前半の井戸・土坑・溝・多数の柱穴等の遺構を検出した。井戸遺構は調査区の南側3分の2の範囲に集中して分布し、計7基を確認した。井戸遺構の時期はいずれも12～13世紀代におさまる。調査区南側に井戸、北側に柱穴群が集中しており、当該期の町屋の配置・町割りを考えるうえで重要な成果を得た。

中世以前に遡る遺物として、弥生時代中期初頭甕小片や古墳時代後期の須恵器坏身・甕胴部片も少量出ているが、弥生～古墳時代の遺構は未確認である。

遺物はコンテナケース11箱分の弥生土器、土師器、貿易陶磁器類等が出土した。



1. 調査地点の位置 (34 箱崎 2639 S=1/8,000)



2. 調査区全景 (南西から)

1918 有田遺跡群第269次調査 (ART269)

所在地	早良区小田部2丁目93番1、93番2
調査原因	駐車場整備
調査期間	2019.6.13～2019.6.19
調査面積	691㎡
担当者	池田祐司
処置	記録保存

調査の概要

1. 調査に至る経緯

平成31年3月22日付けで当該地における埋蔵文化財の照会があった(30-2-1237)。東側隣地では第145次、南側隣地で216次調査が行われており、照会地でも昭和62年当時の確認調査においてピットなどの遺構を確認している。その後、敷地の北側は保護層を設け戸建て住宅として、南側は畑地として利用されていた。さらに平成30年11月26日の照会に伴い同年12月12日に改めて現地での確認調査を行い、遺構を確認していた。

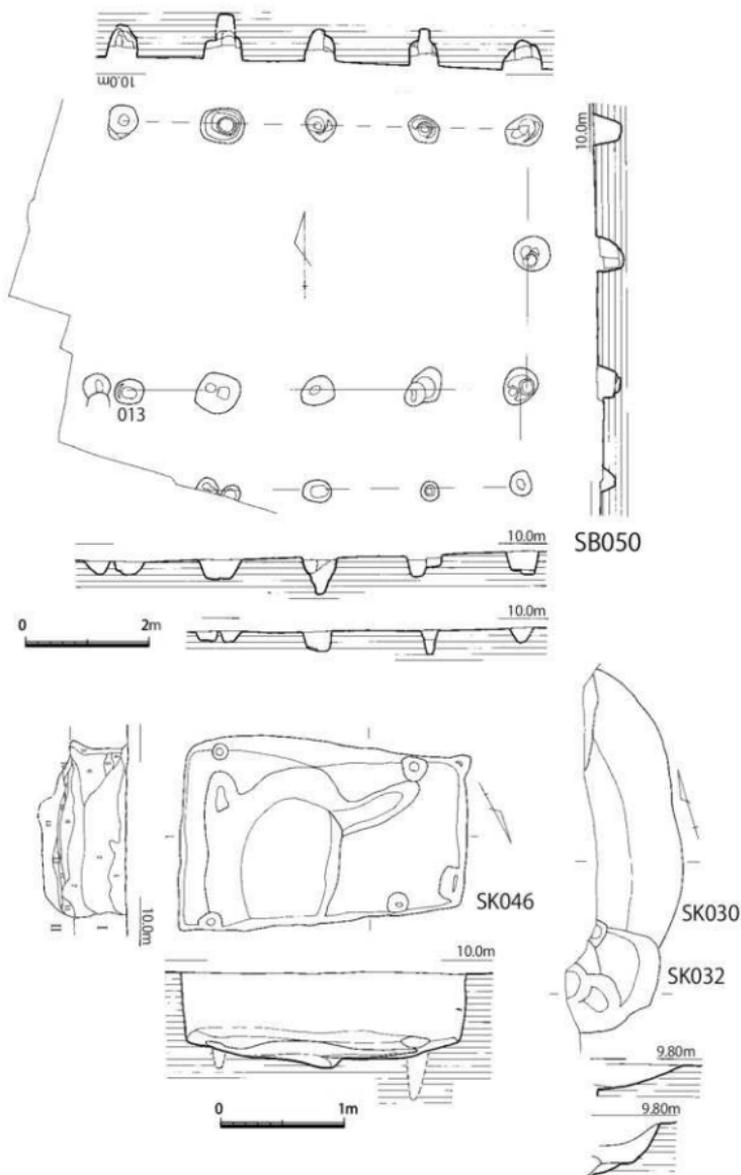
今回計画では隣接する道路に合わせて、現況から2～3m地下げして駐車場とする工事内容であり、影響を受ける範囲については発掘調査が避けられないと判断されたため、敷地全体を対象として発掘調査を行うことで合意した。



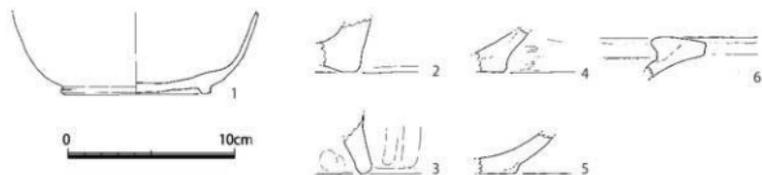
1. 調査地点の位置 (82 原 0309 S=1/8,000)



2. 調査区南西部全景 (東北から)



6. 遺構実測図 (S=1/80、1/40)



7. 出土遺物実測図 (S=1/3)

出土遺物

030からは弥生土器の小片40点ほどが出土した。形態がわかるものは裏の底部片2、器台片3くらいである。時期は判じ難いが弥生時代中期の可能性もあろう。

SK046

調査区北側で検出した平面長方形の土坑で長さ230cm、幅は西側で125cm、東側で150cmを測る。壁は特に上部は直に立ち、床は中央部東よりがくぼみ深さ55～75cmほどである。四隅付近に径12～20cmのピットがみられる。覆土は全体に締まりがない。中～上部は灰茶褐色土で黄褐色の小ブロックを多く含み一気に埋めた感がある。下部は暗灰色から一部黒褐色の粘質土である。

出土遺物は弥生土器の底部2点、小片4点のみと少ない。4は内面なので、外面へらなどで、5は内外面などで調整の底部でいずれも壺と考えられる。出土遺物は少なく遺構の時期を反映しているとは考え難い。周辺調査の遺構の時期から古代から中世を想定している。

ピット

南西側を中心に大小のピットを確認した。遺物の出土がないものも多く、出土しても小片がわずかで、形や調整から時期が想定できるものは弥生時代中期である。その中でSP24、31では弥生時代中期と考え



8. 有田遺跡群第269次調査区全景(北から)



9. 周辺調査区との関係 (S=1/800)

られる甕のやや大型の破片がまとめて出土した。SP31からは楕円口縁の壺6が出土している。

4. おわりに

周辺では大きな削平を免れた最後の高まりでの調査だったが、耕作等の削平で失われた遺構も多いと考えらえる。検出したSB050は南側の第216次調査で検出した官道と並行し、出土遺物から時期も近く、これに関連する建物と考えらえる。また、遺構からは弥生時代中期前半の遺物が目立ち、竪穴建物等の集落遺構が調査地点付近に存在したものと考えられる。



10. SK030 (北から)



11. SK046 (西から)

1919 飯倉 A 遺跡第 4 次調査 (IKR-A4)

所在地	早良区飯倉 2 丁目 449 番 8
調査原因	戸建住宅建設
調査期間	2019.6.12 ~ 2019.7.12
調査面積	61㎡
担当者	三浦萌
処置	記録保存

調査の概要

1. 調査に至る経緯

平成 31(2019)年 2 月 25 日付けで、当該地における戸建住宅建築に伴う埋蔵文化財の有無についての照会が提出された(事前審査番号:30-2-1147)。対象地については前年度に事前申請が提出されており、現地において確認調査を実施していた。確認調査の結果、対象地内の現地表下 40cm の地点において竪穴住居跡や柱穴といった遺構が確認されていた。今回申請である戸建住宅建設に先立ち、現況より前面道路高まで切り下げる造成工事が予定されていることから、対象地内で確認されていた埋蔵文化財への影響は避けられないことから、敷地面積 96.47㎡ 全面において記録保存のための発掘調査を行うこととなった。調査は条件整備が整った令和元年 6 月 12 日に着手し、同年 7 月 12 日に作業を終了している。



図 1. 調査地点の位置 (73 茶山 0245 S=1/8,000)



写真 1. 調査区北側全景 (南東から)



図2 調査区全体図 (S=1/100)

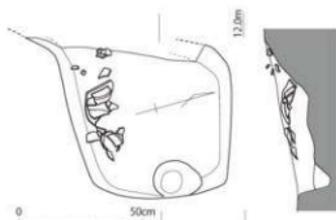


図4 SK003遺構実測図 (S=1/20)

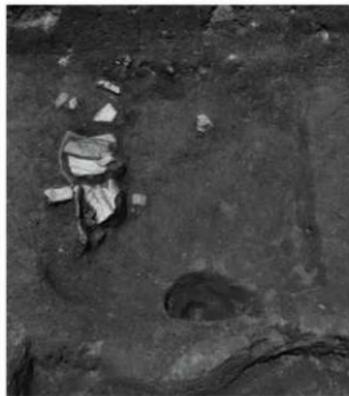


写真2 SK003遺物出土状況(南東から)

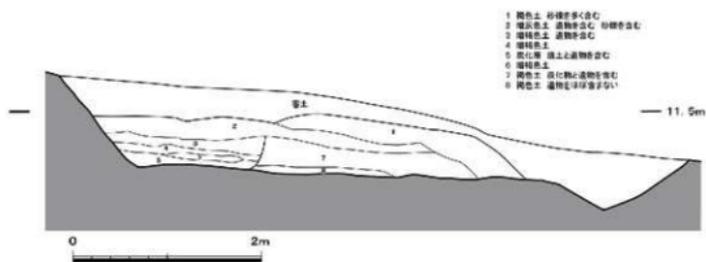


図3 調査区北壁土層図 (S=1/50)

2. 立地と環境

飯倉A遺跡は、油山から派生する低丘陵である飯倉丘陵上に立地している弥生時代から古代にわたる複合遺跡である。この飯倉丘陵には飯倉A～H遺跡が位置しており、飯倉A遺跡はその中でも北西に位置する。

本調査地は飯倉A遺跡のほぼ中央に位置する。西側では第1次調査が行われており、弥生時代後期から古墳時代初期にかけての竪穴住居などが主に発見されている。



図5 SK003出土遺物実測図(S=1/3)

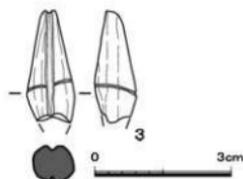


図7 その他出土遺物実測図(S=1/1)

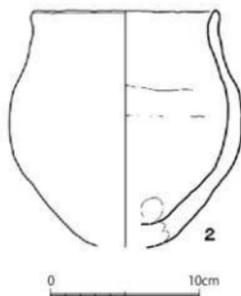


図6 SC001出土遺物実測図(S=1/3)

3. 遺構と遺物

主に調査区北側で遺構が確認されており、現況は西から東へと傾斜する地形となっている。南側は過去の削平により遺構は失われていた。

調査では竪穴式住居跡2基と土坑1基を確認できた。竪穴式住居跡はいずれも調査外に延びるため、調査区内で全形を検出することができていない。SC001は調査区北端で発見された弥生時代末から古墳時代初頭と考えられる竪穴式住居跡である。確認できた範囲では短軸約1.1m、長軸約1.8m、深さは最も深いところで40cmほどとなる。1は小型の甕もしくは壺である。内外面ともに調整は不明瞭であるが、内面に接合痕がみられる。下面が赤化しており、加熱されたものと考えられる。SC017はそのSC001にきられる形で確認された竪穴式住居跡である。確認できた範囲では短軸約1.6m、長軸約2.0m、調査区内深さは最も深いところで20cmほどである。図化できる遺物はなかった。SK003は調査区西端で発見された約60cm×70cm、深さ15cm程の土坑である。2は二重口縁壺の口縁部である。山陰系と考えられ、同一個体とみられる胴部片も発見されている。外面調整としては口縁部はヨコナデ、胴部は丁寧なヨコハケ、内面調整はケズリである。白色の胎色である。3は調査区掘削中に発見した石鐮である。縦・横両方向に十字に溝が彫られている。その他、コンテナケース1箱分の遺物が出土したものの、すべて破片であった。



図8. 飯倉A遺跡第4次調査調査区位置図(S=1/200)

4. まとめ

今回の調査で確認されたのは弥生時代末から古墳時代初期の竪穴式住居跡と土坑であった。調査区西側において行われた第1次調査においては、弥生時代後期から古墳時代初期にかけての竪穴式住居が発見されており、当該時期の集落がさらに東側にまで広がっていることが確認できた。

1920 博多遺跡群第232次調査 (HKT232)

所在地 博多区古門戸町24番
 調査原因 共同住宅建設
 調査期間 2019.9.3～2019.10.17
 調査面積 76.527㎡
 担当者 常松幹雄
 処置 記録保存

調査の概要

博多遺跡群は、博多浜と北側の沖ノ浜が大博通と明治通が交差する付近でつながっている。調査地は、沖ノ浜の北西部の西側に緩やかに傾斜する標高4.4mほどの地点にあたる。

第1面では中世末頃の石組井戸と近世の石積土坑が検出された。第2面では室町時代後期の土器の細片を多く混入した整地面を確認できた。第3面の暗黄灰色砂層では北側で素掘りの井戸が検出された。また東西方向にのびる鎌倉時代の溝状遺構を確認した。第4面の黄灰色砂層では第3面の溝に切られた砂層を掘りこんだ土坑が検出された。12・13世紀の平安時代～鎌倉時代頃と考えられる。第4面の土坑から出土した凝灰岩製の石造物は、須弥壇とよばれる台座付近の破片である。下瓶の明瞭な段や足端部の調整など、同種の石造物のなかでも古い特徴がうかがえる。出土遺物はコンテナケース30箱分の貿易陶磁器類・土師器等が出土した。



1. 調査地点の位置 (49 天神 0121 S=1/8,000)



2. 調査区全景 (北から)

1921 重留B遺跡第1次調査 (SGB1)

所在地 早良区重留5丁目301-1
 調査原因 戸建住宅建設
 調査期間 2019.6.5～2019.6.18
 調査面積 41㎡
 担当者 久住猛雄
 処置 記録保存

調査の概要

1. 位置と環境

重留B遺跡は、最近確認された周知の埋蔵文化財包蔵地である。主に弥生時代から古墳時代の遺跡である重留村下遺跡の南東に接し、早良平野東側の油山山麓西側給料裾部の扇状地斜面地形に立地している (Fig.1)。また東側の丘陵には重留古墳群がある。調査地点は、西側に低くなる緩斜面上で平坦に造成・整地された土地である。現地の標高は42.2～42.5m前後である (Fig.2)。

2. 調査の概要

調査対象は敷地のうち、駐車場の造成で遺構に影響が及ぶ北西側のみである (Fig.3)。地表下60～120cm前後で遺構を検出した。遺構検出面は、西側で標高41.4m前後、東側で41.9m前後である。検出面の地山は黄橙色～明黄褐色砂質土

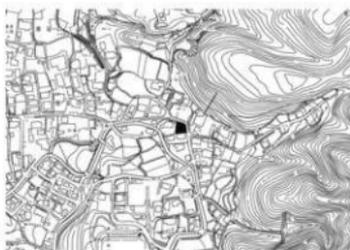


Fig.1 調査地点の位置 (85 入部 2896 S=1/8,000)



Ph.1 SX001 竪穴遺構全景 (南から)

で、丘陵の花崗岩風化土の二次堆積である。調査地周辺は近現代にも土石流があったらしく、調査地東側には比較的近年まで寺院があったが、土石流により流され移転したという。検出面下の地山中にも、さらに下げると花崗岩風化砂質土に混じり50cm以上の大型礫が多く混じる層もあり、古い時代から土石流があったらしい。

検出遺構 (Fig.4) は、褐色、暗褐色、極暗褐色の砂質土覆土として検出された。遺構にはピット、土坑、竪穴状遺構、および石組遺構がある。このうち石組遺構については出土陶磁器から近現代のものと判断した。その他の遺構は、出土遺物から主に中世および一部近世と考えられる。ただし縄文時代とみられる姫島産黒曜石に類似する薄い色を呈する黒曜石剥片が1点出土し、周辺 (丘陵側) に縄文時代の遺構の存在が考えられる。



Fig.2 調査地点の位置 (2) (S-1/2000)



Fig.3 調査地敷地図と調査範囲図 (S-1/2000)



Ph.2 調査区全景（東から）

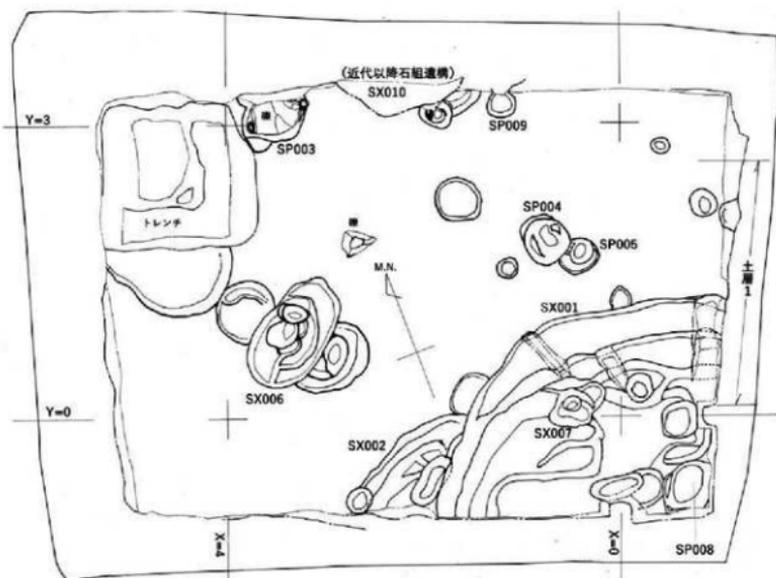


Fig.4 調査区全体図 (S=1/50)

出土遺物はパンケース 1 箱分がある。中世の土師器、瓦質土器、陶磁器などの破片や、近世以降の陶磁器片がある。その他、黒曜石割片が 1 点ある。

3. 検出遺構

検出遺構のうち、竪穴状遺構の SX001、SX002 (Fig.5、Ph.2) について報告する。

SX001 は径 5m 前後の略円形に復元できる竪穴状遺構で、調査区南東側で検出した。全体の約 1/4 を調査できたとみられる。深さ約 30cm の遺存で、北側周縁部が「ベッド」状に一段 (約 10cm) 高い。当初、弥生時代前期～中期の円形竪穴住居と考えて調査を開始したが、円形に並ぶ柱穴は見られず、出土遺物も中世の土師器の坏皿類や瓦質土器などの破片しかなく (Fig.6)、中世の竪穴状遺構と判断するに至った。出土遺物から (Fig.6-1～4)、13～14 世紀頃の遺構であろう。

SX002 は SX001 に切られる土坑ないし竪穴状遺構で、あるいは同様の竪穴状遺構の重複とも考えられる。出土遺物はないが、SX001 と同様中世であろう。

その他、SP003、SP009 などから中世の土器片が出土している (Fig.6)。廃土中からの出土だが龍泉窯系青磁碗の破片もあり、総じて中世 (12 世紀後半～15 世紀) の集落の広がりの一部であろう。

4. 出土遺物 (Fig.6)

1 は浅黄橙色～浅橙色を呈する瓦質ないし土師質の捏鉢の破片である。小片であり径の復元は不可で、図の傾きもやや不安がある。SC001-A トレンチ (東側トレンチ) 出土。2 は土師器の皿ないし坏。浅橙色。1/8 周未満からの径復元のため、径は前後する可能性がある。底面は回転系切痕。SX001 中層出土。3 は土師器の小皿。浅橙色。1/8 周からの径復元。底面は回転系切痕。SX001 最上層出土。4 は土師器の小皿。浅橙色。1/8 周からの径復元。底面は回転系切痕。SX001 中央土層ベルト上半層出土。5 は瓦質土器の湯釜 (茶釜) であろう。灰色を呈する。1/9 周前後からの径復元で、径は前後する可能性がある。SP003 出土。6 は土師器の坏。1/8 周からの径復元。浅黄橙色。底面は摩滅で調整不明だが、おそらく回転系切か。SP009 出土。7 は龍泉窯系青磁碗 II - 1 類 (「博多分類」)。1/8 周からの径復元で、傾きにはやや不安がある。鎚蓮弁文様を施すが、鎚の稜線が不明瞭である。廃土中の出土。

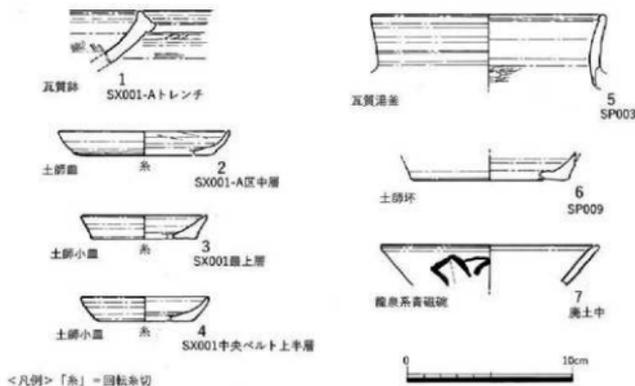


Fig.6 重留 B1 次出土遺物実測図 (S=1/3)

1922 箱崎遺跡第98次調査 (HKZ98)

所在地	東区箱崎6丁目10-1(旧工学部2号館跡地)
調査原因	学術研究(記録保存・HKZ1901)
調査期間	2019.6.12～2020.2.21
調査面積	2500㎡
担当者	九州大学埋蔵文化財調査室
処置	記録保存

調査の概要

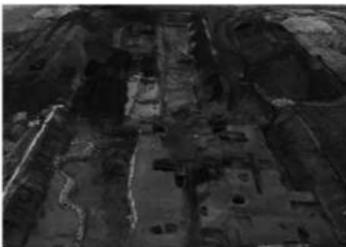
調査地は九州大学箱崎キャンパスの南部、旧工学部2号館跡地に位置する。10m×50mの調査区を5箇所設けた。

全体的に攪乱が多く遺構の残りは良くないが、各調査区で中世の土坑や溝を複数検出した。ただし、遺構・遺物の密度および量は調査面積に比して多くはない。C区では東西方向および南北方向にのびる幅1～2m程の溝を検出した。現状では元寇防塁廃絶後に形成された14世紀後半～15世紀代の区画溝と推定している。

また、各調査区で、自然堆積層を切り込んでいる溝状遺構を確認した。溝状遺構は幅15m程で、各調査区を跨いで北東から南西方向に続いている。形状や堆積の状況などから、この溝状遺構は、当調査室のこれまでの調査で確認してきた、元寇防塁に伴う溝状遺構の可能性が高いと判断した。なお、元寇防塁の石積は、本調査区では確認できていない。



1. 調査地点の位置 (34 箱崎 2639 S=1/8,000)



2. 調査区全景 (西から)

1923 箱崎遺跡第99次調査 (HKZ99)

所在地	東区箱崎6丁目10-1(旧応力研究生産研跡地)
調査原因	学術研究(記録保存・HKZ1903)
調査期間	2019.9.18～2020.4.1
調査面積	1,170㎡
担当者	九州大学埋蔵文化財調査室
処置	記録保存

調査の概要

第99次調査地点(HKZ1903)は、箱崎キャンパス南東部に位置する。応力研究生産研本館の建物基礎撤去にともない調査が行われた。建物跡の北西部にA区、南西にB区、北東にC1区、南東にC2区の4調査区をそれぞれ設けた。A・B区では合計20基以上の中世の井戸が出土した。一方で、C1区・C2区では井戸は1基にとどまった。これは浜堤および鞍部の位置と関係するものと考えられ、地形復原に寄与する結果と言える。C1区・C2区では、100基以上の土坑・ピットが検出された。宮崎宮に続く大学通りに近く、当時から地盤が安定していた場所と推測される。また、東西方向に延びる区画溝も3条検出されている。遺物整理は今後実施するが、龍泉窯系の青磁碗が数多く検出されているほか、馬の歯が3つの土坑から検出された。調査の成果は中世箱崎北縁部の様相を把握するうえで、極めて重要である。



1. 調査地点の位置 (34 箱崎 2639 S=1/8,000)



2. 調査区全景 (西から)

1924 史跡福岡城跡第78次調査 (FUE78)

所在地	中央区城内5-2
調査原因	史跡整備
調査期間	2019.11.26～継続中
調査面積	303㎡
担当者	井上蘭子・赤坂亨 史跡整備活用課
処置	現状保存

調査の概要

福岡城跡祈念櫓石垣は福岡城本丸の北東隅に位置している。鬼門封じのために祈念櫓が建立された石垣であるが、経年により石の孕み出しが見られ、崩壊の危険性が高まったために石垣の積み直し工事を行うこととなった。石垣の解体に先立ち、石垣天端の発掘調査を行ったところ、祈念櫓の礎石列が確認された。基盤は丘陵由来の粘質土を版築状に整地しており、礎石下は栗石を充填して基礎を作っている。天端の発掘調査後に石垣の解体を行った。石垣の積み方は打ち込み剥ぎで、栗石には加工した花崗岩が用いられている。解体時に判明した状況は、背面は栗石が2mほどの幅で充填され、さらに内側には福岡城が築造された丘陵由来の粘質土が盛土として充填されている。

現在は石の積み上げを行っている。令和3年度に竣工予定である。



1. 調査地点の位置 (60 舞鶴 0193 S=1/8,000)



2. 東側調査区全景 (南西から)

1925 箱崎遺跡第100次調査 (HKZ100)

所在地	東区馬出5丁目365番、369番
調査原因	共同住宅建設
調査期間	2019.6.17～2019.7.30
調査面積	101.5㎡
担当者	三浦悠葵
処置	記録保存

調査の概要

箱崎遺跡は博多湾に面した砂丘上に位置する。第100次調査地点は、砂丘の南西側に立地し、鞍部の谷に差し掛かる場所に位置する。

調査では、地表から約1m掘り下げた地点で遺構面を検出した。遺構は溝1条と土壇、柱穴、多数のピット等を検出した。溝と柱穴、ピットの多くは中世の遺構であり、一部の柱穴には根石がみられた。これらの遺構からは12世紀から13世紀を中心とした白磁、龍泉窯系青磁、土師皿、瓦器碗、石鍋、滑石製石鍾などが出土した。土壇と一部のピットは近世のものであり、銭や18世紀頃の肥前系陶磁器などが出土した。

以上より、本調査地とその周辺地域では、12～13世紀をピークとして、中世から近世の集落が形成されていたと考えられる。



1. 調査地点の位置 (34 箱崎 2639 S=1/8,000)



2. 調査区全景 (南西から)

1926 麦野 A 遺跡第 28 次調査 (MGA28)

所在地	博多区麦野 1 丁目 27-13
調査原因	共同住宅建設
調査期間	2019.7.1 ~ 2019.8.1
調査面積	206㎡
担当者	今井隆博
処置	記録保存

調査の概要

第 28 次調査地点は遺跡のほぼ中央に位置する。調査前は東西両側の道路よりも高く、標高 15.5 m 前後であった。表土を除去した後の鳥栖ロームの上面で遺構を検出した。遺構面の標高は調査区東端で 14.7 m、調査区西端で 14.0 m 前後で、南西に向かって低くなる緩斜面である。検出した遺構は、古代の竪穴住居 1 軒、柱穴多数、時期不明の掘立柱建物 1 棟である。竪穴住居は歪んだ方形で、西壁にカマドを有する。カマドは破壊され、周辺に白色粘土・焼土が散在し、土師器・須恵器の破片が投棄されていた。出土物は古代の土師器・須恵器が主で、コンテナケース 2 箱分である。

今回の調査では、古代の集落の広がりを確認することができた。一方、東側に位置する 6 次調査では中世の城館を囲む方形区画の堀と推定される溝が検出されているが、本地点では明確な中世の遺構は見られなかった。



1. 調査地点の位置 (12 麦野 0048 S=1/8,000)



2. 南側調査区全景 (東から)

1927 飯倉 C 遺跡第 8 次調査 (IKR-C8)

所在地	城南区七隈 2 丁目 834 番 3 の一部
調査原因	専用住宅建設
調査期間	2019.7.1 ~ 2019.7.22
調査面積	91.1㎡
担当者	蔵富士寛
処置	記録保存

調査の概要

飯倉 C 遺跡は、早良平野の東側にあり、南北方向に細長く伸びる低丘陵である飯倉丘陵の北東側に位置する。

第 8 次調査地点は遺跡範囲の東端、丘陵の東側斜面にあたる。周辺では北側隣地で第 9 次調査、北側近くで第 5 次調査が行なわれている。

調査地点は過去の開発等により激しく地形改変を受けており、遺構が確認できるのは調査区東半の傾斜地のみである。主な遺構として、弥生時代後期の竪穴住居、古墳時代前期の溝を挙げることができる。竪穴住居は方形プランで、一辺にベッド状遺構を持つ。溝には直線状、及び L 字状をなすものがあり、排水等を目的として建物施設の周囲に巡らし掘削されたものだろう。

遺物は弥生土器・土師器がコンテナケース 1 箱分出土した。



1. 調査地点の位置 (73 茶山 0246 S=1/8,000)



2. 調査区全景 (東から)

1928 飯倉C遺跡第9次調査 (IKR-C9)

所在地	城南区七隈2丁目834番3の一部
調査原因	戸建住宅建設
調査期間	2019.7.23～2019.8.9
調査面積	50.3㎡
担当者	蔵富士寛
処置	記録保存

調査の概要

飯倉C遺跡は、早良平野の東側にあつて南北方向に細長く伸びる低丘陵である飯倉丘陵の北東側に位置する。当調査地点は遺跡の東端、丘陵の東側斜面にあたる。周辺では南側の隣地で第8次調査、北側近くで第5次調査が行なわれている。

調査地は激しく削平を受けており、遺構が確認できるのは調査区東半の傾斜地のみである。主な遺構として、弥生時代後期の竪穴住居、古墳時代前期・鎌倉時代の溝を挙げることができる。竪穴住居は方形プランで、一边にベッド状遺構を持つ。古墳時代の溝は幅30～40cmほどで、住居の壁溝、もしくは住居の周囲に巡らしたものだらう。

今後調査資料の整理を行ない、隣接する第5・8次調査の成果と重ね合わせることで、集落の具体像がより明らかとなることが期待される。



1. 調査地点の位置 (73 茶山 0246 S-1/8,000)



2. 調査区全景 (北東から)

1929 那珂遺跡群第176次調査 (NAK176)

所在地	博多区那珂一丁目556番1、569番、568番
調査原因	専用住宅建設
調査期間	2019.6.28～2019.7.12
調査面積	126㎡
担当者	朝岡俊也
処置	記録保存

調査の概要

那珂遺跡群は福岡平野の中央部、御笠川と那珂川に挟まれた中低位段丘上に位置する。第176次は遺跡範囲のやや北寄りの頂部付近に立地する。

1. 調査に至る経緯

平成31年4月17日、当該地における埋蔵文化財の照会が提出された(事前審査番号2019-2-79)。工事の計画は個人住宅で、令和元年5月31日の確認調査により、柱穴等の遺構が確認された。計画建物は全体に地盤補強を行う予定であったため、埋蔵文化財への影響が避けられず、建物範囲を対象に国庫補助金による発掘調査を実施することとなった。

2. 遺構と遺物

調査地は南東から北西に向かって下る地形を平坦に造成して



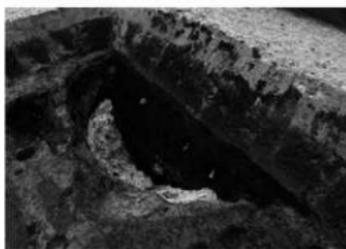
1. 調査地点の位置 (37 東光寺 0085 S-1/8,000)



2. 調査区全景 (南から)

おり、南東側隣地との比高差が1.2m程ある。そのため、調査区南東側はすでに削平されており、遺構は残っていないかった。北西側も少し削平されており、検出遺構は2基の井戸と1条の溝、数基の小穴のみであった。遺構検出面の深さは現地表面から0.7～0.8m程で、標高6.5～6.6mを測る。

地山は遺構検出面で地山a（鳥橋ローム層）、遺構検出面から0.2～0.3mで地山b（漸移層）、遺構検出面から0.5～1.0mで地山c（八女粘土層）と変化する。



3. SE01 完掘状況（東から）

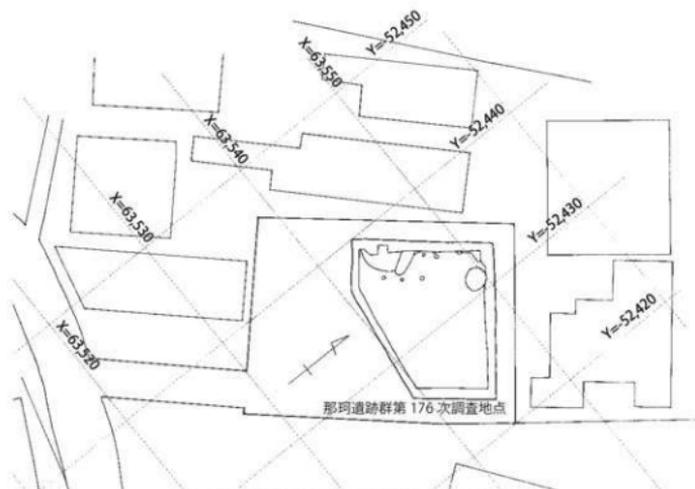
SE01

調査区西側で検出した。北東側に階段状のステップが付属し、この部分を合わせた長径が4.6m、短径が3.4m程になると考えられる。調査区壁にかかっており、半分しか掘削できず、深さ1.6mで底に達したが、最後に重機で中央部を拡張したところ、中心に暗灰褐色粘質土（底付近で青灰色化）を埋土とする水溜状の掘り込みを確認した。水溜底の検出面からの深さは2.3mとなる。底には多数の杭（？）を打ち込んだような痕跡がみられた。ステップには少し細かい砂利を敷く。このステップは①井戸使用時の水汲み用の足場、②井戸掘削時の作業用の足場の2つの可能性が考えられる。後者であれば、井戸枠を設置したのちステップは埋め戻されたことになるが、土層および検出した水溜に井戸枠の痕跡はみられない点から、前者の可能性が高いと考えたい。なお、井戸を囲むように深さ0.1～0.2mの柱穴が並んでおり、覆屋（井桁とするには大きすぎる）のような施設が存在した可能性がある。

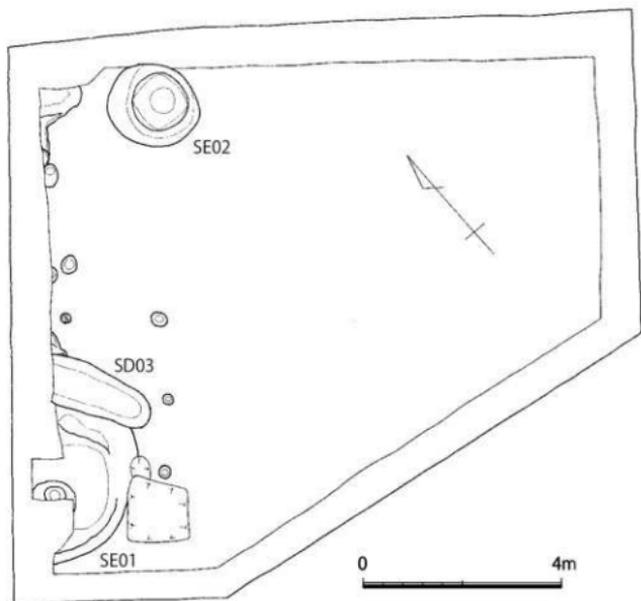


4. SE01 底部の杭痕跡（北西から）

1～9は須恵器。1・2は坏蓋。1は下層から出土。口縁部の一部を欠くほぼ正形。口径13.3cm。口縁端面内面を強くナデる。2は復元口径12.3cm。3は坏身。復元口径9.8cm。4はヘラ切り未調整で、坏身として円化したが蓋かもしれない。5は甕。6は壺。底部外面には回転ケズリが施されるが、強くナデ消して痕跡があまり残らない。



5. 那珂遺跡群第176次調査区位置図 (S=1/400)



6. 那珂遺跡群第176次調査区全体図 (S-1/100)

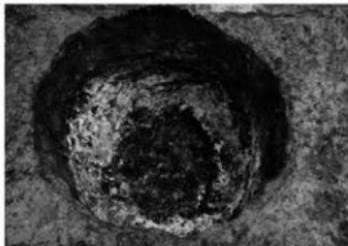
7～9は高坏。7は脚部内面にヘラ記号がある。8はやや歪んでいる。10～14は土師器。10は坏。内外をミガいていそうだが、明確な痕跡はない。外面はケズリの痕跡あり。11は壺。1/4片で傾き・径はやや不明確。12は高坏。13は把手。傾き不明確。14は埴。15～17は弥生土器。15は壺。摩滅しているが、わずかに丹塗りの痕跡がある。16は器台。17は手づくね土器。胎土や摩滅具合から弥生土器と判断した。18は青磁碗。12世紀後半埴。19は石包丁。赤紫色泥岩(立岩)製で、刃部の境は不明瞭。20は砥石。砂岩製。石材分割のための溝の痕跡(?)がある。21～24は瓦で、全て上層から出土。21・23は土師質。22・24は瓦質で、24は鴟尾か。上層に遺物を多く含み、新しい遺物は全て上層からの出土である。井戸としての使用期間は6世紀後半～7世紀前半頃と考える。しばらくは窪みが残り、中世までゴミ穴等に利用されたのだろう。

SE02

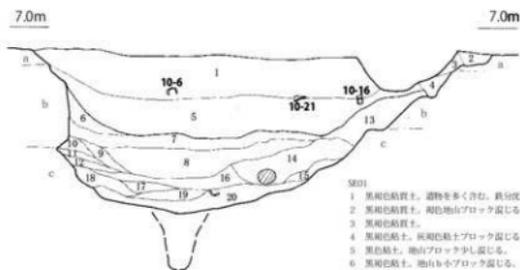
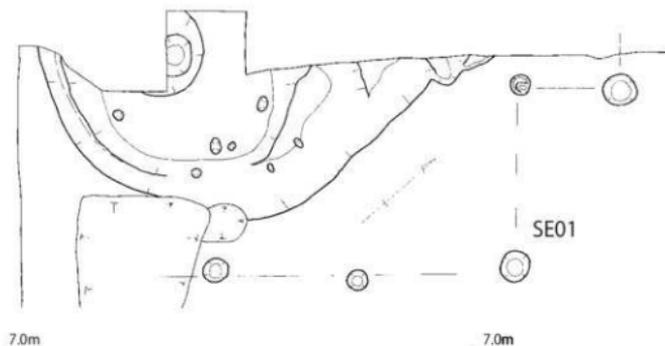
調査区北側で検出した。径1.65～1.9mの円形の掘方を持ち、検出面からの深さは1.8m程である。上層は井戸枠が抜き取られたような土層だったが、中層以下では井戸枠の痕跡が捉えられた。時間的な制約および安全上の問題から、井戸枠の痕跡を十分に記



7. SE02完掘状況(南から)



8. SE02井戸枠検出状況(南から)

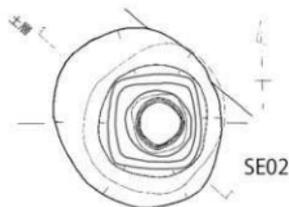


SE01

地山
a 烏納ローム層
b 溝床層
c 八女粘土層

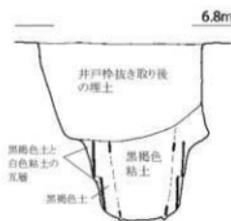
- SE01
- 1 黒褐色粘質土。遺物を多く含む。真分度高。
 - 2 黒褐色粘質土。褐色地山ブロック盛じる。
 - 3 黒褐色粘質土。
 - 4 黒褐色粘土。灰褐色粘土ブロック盛じる。
 - 5 黒色粘土。地山ブロック少し盛じる。
 - 6 黒褐色粘土。地山b小ブロック盛じる。
 - 7 黒色粘土。
 - 8 黒色粘土。地山b小ブロック盛じる。
 - 9 黒褐色粘土。地山a-c小ブロック盛じる。
 - 10 明褐色粘土。地山b小ブロック盛じる。締まり弱い。

- 11 黒色粘土。
- 12 黒褐色粘土。
- 13 黒褐色粘土。地山b-cブロック盛じる。
- 14 黒色粘土。灰褐色粘土ブロック盛じる。
- 15 明褐色粘質土。地山c小ブロック盛じる。締まり弱い。
- 16 明褐色粘土。
- 17 明褐色粘土。地山cブロック少量盛じる。
- 18 明褐色粘土。地山c赤土。
- 19 黒褐色粘土。地山cブロック盛じる。
- 20 黒色粘土。締まり弱い。

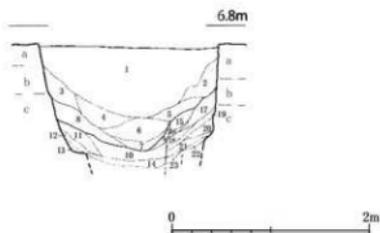


- SE02
- 1 明褐色粘質土。砂粒わずかに含む。遺物を多く含む。
 - 2 黒褐色粘土。
 - 3 黒褐色粘土。
 - 4 明褐色粘土。
 - 5 黒褐色粘土。
 - 6 黒色粘土。
 - 7 明褐色粘土。
 - 8 明褐色粘土。地山c-明褐色粘土ブロック盛じる。
 - 9 明褐色粘土。地山cブロック盛じる。締まりや中強い。
 - 10 黒色粘土。締まりや中強い。

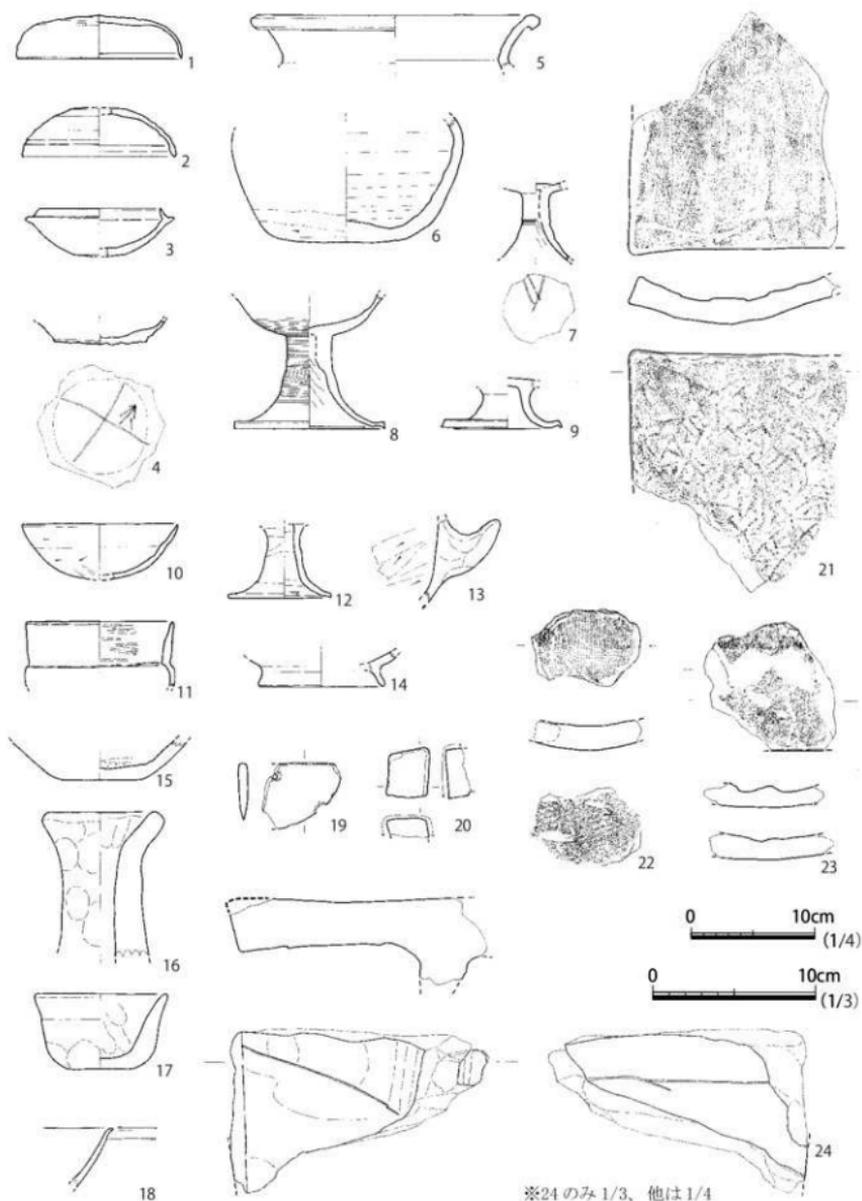
- 11 黒色粘土。地山cブロック多く盛じる。
- 12 黒色粘土。
- 13 灰褐色粘土。締まりや中強い。地山c赤土。
- 14 灰褐色粘土。締まりや中強い。地山c赤土。
- 15 黒色粘土。灰褐色粘土小ブロック少し盛じる。
- 16 黒色粘土。
- 17 黒褐色粘土。地山bブロック盛じる。
- 18 明褐色粘土。地山c赤土。
- 19 黒褐色粘土。灰褐色粘土ブロック盛じる。
- 20 灰褐色粘土。地山c小ブロック少し盛じる。
- 21 黒色粘土。明褐色粘土盛じる。
- 22 灰褐色粘土。地山c小ブロック盛じる。締まり弱い。
- 23 黒褐色粘質土。



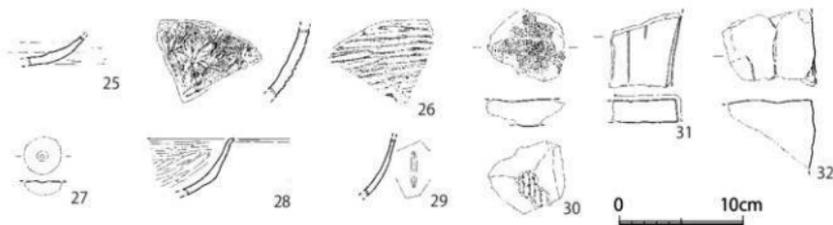
井戸枠断面模式図



9. SE01・SE02 実測図・土層断面図 (S=1/50)



10. SE01 出土遺物実測図 (S=1/3・1/4)



11. SE02・SD03出土遺物実測図 (S-1/3)

録できなかったが、中層以下で埋土の上面検出を行ったところ、中央部に円形の木質痕跡の内部に粘性の強い黒褐色土が、その外側に方形に黒褐色土が、さらにその外側に黒褐色土と白色粘土(八女粘土層由来)の互層がみられ、方形井戸枠の中に円形井戸枠が存在することが明確に観察された(中層以下は調査担当者が自ら掘削を行い、その途中で気付くことができた)。底部では円形井戸枠の圧痕も観察された。方形井戸枠は段構造になっており、下層の井戸枠が上層井戸枠よりも小さい。円形井戸枠は中層よりも下層の方が径が小さくなるが、これが方形井戸枠同様に段構造によるものか、枠自体がすぼまっているのか観察することはできなかった。遺構の時期から、円形井戸枠は列り抜きによるものだろうか。井戸枠を二重に設置する理由について、報告者は判断する十分な知見をもたないが、外側の方形井戸枠は安全に井戸を掘削するための土留めであった可能性も考えておきたい。

25・26は須恵器。25は坏身として図化したのが、蓋かもしれない。26はタタキと当て具の痕跡が特徴的で、中世須恵器か。27は土師器で、高坏の円盤充填部。精良で真っ白な胎土が特徴的。28は黒色土器A類(内黒)の碗。29は越州窯系青磁碗。30は瓦。須恵質。遺物の時期は幅があるが、方形井戸枠の存在から、SE01に近い時期と考えたい。

SD03

SE01を切る溝状の遺構で、調査区外に伸びる。幅は0.9m程で、長さは2.1mを検出した。

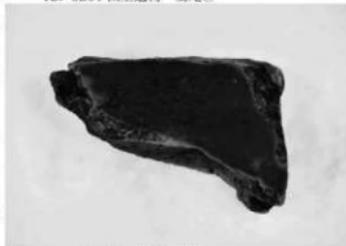
31は砥石。灰色の砂岩製で、微細な白雲母を多く含む。溝条痕が2条あり、砥ぎ面は少し被熱を受ける。32は玄武岩製か。四角く整えられており、表面に被熱を受ける。図化した面は平滑になるように手が増えられている。金床か何かだろうか。

まとめ

今回の調査では、6世紀後半～7世紀に使用されたと考えられる井戸を2基検出した。素掘りと考えられるSE01では砂利を敷いた階段状のステップが検出され、水汲み用の足場と考えられる。二重の井筒を持ち、釣瓶等を用いて水を汲んだと考えられるSE02と対照的で、覆屋の存在が示唆される点からもSE01は祭祀的行為に用いられた井戸の可能性が考えられる。井戸の中に降りていき、水を汲む所作が必要だったのかもかもしれない。



12. SE01出土遺物 簡尾①



13. SE01出土遺物 簡尾②



14. SE01出土遺物 簡尾③

1930 原遺跡第36次調査 (HAA36)

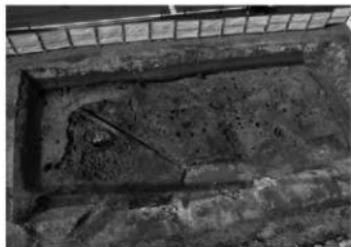
所在地	早良区原6丁目629番1
調査原因	店舗建設
調査期間	2019.7.8～2019.9.6
調査面積	192㎡
担当者	吉田大輔
処置	記録保存

調査の概要

原遺跡は、早良平野の中央を流れる室見川中流の東岸に位置し、標高約6～7mの低位段丘上に広がっている。第36次調査地点は、遺跡範囲の北東端にあたる。本調査では、現地表面下約1mで遺構を検出した。検出した遺構は、弥生時代中期後半の掘立柱建物2棟、土坑6基、溝状遺構2条、古代・中世(10～12世紀)の井戸、中世(13～14世紀)の掘立柱建物1棟以上、小穴多数、自然の落ち込み等である。このうち、弥生時代中期後半の掘立柱建物2棟・自然の落ち込みは、南側の20次調査で確認されていたものの延長である。出土した遺物は、弥生時代中期後半の土器が最も多く、古代・中世の土師器・青磁片等が少量あり、遺物の総量はコンテナケース4箱分と少なかった。今回の調査では、遺跡範囲の北東端部における弥生時代から中世にかけての集落の展開と当該期の様相をうかがえる成果が得られた。



1. 調査地点の位置 (82 原 0311 S-1/8,000)



2. 調査区全景 (南から)

1931 三宅遺跡群第7次調査 (MYK7)

所在地	南区南大橋1丁目1169-1、1170-4
調査原因	共同住宅
調査期間	2019.7.22～2019.10.25
調査面積	276.0㎡
担当者	三浦萌・加藤良彦
処置	記録保存

調査の概要

三宅遺跡群は主に奈良～平安時代の遺跡によって構成されている遺跡群である。その範囲には三宅瓦窯跡、三宅野瓦窯跡、大橋C・D遺跡、三宅A遺跡などが含まれている。今回の調査地は三宅遺跡群第1次調査地点の北東に位置しており、遺跡の端にあたる。

第7次調査では、調査区南西部において2間×3間の掘立柱建物が1棟と土坑やピットが多数確認された。出土遺物は瓦類を中心に須恵器、土師器、円面硯などがあり、時期はおよそ奈良時代である。また調査区東部では水田跡が確認され、出土した遺物などから中世の水田面であると考えられる。

当調査区の南西部では第1次調査が行われており、その際に三宅廃寺に関係するとされる遺構が発見されている。このことから今回の調査において発見された古代の遺構も、三宅廃寺に関連するものである可能性が高い。



1. 調査地点の位置 (39 三宅 2825 S-1/8,000)



2. 調査区Ⅱ区全景 (東から)

1932 中ノ原遺跡第6次調査 (NHH6)

所在地	博多区光丘町二丁目5番
調査原因	戸建住宅建設
調査期間	2019.7.18～2019.8.9
調査面積	305㎡
担当者	池田祐司
処置	記録保存

調査の概要

第6次調査地点は遺跡範囲西側の丘陵落ち際に位置する。検出した遺構は方形の竪穴遺構3基(住居跡)、土坑3基、ピットである。竪穴遺構は1基が弥生時代中期、2基から8世紀の遺物が出土した。SC021には張り出し部に煙道付きのカマドが付帯していた。このカマドでは廃棄後の白色粘土上でほぼ完形の須恵器の短頸壺1個、環2個が出土した。環の底部外面には「足立寺」とも読める墨書がみられる。土坑SK022は長楕円形の浅いくぼみ状でSC021を切り、8世紀の遺物が出土する。SK023は150×100cm、深さ90cmの規模で落とし穴の可能性が考えられる。出土遺物は主に須恵器、土師器、弥生土器、黒曜石等が出土している。これまでの調査でも8世紀を主とした竪穴遺構が出土しており、奈良期の集落の広がりが予想できる。



1. 調査地点の位置 (13 雑領限 2816 S-1/8,000)



2. 調査区南半全景 (南東から)

1932 井尻B遺跡第44次調査 (IGB44)

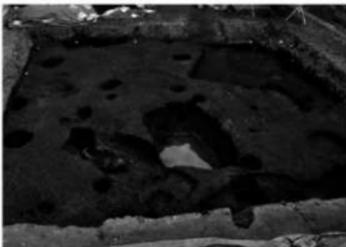
所在地	南区井尻1丁目731番1、732番4、732番12
調査原因	専用住宅建設
調査期間	2019.7.24～2019.8.18
調査面積	68㎡
担当者	荒牧宏行
処置	記録保存

調査の概要

中位段丘面からなる井尻B遺跡の北端に位置する。検出面のローム層は標高11.4m前後を測り、北東に向かって緩やかに下降する。検出された主な遺構は弥生中期中頃の甕棺1基、弥生後期の竪穴住居跡2軒、土壇1基、掘立柱建物2棟、古代の土壇2基である。甕棺墓群は南西に位置した16次、17次E区で検出され、墓域が本調査区まで展開していることが判った。しかし、本調査区北側では後期になると竪穴住居跡が築造され、墓域が途切れる。遺構の主軸方位は各時期によって異なる。弥生中期の甕棺は鉢と中型の甕を合口にし、下甕を横穴に挿入している。甕棺の埋置角度は水平に近い。弥生後期の竪穴住居跡は造付と貼付のベッドを有する。掘立柱建物の柱穴は深く、柱痕は径30～40cmを測り倉庫が主であろう。古代とみられる土壇2基は同じ主軸方位をとるが、規模、深さが大きく異なる。



1. 調査地点の位置 (24 板付 0090 S-1/8,000)



2. 調査区全景 (南西から)

1934 弥永原遺跡第16次調査 (YNB16)

所在地	南区曰佐3丁目42-1
調査原因	学校施設建設
調査期間	2019.8.1～2019.9.4
調査面積	90㎡
担当者	松崎友理
処置	記録保存

調査の概要

弥永原遺跡第16次調査地点は春日市との市境に位置する福岡女学院校内にあり、遺跡範囲の中央部南寄りに位置している。南北にのびる丘陵から西に派生した小丘陵の南側緩斜面に立地し、地表面の標高は約25.6mを測る。

平成30年度に実施した第15次調査(1828)後の設計変更に伴い建築面積が拡大したため、今回調査では第15次に隣接する約90㎡の敷地が対象となった。

検出した遺構は大型甕棺墓1基、小型甕棺墓3基、木棺墓4基、土壇墓7基、不明遺構1基、溝2条などである。また、隣接する第15次調査と同様に、小型の甕棺墓と土壇墓は調査地の南東側に集中する傾向がうかがえる。



1. 調査地点の位置 (26 上曰佐 0105 S=1/8,000)



2. 甕棺墓検出状況 (南西から)

1935 博多遺跡群第233次調査 (HKT233)

所在地	博多区冷泉町474-1
調査原因	事務所ビル建設
調査期間	2019.8.19～2019.9.30
調査面積	43.9㎡
担当者	三浦悠葵
処置	記録保存

調査の概要

博多遺跡群は、那珂川・御笠川の河口に形成された3列の砂丘上に立地しており、第233次調査地点は2列目の砂丘の南端付近に位置する。近隣では北側で第10次・第209次が実施され、南側の第148次では、12世紀後半を中心とした遺構から、土師器、貿易陶磁器、青銅器の鋳型などが出土した。調査では、地表から約3m掘り下げた地点で、15-16世紀の遺構、更に30cm掘り下げた地点で、12-13世紀の遺構を確認した。15-16世紀の層では、大型土壇9基のほか、多数の柱穴、ピットを検出した。大型土壇は廃棄土坑で土師器の皿・碗、白磁・青磁碗、耳壺、鞆の羽口、銭などが出土した。柱穴・ピットからは土師器、白磁、青磁、瓦片などが出土した。以上の調査結果から、本調査地点とその周辺地域には、12-13世紀、15-16世紀を中心とした集落が存在していたことが明らかとなった。



1. 調査地点の位置 (49 天神 0121 S=1/8,000)



2. 廃棄土坑内遺物出土状況 (北西から)

1936 麦野 A 遺跡群第 29 次調査 (MGA29)

所在地 博多区麦野 2 丁目 17-1
 調査原因 戸建住宅建設
 調査期間 2019.8.19 ~ 2019.8.26
 調査面積 61.0㎡
 担当者 池田祐司
 処置 記録保存

調査の概要

1. 調査に至る経緯

平成 29 年 5 月 31 日付けで当該地における埋蔵文化財の照会があった (2019-2-256)。同年 6 月 17 日に現地を確認調査を行い、地表下 40cm の鳥柵ローム上面で遺構を確認した。建築物の基礎工事で地盤補強を行うため、遺跡への影響が避けられないため、協議の結果、建物建設範囲について発掘調査を行うことで合意した。

2. 調査の記録

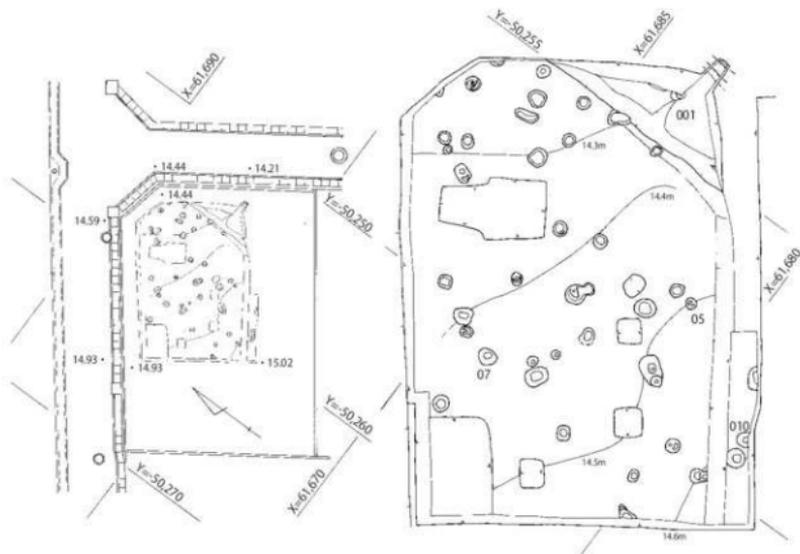
麦野 A 遺跡は北北西に延びる丘陵上に広がり、第 29 次調査地点は丘陵頂部から東へやや下がった緩斜面に位置する。排土置き場の関係から東西に反転して調査を行った。暗茶褐色、黒褐色の表土を除去した鳥柵ローム上面が遺構面で、北へ向かって緩やかに下がり、標高 14.6 ~ 14.3 m である。検出した遺構は溝 1 本とピットで覆土は主に黒褐色土である。遺物はコンテナケース 1 箱弱が出土した。



1. 調査地点の位置 (25 井尻 0048 S=1/8,000)



2. 麦野 A 遺跡第 29 次調査区東半全景 (南西から)



3. 調査区位置図 (S=1/300)

4. 遺構配置図 (S=1/100)

SD01

調査区西端で確認した溝で、ほぼ南北方向に延び、延長2.9mを確認した。横断面は逆台形で上端の幅1.95m、底の幅1.4m、深さ65cmを測る。壁は急に立ち上がり、確認した場所では特に東側が立つ。覆土はしまりのない黒褐色土でやや粘質の土壌で、中央から両側に黄色ブロックを多く含む。底と壁沿いが埋没した後に、一気に埋まった感がある。遺物は覆土から少量の須恵器、土師器、弥生土器が出土した。

1は須恵器の甕で1/4からの復元。頸部外面には縦方向に2本ずつの沈線が施す。2は須恵器の脚で、内外になで調整を施し外面に粘土の付着がみられる。3は須恵器環の蓋で1/4の破片。4は須恵器の口縁部でへら書きがみられる。5は土師器の甕、6は弥生中期の甕の底部である。溝の時期は少ない遺物から8世紀を想定している。

ピット

径25～35cmのピットを確認したが浅いものが多い。SP10には底に石が据えられており柱穴と考えられる。10基から遺物が1～数点出土しているが、建物の展開は確認できない。

7はSP05出土の黒色土器で内面は黒色磨研、外面は灰色を呈す。8はSP010出土の須恵器の破片で高台が付くと考えられる。9はSP08出土の黒曜石の剥片で基部を切断し、端部には一部自然面が残る。厚手で風化がやや進んでおり旧石器時代の遺物と考えられる。

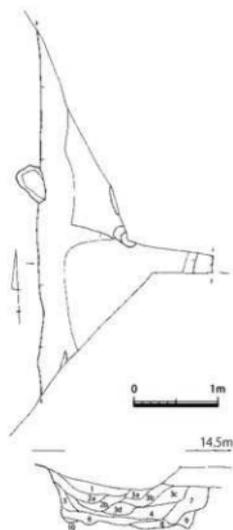
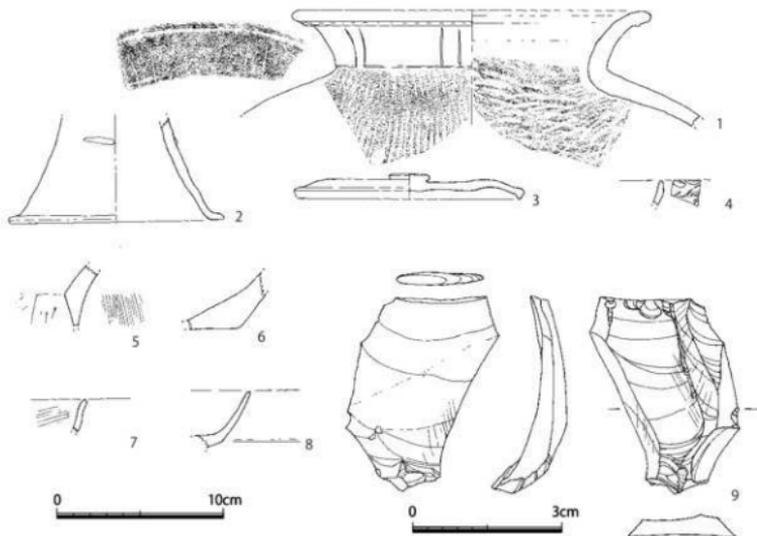


図5上層

- 1 須恵器土
- 2 黒褐色土より厚い
- 3 黄色土ブロック多い
- 4 黄色土ブロック多い
- 5 中層から出土須恵器土
- 6 同色多い
- 7 同色多い
- 8 同色多い
- 9 同色多い
- 10 同色多い
- 11 同色多い
- 12 同色多い
- 13 同色多い
- 14 同色多い
- 15 同色多い
- 16 同色多い
- 17 同色多い
- 18 同色多い
- 19 同色多い
- 20 同色多い

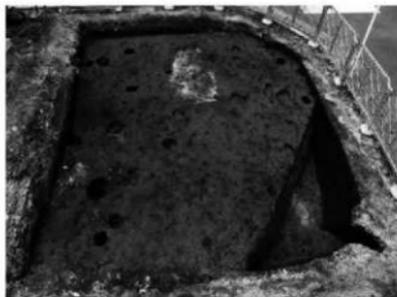
5. SD001実測図 (S=1/60)



6. 出土遺物実測図 (S=1/3, 1/1)

3 おわりに

第29次調査では南北に走る溝を確認した。周辺の調査、試掘ではその延長は確認できていない。今後の調査で注意する必要がある。また、旧石器時代と考えられる遺物が出土したため、一部遺構面を掘り下げたが、遺物の出土はなかった。



7. 調査区東半全景（南から）



8. 調査区西半全景（南から）



9. SD001（北から）



10. SD001 土層断面（北から）



11. SP010（北西から）



12. 遺構検出時（から）

1937 博多遺跡群第 234 次調査 (HKT234)

所在地	博多区店屋町 202 番 1、2、203 番、204 番 1
調査原因	ホテル建設
調査期間	2019.8.19 ~ 2019.10.11
調査面積	130.5m ²
担当者	木下博文
処置	記録保存

調査の概要

博多遺跡群は、博多湾に面した 3 列の東西方向の砂丘上に立地する。今回の調査地点は、遺跡の中央部南西に位置し、海寄りの砂丘である沖浜と内陸の砂丘である博多浜に挟まれた谷地形の中にあたる。周辺の調査では中世後期の陶磁器一括埋納遺構や理め立て遺構が検出されており、中世から近世にかけて一帯が理め立てられて土地利用がなされる様子が明らかになっている。

第 234 次調査では、計 4 面の調査を実施し、近世の井戸、中世の土坑、ピットを検出した。それ以下は、湧水が起る砂層となっており、湿地であることを示している。

遺物はコンテナケース 13 箱分の土師器、中世貿易陶磁器、国産陶器類が出土した。



1. 調査地点の位置 (49 天神 0121 S-1/8,000)



2. 調査区全景 (西から)

1938 博多遺跡群第 235 次調査 (HKT235)

所在地	博多区祇園町 149-4 他 6 筆
調査原因	ホテル建設
調査期間	2019.8.20 ~ 2019.9.25
調査面積	40.0m ²
担当者	今井隆博
処置	記録保存

調査の概要

博多遺跡群は御笠川と那珂川に挟まれた博多湾岸の砂丘上に立地し、南北 1.6km、東西 0.9km の広がりを持つ。今回の調査地点は博多浜の最高所付近にあたる。調査前の標高は約 5.8 m で、4.3 m ~ 3.5 m 付近において 5 面の調査を行った。

検出した遺構は、古代・中世・近世の土坑・溝・柱穴等である。中世の土坑からは、陶磁器が多数出土した。また、第 4 面では古代の土師器・須恵器をまとめて投棄した土坑があり、刀子やハサミ状 (トンダ状) の鉄器も出土した。

本地点からの出土遺物は、古墳時代の土師器、奈良時代の土師器・須恵器、中国製陶磁器、国産陶磁器等で、コンテナケース 30 箱分である。墨書陶磁器には「張」や「綱」といった中国商人に関係する文字が見られ、「夏」と思われる文字が書かれた天目椀も出土している。滑石製硯やガラス製丸玉の他、椀形滓や流動滓といった鍛冶関連遺物も出土した。



1. 調査地点の位置 (49 天神 0121 S-1/8,000)



2. 西側調査区全景 (南から)

1939 箱崎遺跡第101次調査 (HKZ101)

所在地	東区箱崎3丁目2395-5他3筆
調査原因	専用住宅兼共同住宅
調査期間	2019.9.2～2019.11.8
調査面積	175.0㎡
担当者	神啓崇
処置	記録保存

調査の概要

箱崎遺跡は博多湾岸東側の砂丘上に立地し、中世を中心とする遺跡である。第101次調査地点は、遺跡範囲の北東部に位置する。対象地内の建設工事により埋蔵文化財に影響を受ける範囲について調査を実施した。

調査では鎌倉時代から室町時代にかけての町家跡等の痕跡を示す柱穴や土坑、溝等の遺構を確認した。井戸や隣の町家との境界を示す溝、土師器皿・坏の廃棄土坑、馬骨を捨てた溝、土壌墓などを検出した。

遺物はコンテナケース45箱分が出土した。土師器が主体だが、白磁・青磁碗、皿も出土している。中世箱崎の街並み・町家のつくりを考えるうえで重要な成果を得た。



1. 調査地点の位置 (34 箱崎 2639 S=1/8,000)



2. 1区第2面全景 (南西から)

1940 箱崎遺跡第102次調査 (HKZ102)

所在地	東区箱崎6丁目10-1
調査原因	都市計画道路建設
調査期間	2019.8.19～2020.2.28
調査面積	2712.76㎡
担当者	蔵富士寛
処置	記録保存

調査の概要

調査地点は箱崎遺跡の北側に位置し、現地表下1.3m、標高2.2m前後の砂丘面を中心に平安時代終わりから鎌倉時代、室町時代、江戸時代に相当する遺跡の調査を行なった。

検出した遺構には、墓、井戸、溝、土坑、ピット(小穴)などがある。墓は調査で最も注目される遺構であり、その内の2基は全身が分かる人骨が確認できた。いずれも木棺を使用し、中国製青磁を副葬しており、12世紀後半に位置付けることができる。井戸は7基程を検出した。井戸側の違いにより3種に分類することができ、桶組→石組→瓦組という中世から近世に至る変遷をたどることができる。ピット(小穴)の多くは底面に礎石を持っており、柱穴であることが分かる。建物等の状況は今後の検討課題である。第92次調査に続き、今次調査によって箱崎遺跡北側の状況を明らかにすることができた。



1. 調査地点の位置 (34 箱崎 2639 S=1/8000)



2. 調査区全景 (北東から)

1941 麦野C遺跡第17次調査 (MGC17)

所在地	博多区麦野6丁目14, 15, 16, 18
調査原因	共同住宅
調査期間	2019.9.18～2019.10.21
調査面積	193.0㎡
担当者	池田祐司
処置	記録保存

調査の概要

麦野C遺跡は福岡平野を北北西に延びる丘陵上に立地し、北西側の麦野A遺跡との間には狭い谷地形が北東から入る。調査地点はこの谷に面した緩斜面に位置する。北西へ緩やかに下がる鳥栖ローム上面が遺構面で、標高は14.7～15.4mである。

検出した遺構は近現代の溝2条、弥生時代の土坑3基、近世の井戸3基とピットである。覆土は主に黒褐色土または灰褐色土で、前者の遺構が古い傾向がある。調査区中央には長軸80cmほどの長方形のピットからなる1間×2間の建物を検出した。遺物は古代以前と考えられる黒褐色土を覆土とする遺構からの出土が特に少ない。土坑からは弥生中期の須玖式片などが出土しているが、覆土に散在する程度で時期の決め手に欠ける。弥生時代中期から江戸期の集落の一部と言えよう。昭和初期の地図では竹林である。



1. 調査地点の位置 (12 麦野 0050 S=1/8,000)



2. 調査区北半全景 (南西から)

1942 博多遺跡群第236次調査 (HKT236)

所在地	博多区祇園町76-5
調査原因	駐車場整備
調査期間	2019.9.26～2019.11.12
調査面積	43.0㎡
担当者	今井隆博
処置	記録保存

調査の概要

博多遺跡群は御笠川と那珂川に挟まれた博多湾岸の砂丘上に立地し、南北1.6km、東西0.9kmの広がりを持つ。博多遺跡群が立地する砂丘は、現在の明治通りを境に内陸側を博多浜、海側を息浜と呼んでおり、第236次調査地点は博多浜の最高所付近にあたる。調査前の標高は約5.9mで、4.8m～4.0m付近において3面の調査を行った。

検出した遺構は、古墳時代・古代・中世・近世の土坑・溝・柱穴等である。調査区中央の大型廃棄土坑からは近世瓦や近世陶磁が大量に出土した。また、第3面とした砂丘面の調査では、ほぼ東西方向に延びる古代の溝を検出した。

本地点からの出土遺物は、古墳時代の土師器、奈良時代の土師器・須恵器、中国製陶磁器、国産陶磁器や瓦等で、コンテナケース25箱分である。黒書陶磁器やガラス小玉の他に、甕の羽口や椀形滓といった鍛冶関連遺物も出土している。



1. 調査地点の位置 (49 天神 0121 S=1/8000)



2. 古代の溝 (東から)

1943 箱崎遺跡第103次調査 (HKZ103)

所在地	東区箱崎6丁目10-1 防音講義室
調査原因	学術研究 (HKZ1902)
調査期間	2019.9.10 ~ 2019.9.27
調査面積	100.0㎡
担当者	九州大学埋蔵文化財調査室
処置	現状保存

調査の概要

箱崎遺跡第103調査地点 (HKZ1902) は、九大箱崎キャンパス内中央図書館南側の防音講義室の建物下部分にあたり、この基礎内部および犬走下から石積み遺構を検出した。

石積み遺構は、箱崎キャンパス内でこれまでに確認された石積みと一連のものと考えられる。他地点と同じく、名島層由来の礫岩・砂岩を用いている。石積み遺構は最大で2段積んだ状態で遺存しているが、防音講義室建築時に礫石の代用品として基礎に接させられ、あるいは建物建築の際に圧を加えて西側に押し出すなどしているために、必ずしも良好とは言えない。石積み遺構については養生の上で現地での埋め戻し保存を行っている。

なお、本地点を含め箱崎キャンパス内中央図書館以南で確認された石積み遺構及び溝状遺構は、令和2年3月10日に史跡元寇防塁に追加指定を受けた。



1. 調査地点の位置 (33 貝塚 2139 S=1/8,000)



2. 元寇防塁石積み遺構残存状況 (北から)

1944 有田遺跡群第270次調査 (ART270)

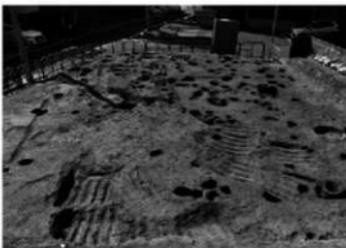
所在地	早良区小田部5丁目41番
調査原因	宅地造成
調査期間	2019.9.17 ~ 2019.10.29
調査面積	179.0㎡
担当者	吉田大輔
処置	記録保存

調査の概要

第270次地点は、有田遺跡群の北西部に立地し、遺跡群が展開する八つ手状の台地の8つの突出部のうち、東から5つ目に位置する。現況で周辺道路より1.5m程高く、現況GL-50 ~ 60cmで遺構面となった。検出面の標高は約6mである。検出した主な遺構は、竪穴住居跡が2軒、方形土坑1基、貯蔵穴2基、溝2条、掘立柱建物3棟以上、ピット多数である。削平を受け、住居や溝等の遺存状況は悪い。遺構の時期としては、古墳時代後期から奈良時代にかけてのものが多くと考えられる。遺物の出土量は全体でコンテナ5箱程度と少なく、細片が多いため、遺物が出土した遺構の時期については精査が必要である。遺物の時期は弥生時代前期~弥生中期初頭までの土器・石器、古墳時代前期の土師器、古墳時代後期から奈良・平安時代の土師器・須恵器等があり、鉄滓も数点出土している。



1. 調査地点の位置 (82 原 0309 S=1/8,000)



2. 調査区全景 (北東から)

1945 箱崎遺跡第104次調査 (HKZ104)

所在地	東区箱崎6丁目10-1 保存図書館
調査原因	学術研究 (HKZ1904)
調査期間	2019.10.2～2019.11.12
調査面積	300.0㎡
担当者	九州大学埋蔵文化財調査室
処置	記録保存

調査の概要

第104次調査地点 (HKZ1904) は、九州大学箱崎キャンパスの南部の旧保存図書館東側に位置する。同建物の基礎撤去に先立ち発掘調査を実施した。調査区北半は近現代の攪乱が広範囲に深く及んでおり、遺構は確認されなかった。一方、調査区南半では、土坑・ピット約50基、井戸3基、煉瓦積遺構2基など多数の遺構が検出された。遺物としては、中世の陶磁器・土師器・瓦・土錘・石錘・銭貨・動物骨などが出土している。今後の整理・検討を要するが、遺構の所属時期は概ね12～15世紀と推定される。中世の箱崎遺跡の広がりや土地利用を検討するうえで重要な成果がえられた。

なお、中世の遺構および包含層からではあるが、弥生時代中期の土器や石器が出土した。当時の土地利用が本地点まで及ぶことが判明した点は重要であり、また砂丘の形成時期を考えるうえで注目すべき成果といえる。



1. 調査地点の位置 (34 箱崎 2639 S-1/8,000)



2. 調査区全景 (南から)

1946 福岡城跡第79次調査 (FUE79)

所在地	中央区赤坂1丁目46番
調査原因	ビル建設
調査期間	2019.10.9～2019.10.18
調査面積	17.0㎡
担当者	中園将洋
処置	記録保存

調査の概要

1 調査に至る経緯

令和元年5月22日付けで該当地における埋蔵文化財の有無についての照会が提出された (事前審査番号31-2-193)。これを受けて埋蔵文化財課は令和元年5月31日に確認調査を行い、地表面下約50cmで石垣を検出した。遺構の保全等に関して申請者と協議を行い、遺構が影響を受ける範囲17㎡について記録保存のための発掘調査を実施した。

2 位置と環境

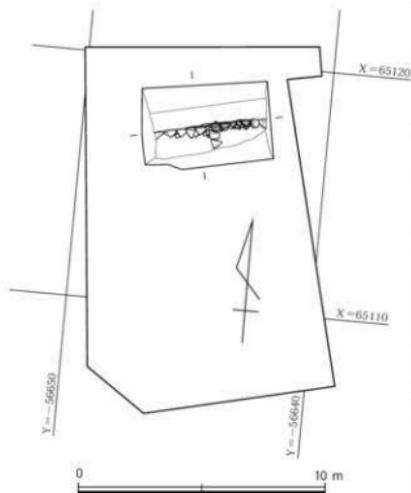
福岡城は江戸時代慶長年間に築城された平城で、西側には自然地形の入り江を取り込んで大堀 (現在の大濠公園) とし、北・東・南には内堀を造成し、城郭全体を堀で区画する。第79次調査地点は、南側に位置する内堀の城外部分を形成する石垣が位置する場所に当たる。



1. 調査地点の位置 (60 舞鶴 0193 S-1/8,000)



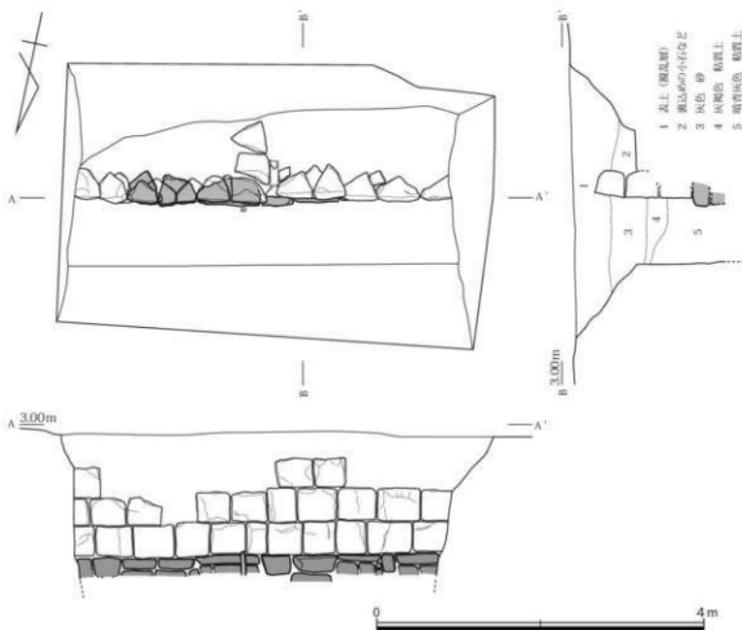
2. 調査区内石垣検出状況全景 (北から)



3. 調査区位置図 (S=1/200)



4. 第79次調査地点位置図 (S=1/4000)



5. 出土遺構実測図 (平面図・断面図 S=1/60)

3 遺構と遺物

地表面下約50cmで石垣を検出した。石垣の東西ラインが北側隣接地から約3mの地点に位置し、堀側の掘削面積が狭く、また法面崩落の危険性をも鑑み、堀の下部まで掘り下げる事が出来ずに地表面から約2m下までの掘削となった。上部三段の石垣は、形状から明治期に積み直された近代の石垣であり、四段目より下で江戸期の石垣を確認する事が出来た。この周辺の堀は昭和初期まで沼地のような状態で現存しており、出土した遺物も陶磁器、ガラス瓶、瓦、木製品及び珙瑯看板など近代のものばかりであった。堀部分を深く掘削出来ていれば、江戸期の遺物も出土していたと考えられる。



6. 検出石垣(全景(北西から))

4 まとめ

第53次調査地点で東側に位置する内堀の城外部分の石垣が検出されており、その石垣の南北ラインの延長と今回の第79次調査地点の石垣の東西ラインの延長が、ほぼ直角に交わることが分かり、福岡城内堀の規模を考える上で調査面積は狭いものであったが、有意義な調査となった。



7. 堀内堆積物からの出土遺物

1947 那珂遺跡群第177次調査 (KAK177)

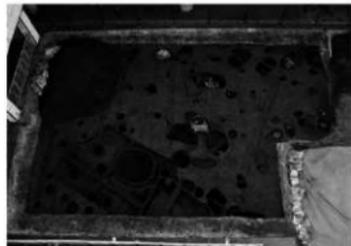
所在地	博多区東光寺町1丁目19番1、19番2
調査原因	事務所建設
調査期間	2019.10.7～2019.11.20
調査面積	131.72㎡
担当者	清金良太
処置	記録保存

調査の概要

調査地点是那珂遺跡群の北東側に位置し、筑紫通りを挟んだ北東側では102次調査が行われている。遺構としては土坑墓3基、甕棺墓11基(成人棺7基・小児棺4基)、掘立柱建物2棟、竪穴住居4棟、井戸が1基検出された。時期・土地利用として、弥生時代前期の土坑墓から立岩式の甕棺までが墓域として利用されており、それ以降は生活域に変化していると考えられる。掘立柱建物の1棟は大型で弥生時代後期の竪穴住居に切られることからそれ以前の時期が想定できるが、遺物が少量で時期の決定には至っていない。もう1棟は古代の掘立柱建物で調査区外に伸びている。竪穴住居は弥生時代初めから古墳時代初めにかけて4棟切合うように検出された。また、中世の井戸からは曲物などの木製品、青磁、白磁が検出された。出土遺物はパンケース20箱、木器が3箱出土し、想定よりも濃厚に遺跡が残存していた。



1. 調査地点の位置 (37 東光寺 0085 S=1/8,000)



2. 第177次調査地点全景(北東から)

1948 麦野C遺跡第18次調査 (MGC18)

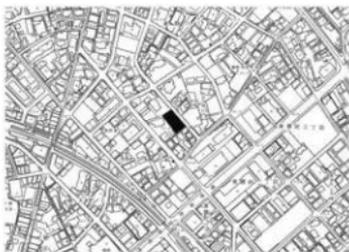
所在地	博多区麦野6丁目13番5
調査原因	共同住宅建設
調査期間	2019.10.16～2019.11.29
調査面積	320.4㎡
担当者	三浦悠葵
処置	記録保存

調査の概要

本調査地は遺跡の中央部に位置する。調査地の西側では1次・5次調査が行われており、弥生時代前期末～後期初頭の竪穴住居を主体として古代、中世の遺構が見られる。

今回の調査では、地表から約40cm掘り下げた地点で鳥栖ローム層を地山とする遺構面を検出した。遺構は溝5条と大型の土壇7基、ピットを検出した。溝は全て北西から南東方向に掘られており、幅約3mの大溝が1条と、幅50cm程度の小溝が4条ある。いずれも15～16世紀頃のものと考えられ、少量の土師皿と青磁片などが出土した。大溝は調査区南端でほぼ直角に屈曲している。大型土壇からは少量の土師皿片が出土し、15～16世紀以降の遺構と考えられる。

以上より、本調査地点とその周辺地域では、中世後半以降の集落が形成されていたと考えられる。



1. 調査地点の位置 (12 麦野 0050 S=1/8,000)



2. 調査区南半全景 (南西から)

1949 那珂遺跡群第178次調査 (NAK178)

所在地	博多区那珂6丁目313番1他4筆
調査原因	バス営業所
調査期間	2019.10.17～2019.11.29
調査面積	184.0㎡
担当者	屋山洋
処置	記録保存

調査の概要

那珂遺跡は福岡平野中央部を流れる那珂川右岸の洪積丘陵上に位置する。今回の178次調査地点是那珂遺跡の西端に位置し、隣接する37次や51次・53次調査では、突帯文土器を伴う環濠が確認されている。また、東側に位置する56次・174次調査では古代から中世にかけての大型掘立柱建物や溝が出土しており、官衙や寺院もしくは居館等の存在が予想される。今回の178次調査では竪穴式住居、土坑、柱穴群が出土した。竪穴式住居はいずれも古墳時代中頃である。柱穴群では3軒の掘立柱建物を確認できた。そのうちSB01は3×3間の総柱で24.7㎡、SB02は2×2間の側柱で13.6㎡を計る。

調査区北側道路付近から一字一石経が出土した。墨書には「佛」「経」などの字が確認できる。調査では一部のみを確認したが、実際は広範囲に分布している可能性がある。



1. 調査地点の位置 (38 塩原 0085 S=1/8,000)



2. 調査区全景 (東から)

1950 ケエゾノ遺跡第5次調査 (KEZ5)

所在地	早良区梅林7丁目145
調査原因	宅地造成及び戸建住宅建設
調査期間	2019.11.11～2020.2.14
調査面積	208.8㎡
担当者	三浦萌・加藤良彦
処置	記録保存

調査の概要

ケエゾノ遺跡は油山から延びる丘陵上に位置する縄文から中世にわたる複合遺跡である。今回の第5次調査区は遺跡範囲の中央よりやや南東に位置する。調査では主に石室1基と古墳時代と思われる住居址2基、弥生時代と古墳時代の溝が各1条、古代もしくは中世のものと思われる焼土坑が数基、古墳時代初期の壺を埋めた土坑など様々な遺構が確認されている。石室内からは須恵器・鉄器・金環が、土坑出土の壺からも多量の玉類が確認された。遺物はコンテナケース35箱分が出土した。

石室の出土遺物を検討した結果、当古墳は当該地域における首長系譜の人物が葬られた可能性が非常に高い。調査地点東側にはケエゾノ1号墳（1次調査）が存在しており、周辺に未発見の古墳群が存在している可能性が想定できる。



1. 調査地点の位置 (84 重留 0269 S=1/8,000)



2. 調査区全景 (北から)

1951 箱崎遺跡第105次調査 (HKZ105)

所在地	東区箱崎3丁目2416番1
調査原因	共同住宅
調査期間	2019.11.25～2019.12.24
調査面積	135.0㎡
担当者	吉田大輔
処置	記録保存

調査の概要

箱崎遺跡第105次調査地は、遺跡範囲の北東端に位置する。調査地の標高は約3.4mである。遺構は、地山である砂丘面上で検出した。遺構検出面の標高は約2.8mで、現地表面からの深さは約0.65mを測る。検出した遺構は、井戸3基、土坑5基、溝2条、小穴9基である。井戸は12世紀後半頃、土坑は12世紀～13世紀頃、溝は16世紀頃の所産と考えられる。主な出土遺物は、龍泉窯系青磁碗・皿、同安窯系白磁・青磁碗・皿、中国陶器捏鉢、青白磁合子等の輸入陶磁器類、土師器杯・皿、土鍋、瓦器椀、東播系須恵器の捏鉢、滑石製品等である。遺物は多くが井戸から出土した。また、近世の廃棄土坑からは14～15世紀頃の瓦が多量に出土し、軒平・軒丸瓦や丸瓦・平瓦・鬼瓦等が出土している。軒平瓦の瓦当には「三用山」と読める山号があるものもあり、付近に寺院が存在したものと推測される。



1. 調査地点の位置 (34 箱崎 2639 S=1/8,000)



2. 調査区全景 (南から)

1952 吉塚遺跡群第16次調査 (YSZ16)

所在地	博多区堅粕四丁目404番地3筆
調査原因	ホテル建設
調査期間	2019.12.2 ~ 2020.2.3
調査面積	307.7㎡
担当者	木下博文
処置	記録保存

調査の概要

吉塚遺跡は、御笠川の東岸、博多湾岸に並ぶ砂丘群の一面に立地し、標高4m前後を測る。第16次調査地点は遺跡中央部のやや南西寄りに位置し、南東隣地に2次、南西隣地に3次、北西に4次調査地点が位置する。

調査では現地表面から1.2m下の黄褐色砂丘面で検出し、弥生時代終末期～中世の井戸・土坑・柱穴などの遺構を検出した。特に調査区北西端では、ほぼ磁北に近い主軸をもつ南北方向の古墳時代の掘立柱建物1棟を検出した。集落の性格を検討する上で貴重な資料となる。

遺物はコンテナケース40箱分の弥生時代終末期～中世の土器片のほか、小形丸底壺や飯壺壺の完形品、滑石製の有孔円板なども出土した。



1. 調査地点の位置 (36 博多駅 0123 S-1/8,000)



2. 調査区全景 (南東から)

1953 比恵遺跡群第155次調査 (HIE155)

所在地	博多区博多駅南6丁目12.3.13-3.14-3.14-5.14-7
調査原因	共同住宅
調査期間	2019.12.9 ~ 2020.3.24
調査面積	433.56㎡
担当者	清金良太
処置	記録保存

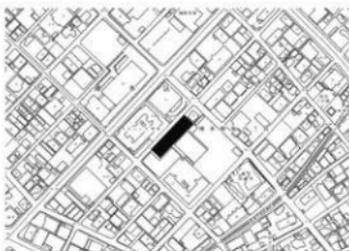
調査の概要

第155次調査地点は、比恵遺跡群中央南側に位置しており、北側で実施された第57次調査では多数の遺構が検出されるなど比恵遺跡群の中心部に位置している。

主な遺構として、掘立柱建物が2棟、竪穴住居が4棟、溝が2条、井戸が14基、土坑が1基検出された。

建物跡と井戸は弥生中期後半から古墳時代初めと、奈良時代に分かれて検出され、人と水の密接な関わりを示す。また、弥生時代の井戸から釣瓶、杵の木製品のほか、玉も出土している。

I区では5世紀末～6世紀初めのII区では幅2m、弥生中期の溝が検出されたが、周りの調査では出土しておらず、今後の調査によって明らかとなることを期待する。



1. 調査地点の位置 (37 東光寺 0127 S-1/8,000)



2. 北側調査区全景 (南西から)

1954 博多遺跡群第237次調査 (HKT237)

所在地	博多区博多駅前2丁目174-2
調査原因	庁舎建設
調査期間	2020.1.14～2020.3.11
調査面積	158.4㎡
担当者	佐藤一郎
処置	記録保存

調査の概要

博多遺跡群は福岡平野の中央、那珂川河口右岸に位置し、博多湾岸に沿って形成された古砂丘上に立地する。調査地は遺跡南端に位置し、房州堀推定ラインに近接する。今回の調査では現地表下0.9から1.8mまで礫混じりの粗砂（近世の遺物を含む）、2.0mまで褐灰色土（近世の遺物を含む）が堆積し、2m以下で15世紀中頃までに埋没した河川堆積、もしくは堀の落ちSD01を検出した。深さ0.5～0.6m（標高1.4m前後）で地山の灰白色砂となり、岸、立ち上がりを検出することはできなかった。

検出した遺構を河川とした場合、御笠川旧河道の一部とみられる。堀とした場合、埋土から出土した遺物は内内氏の博多支配の時期に相当し、『続風土記』にある内内氏によって築造された堀の一部となる可能性がある。



1. 調査地点の位置 (49 天神 0121 S-1/8,000)



2. 調査地全景 (東から)

1955 藤崎遺跡第39次調査 (FUA39)

所在地	早良区百道1丁目807番10
調査原因	共同住宅
調査期間	2020.2.10～2020.2.28
調査面積	113.0㎡
担当者	池田祐司
処置	記録保存

調査の概要

砂丘頂部の北側に位置し、隣接する調査地点では小型の甕棺墓が出土している。地表下1.3mほどの標高4.3mの淡黄色砂層上で遺構を確認した。実際にはさらに高いレベルが遺構面と考えられる。確認した遺構は甕棺墓5基、遺物を含む土坑7基、遺物を含まない土坑群である。

甕棺墓はいずれも須玖Ⅱ式の小型棺で壺の単棺1、甕の単棺1、甕・甕の合わせ口2基、甕・壺の組み合わせ1基である。人骨は残っておらず、副葬品もない。このうち4基は調査区南西寄りに集まることから甕棺墓域の北限に近いと考えられる。土坑は茶褐色、黒褐色等の砂を覆土とするが、いずれも遺物が少ない。その中でSK016からは須恵器Ⅳ期環・蓋と釣り針、刀子等の鉄器がまとめて出土した。また連続するように接するSK017からは土師器甕の完形品が正置した状態で出土した。



1. 調査地点の位置 (81 室見 0307 S-1/8,000)



2. 甕棺墓検出状況 (東から)

1956 比恵遺跡群第 156 次調査 (HIE156)

所在地	博多区博多駅南 6 丁目 19-1
調査原因	共同住宅建設
調査期間	2020.1.15 ~ 2020.1.24
調査面積	66.0㎡
担当者	今井隆博
処置	記録保存

調査の概要

1. 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、上記地における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会（事前審査番号 2019-2-114）を平成 31 年 4 月 25 日付で REIKA JAPAN 株式会社から受理した。これを受けて埋蔵文化財課事前審査係は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である比恵遺跡群に含まれていることから同年 5 月 20 日に現地において確認調査を実施し、現地表下 1 m 付近で遺物包含層を確認した。

この結果を踏まえ、遺構の保全等に関して申請者と協議を行ったが、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、共同住宅が建設される範囲について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。発掘調査については、株式会社森田設計事務所と福岡市の間に委託契約を締結した。



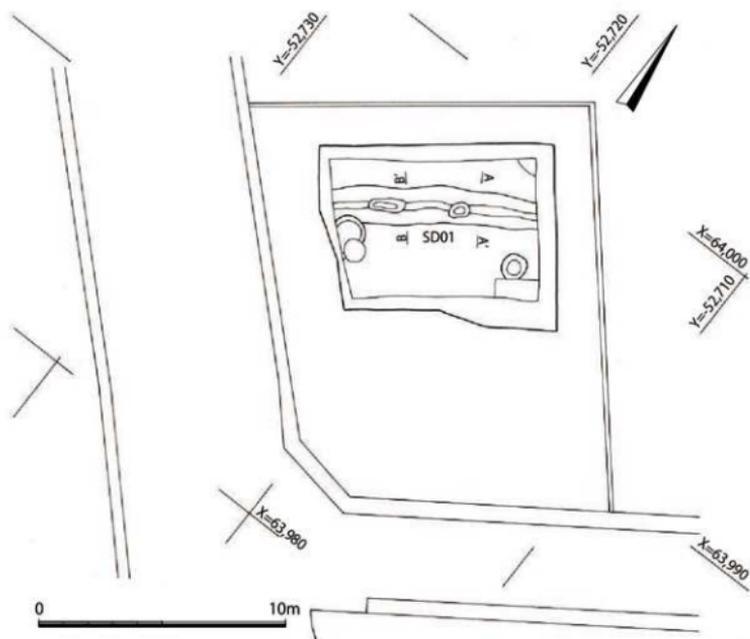
1. 調査地点の位置 (37 東光寺 0127 S-1/8,000)



2. 調査区全景 (南から)



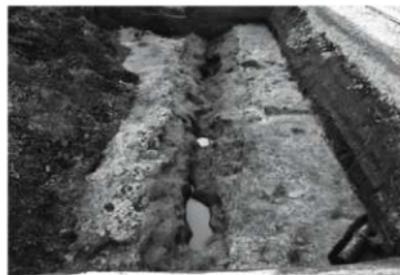
3. 比恵遺跡群第 156 次調査 調査区周辺図 (S=1/1,000)



4. 調査区全体図 (S=1/200)



5. SD01 A-A' 土層 (西から)



6. SD01 完備状況 (東から)

2. 立地と環境

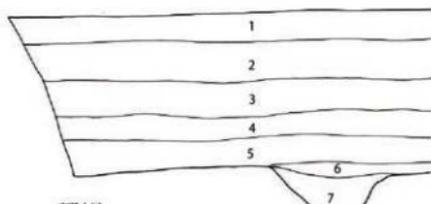
比恵遺跡群は福岡平野のほぼ中央に位置し、那珂川と御笠川に挟まれた台地上に立地する。第156次地点は比恵遺跡群の南端に位置し、南に隣接する那珂遺跡群との境の浅い谷の落ち際にあたる。北側隣地で第128次、西側で第141次、北東側で第74次調査が行われており、弥生時代・古墳時代・古代の遺構や遺物が確認されている。調査前の現況は更地で、標高は約6.6mであった。

3. 調査の記録

確認調査の際、敷地南半分には以前の建物の地下室と思われる大きな攪乱があったため、発掘調査は敷地の北半分を対象とした。基本層序は、碎石等の現代盛土の下、GL-50cmで灰褐色粘質土、-80cmで褐灰色粘質土、-100cm

調査区東壁

H=7.0m



東壁土層

1. 砂石
2. 埴土
3. 灰褐色粘質土
4. 褐色粘質土
5. 黒褐色粘質土 遺物多量に混じる
6. 黒色粘質土
7. SD01



SD01 A-A'

H=5.8m

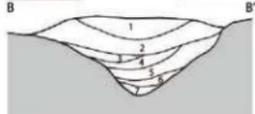


SD01 A-A'

1. 褐色土 遺物多量に含む
2. 灰白色地山ブロックと褐色土の混じり
3. 褐色土
4. 褐色粘質土 遺物含む
5. 灰白色地山ブロック
6. 褐色土
7. 黒褐色砂 中や粘質

SD01 B-B'

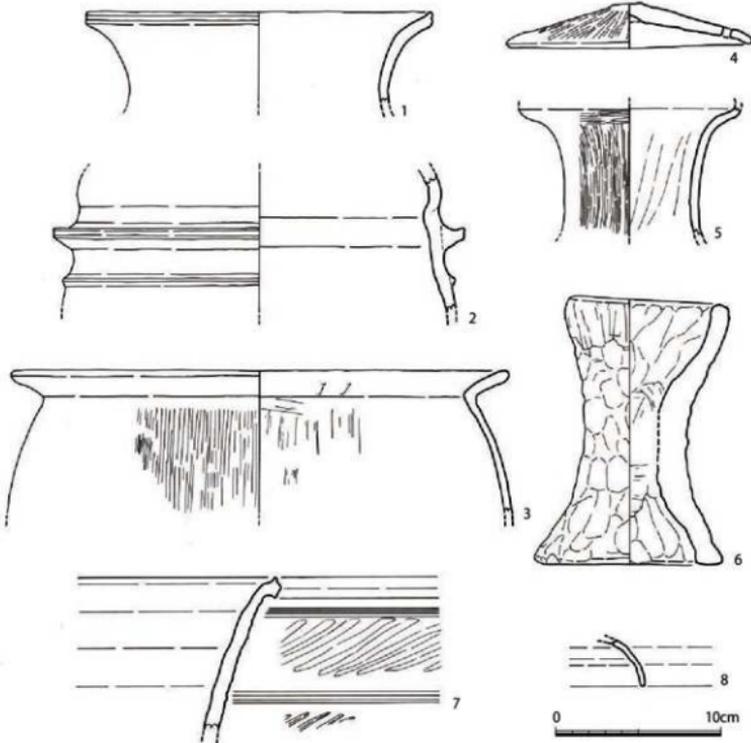
H=5.8m



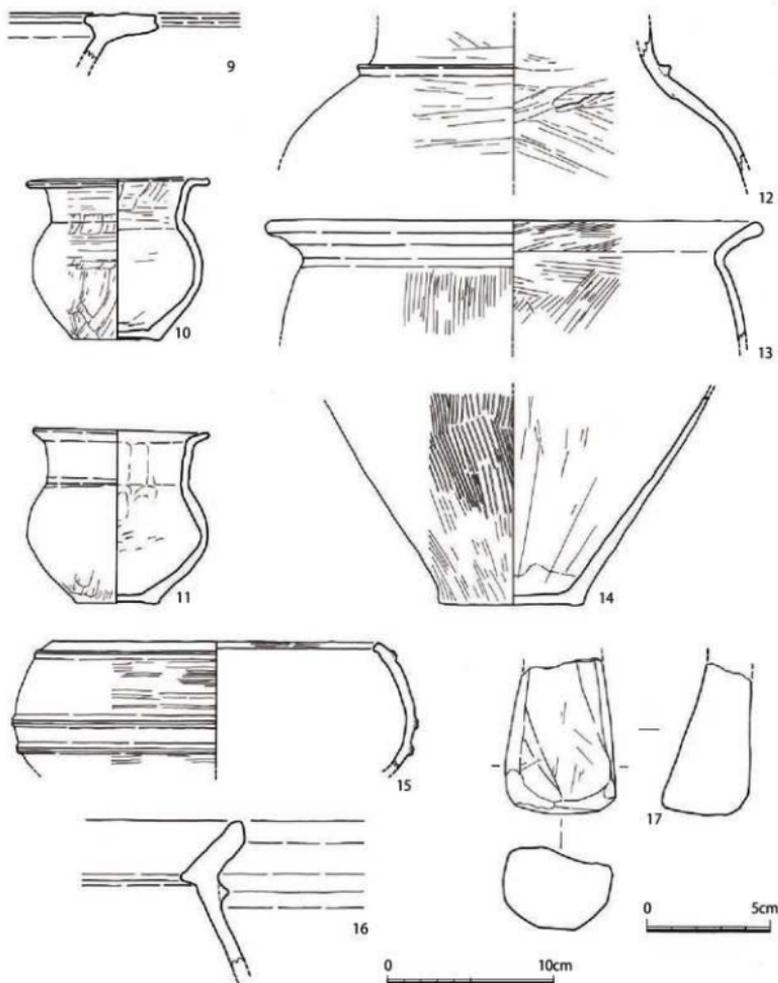
SD01 B-B'

1. 黒褐色粘質土 遺物多量に含む
2. 褐色土 遺物多量に含む
3. 褐色粘質土
4. 褐色土
5. 褐色土と灰白色地山ブロックの混じり
6. 褐色土 中や粘質
7. 灰褐色砂 中や粘質

7. 東壁土層図およびSD01土層図 (S=1/40)



8. SD01 出土遺物実測図① (S=1/3)

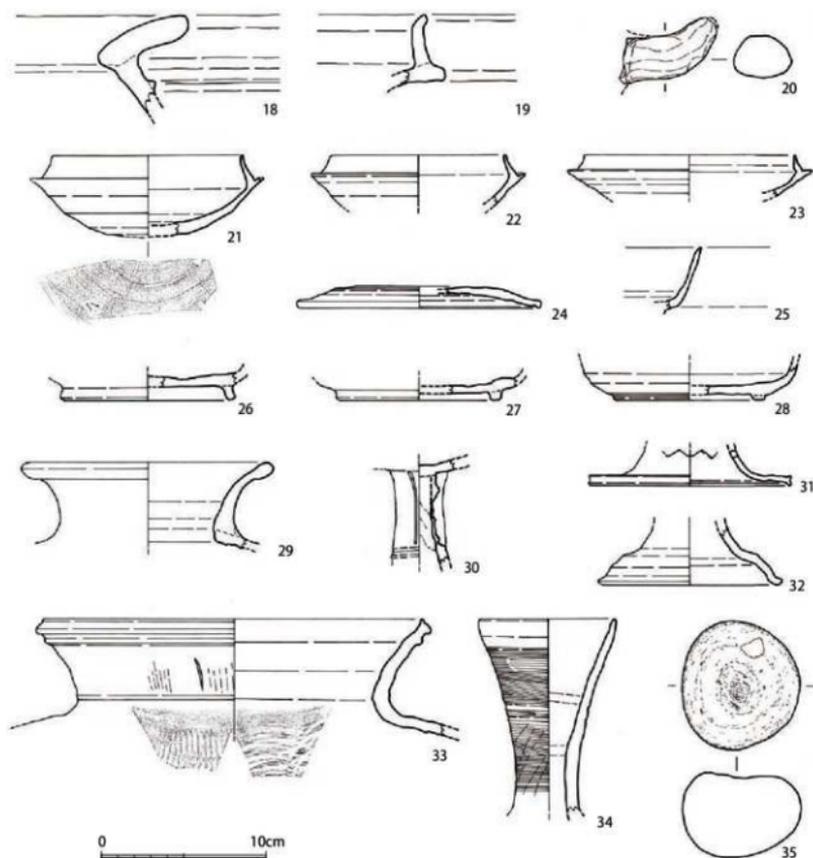


9. SD01 出土遺物実測図② (S=1/3, 1/2)

で遺物包含層である黒褐色粘質土、-120cmで地山である八女粘土に達する。-100cmからの遺物包含層は20～30cmの厚さで調査区全面に広がり、弥生時代～古代の土器を多量に含む。包含層を掘削・除去すると、八女粘土の面で溝・土坑を検出した。八女粘土検出面の標高は5.3m～5.5mで、東と南に向かって緩やかに傾斜している。出土遺物は弥生時代～古代の土器・石器で、コンテナ15箱分である。

SD01

調査区を北東-南西方向に横断する幅1.5m、深さ50cm前後の溝で、断面は緩やかな三角形状である。表土剥ぎの際、上面の黒褐色粘質土中から掘り込まれているようにも見たが、壁面土層では確認できず、不確実である。



10. 出土遺物実測図 (S-1/3)

上層は黒褐色粘質土や地山土の流入が見られ、下層には黒灰色砂質土や一部粗砂が堆積している。水の流れがあったためか、底面には凹凸が見られ、湧水する部分もある。遺物は検出面から $\pm 30\text{cm}$ 付近で上層と下層に分けて取り上げた。土層A-A'の1~3層、土層B-B'の1・2層が概ね上層に当たる。出土遺物は弥生時代中期~後期の土器が主体を占めるが、上層では一定量の須恵器を含み、下層からはごく少量の須恵器小片が出土している。底面の凹みからは完形の弥生土器壺が2点出土した。

SD01 出土遺物

図8は上層出土土器で、1~6は弥生土器である。1は広口壺の口縁で、内外面に丹塗りを施す。2は瓢形土器の胴部で、外面に丹塗りを施す。3は甕の口縁部~胴部で、復元口径 30.0cm 。外面には縦方向のハケメが残る。4は短頸壺の蓋で、外面に丹塗りとヘラミガキを施す。口径 14.8cm 。5は壺の頸部で、外面には丹塗りと縦方向の細かいヘラミガキを施し、内面には指によるナデの痕が残る。6はほぼ完形の器台で、外面には粗いユビオサエの痕跡が明確に残る。7・8は須恵器である。7は大型壺の口縁で、外面には横方向の沈線とナナム方向のヘラ彫り文を施す。8は須恵器の坏蓋の破片である。9~14は下層出土土器である。9は鋤先口縁の壺である。10は

ほぼ完形の弥生土器壺である。口径 11.0cm、器高 9.7cm。口縁は外側に屈曲し、逆し字状である。内外面ともに工具によるナデを施す。11 も完形の弥生土器壺で、口径 10.6cm、器高 10.5cm。10 に比べると口縁部は立ち上がり気味である。12 は壺の胴部上半で、頸部との境に断面三角形の突帯がめぐる。13 は壺の口縁で、復元口径 30.0cm。14 は壺の底部で、底径 8.6cm、残存器高 12.8cm。15・16 はベルト部分より出土した。15 は高環の環部か。復元口径 19.6cm。丸味をもつ器形で口縁下と最大径部分、その下に緩い M 字突帯がめぐる。外面には横方向のヘラミガキと丹塗りを施す。16 は大壺の口縁。17 はベルト A-A' に平行して設定したトレンチから出土した砥石である。石材は石英長石斑岩でほぼ全面を使用しており、砥面のうち前面は黒変している。二次的な被熱か、あるいは青銅器跡型を転用している可能性もある。残存長 6.2cm。

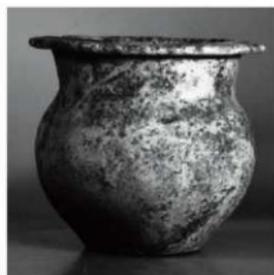
その他の遺物

調査区全面に広がる遺物包含層からの出土遺物である。弥生時代中期・後期の土器が多くを占めるが、古墳時代後期～古代の須恵器を中心に凶化した。18 は弥生土器の大壺口縁、19 は弥生時代後期の複合口縁壺である。20 は土師器の把手である。21～34 は須恵器である。21～23 は須恵器の坏身で、21 にはヘラ記号が見られる。24 は坏蓋である。25 は坏、26～28 は高台付の坏である。29 は瓶の口縁か。復元口径 15.4cm。30 は高環の脚部で、細い長方形の透かしを 3ヶ所に施しているが、内面まで貫通していない。31・32 は脚根部である。33 は壺の口縁で、復元口径 23.8cm。胴部外面にはタタキ、内面には当て具痕が残る。34 は長頸壺の口縁で、外面に細かいカキ目を施す。35 は花崗岩製の凹み石か。中央が凹み、敲打に用いられたものと思われる。

4. まとめ

今回検出した SD01 は、北東の第 74 次調査で確認された古墳時代後期の溝 SD04 の延長の可能性がある。ただし、位置がややずれ、断面形状も異なるため確定ではない。その性格は集落の範囲を区画するものか、あるいは水路であろうか。SD01 の下層には完形の壺等、遺存状態の良い弥生時代中期後半～後期初頭の土器が複数見られることから、掘断時期は弥生時代中期の可能性もあるが、短期間の緊急調査であったため、十分に確認することができなかった。SD01 は古墳時代後期頃に埋没し、その上面の調査区全体を覆う遺物包含層は 7～8 世紀頃の所産と考えておきたい。今後の周辺調査での検証が必要である。

また、埋め戻しの際に敷地南西部の一部を確認したところ、調査区南西端付近で地山が大きく落ちた。これは西側の第 141 次調査の南西隅で確認された段落ち SX043 と繋がる可能性もある。この SX043 からは弥生時代後期の土器が出土しており、櫛と思われる木製品も出土していることから、船着場の可能性も想定されている。本地点では部分的な確認であったためこの落ちの時期は不明であるが、今後の調査で段落ちの範囲と時期を把握が必要であろう。



9-11



9-10



9-17

11. 出土遺物（縮尺不同）

1957 井尻 B 遺跡第 45 次調査 (IGB45)

所在地	南区井尻 5 丁目 234 番 10
調査原因	共同住宅
調査期間	2020.1.14 ~ 2020.3.31
調査面積	326.9㎡
担当者	三浦悠葵
処置	記録保存

調査の概要

本調査地は遺跡中央南側に位置する。調査地東側で行われた 9 次調査では弥生時代後期の遺構がみられ、南西約 200 m の地点には井尻 B1 号墳がある。調査では、古墳時代の遺構面と弥生時代の遺構面 2 面で調査を実施した。遺構は竪穴建物跡 3 軒と掘立柱建物跡 2 軒とその複数個のピット、古墳時代中期の古墳 1 基を検出した。調査区南東側には弥生時代後期後半の大型の掘立柱建物があり、建物内側に大型の柱穴を検出した。古墳は墳丘が全て削平されており、円丘部分の周溝のみを検出しただけで墳形は定かでない。外周直径約 25 m を測る。遺物は周溝から埴輪（円筒、家、盾、その他）、須恵器、土師器と少量の鉄製品が出土し、時期は 5 世紀後半頃と考えられる。以上より、本調査地は弥生時代後期から終末期にかけて一部は祭祀場などの特殊な場として機能し、古墳時代中期には古墳が造営されたことが判明した。



1. 調査地点の位置 (25 井尻 0090 S=1/8,000)



2. 調査区全景 (北西から)

1958 博多遺跡群第 238 次調査 (HKT238)

所在地	博多区店屋町 186 番 1、186 番 2、187 番 3
調査原因	ホテル建設
調査期間	2020.1.15 ~ 2020.4.24
調査面積	141.3㎡
担当者	上角智希・佐藤一郎
処置	記録保存

調査の概要

博多遺跡群は福岡平野の中央、那珂川河口右岸に位置し、博多湾岸に沿って形成された古砂丘上に立地する。調査地は遺跡の中央やや南寄りに位置し、近辺の調査では砂丘砂は確認されず、検出された遺構は 14 世紀以降に留まっている。第 1 面である黄褐色砂質土（標高 2.7m）上面で、近世以降の井戸・鋳造遺構・石基礎・礎石建物跡を検出した。第 2 面では井戸・大溝、15 ~ 16 世紀の土坑・集石遺構・石積土坑・埋土に炭を多量に含む方形土坑を検出した。第 3 面では灰白色砂の水成堆積を確認し、その上面で溝、土坑、柱穴を検出した。遺構や層から土師器小皿・杯片、国産陶器、明代前半の青磁碗・皿片の他、特筆されるものでは青白磁菩薩像頭部片が出土している。本調査地は古砂丘縁辺の入り江に面し、土地利用が中世後期以降と博多遺跡群の中では開発が後になる区域である。



1. 調査地点の位置 (49 天神 0121 S=1/8,000)



2. 調査区全景 (南西から)

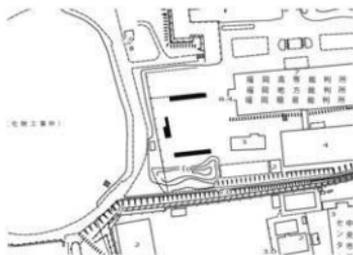
1959 福岡城跡第80次調査 (FUE80)

所在地	中央区城内
調査原因	史跡整備
調査期間	2020.1.10～2020.3.5
調査面積	410.7㎡
担当者	阿部泰之 史跡整備活用課
処置	現状保存

調査の概要

福岡城跡第80次調査(鴻臚館跡第32次)では、鴻臚館時代の等高線に直交する位置に調査区を南北2区画設定し、何れも標高8m前後で終戦前後、7.4～7.5mで近世後期～幕末期の福岡城の整地層を検出した。史跡鴻臚館跡の歴史的重層性を示す近世・近代の遺構の保存に配慮し、近世整地層以下の掘削は行っていない。

南側の1区では、建物基礎および関連施設、それ以前の土壌・柱穴を検出した。建物基礎は幅15cm前後の布基礎およびレンガ敷きであり、戦前に建設された陸軍関係施設の可能性がある。建物関連施設は簡易水洗式便所の便槽と考えられる。土壌1基を除き建物建設時に人為的に埋められている。2区では1条の石敷きを検出した。近代に構築され、終戦前後まで使用された通路と考えられる。遺物はコンテナ3箱分の瓦や陶磁器類が出土した。



1. 調査地点の位置 (60 舞鶴 0193 S-1/4,000)



2. 2区調査区全景 (東から)

1960 博多遺跡群第239次調査 (HKT239)

所在地	博多区祇園町417番他8筆
調査原因	ホテル建設
調査期間	2020.2.17～継続中
調査面積	1012.0㎡
担当者	屋山洋
処置	記録保存

調査の概要

博多遺跡群第239次調査地点は、博多浜砂丘の南西側に位置する。西側は地下鉄駅舎工事に伴う第203次調査となる。調査では弥生時代中期から近代までの濃密に分布する遺構群を確認した。検出した遺構として弥生時代中期の糞棺墓群、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての住居群をはじめ、古代の住居と土壌墓、古代末の土坑と多数の井戸遺構等がある。続く中世から近世・近代にかけての溝遺構や多数の廃棄土坑なども確認されており、連綿と集落や墓域として利用されていたことがわかる。

調査地点付近は博多浜南側砂丘の東西に延びる頂部付近に位置している。また「瓦町通り」という古い地名を冠する路地に面しているが、瓦焼成窯等の窯業に冠する遺構は確認されていない。



1. 調査地点の位置 (49 天神 0121 S-1/8,000)



2. 東側調査区全景 (南西から)

1961 名子遺跡第5次調査 (NAO5)

所在地	東区名子3丁目778番3他7筆
調査原因	店舗建設
調査期間	2020.1.20 ~ 2020.5.29
調査面積	2219.0㎡
担当者	神啓崇
処置	記録保存

調査の概要

名子遺跡は、猪野川が形成した沖積地上に立地し、縄文時代から古墳時代を中心とする遺跡である。これまでに4次調査まで実施されている。第3次・4次は遺跡範囲南半の道路整備工事に先立ち実施したものである。第5次調査区は遺跡北端に位置し、1次調査区の北側にあたる。

遺構は古墳時代後期の竪穴建物28棟、掘立柱建物3棟以上のほか、奈良時代の溝を検出した。調査区周辺には森江山古墳群や湯ヶ浦古墳群があり、それらに対応する集落といえる。また、本調査区は古代山陽道の推定線にあり、検出した奈良時代の溝はその道路側溝の可能性がある。

遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石器、鉄器がコンテナケース30箱分出土した。



1. 調査地点の位置 (7 八田 2829 S=1/8,000)



2. 調査区全景 (北東から)

1962 那珂遺跡群第179次調査 (NAK179)

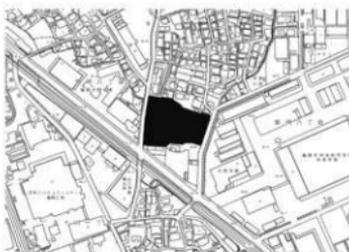
所在地	博多区那珂6丁目333番1
調査原因	共同住宅建設
調査期間	2020.2.10 ~ 2020.12.18
調査面積	2000.0㎡
担当者	常松幹雄
処置	記録保存

調査の概要

第179次調査地点は、那珂遺跡群の南東部の標高8~9mの丘陵部にあたる。開発により埋蔵文化財が影響をうける約2,000㎡を第I~III区に分けて着手した。

敷地南西側を第I区とし、1,160㎡について掘削を開始。I区東側の400㎡は、現地地表40cmで遺構面を確認した。一方、南西部の760㎡は70cmほど削平を受けていたが、那珂・比恵遺跡群を貫く古代の道路状遺構の東側溝を検出した。第I区の南西隅では中世前半の素掘りの井戸を検出し、白磁碗や石製の破片等がまとまって出土した。

第II・III区は第I区の東側で設定した。II・III区では断面逆台形となる東西方向の溝を延長60m検出した。溝は東側に向かい傾斜しており、埋土からは7世紀後半の須恵器等が出土した。



1. 調査地点の位置 (24 板付 0085 S=1/8,000)



2. 調査第I区全景 (東から)

1963 井相田 E 遺跡第 2 次調査 (ISE2)

所在地	博多区井相田 3 丁目 8-3
調査原因	土地造成
調査期間	2020.3.5 ~ 2020.3.31
調査面積	661.6m ²
担当者	三浦萌
処置	記録保存

調査の概要

井相田 E 遺跡は麦野 C 遺跡東側に隣接する遺跡で、平成 22 (2010) 年に新規登録された遺跡である。第 1 次調査では官道水城東門ルートとの関連が指摘される 8 世紀代の溝遺構が複数確認されている。今回の 2 次調査地点は 1 次調査地点の南東部にほぼ隣接する。

調査で検出した遺構は主に溝遺構と土坑である。調査区は旧来水田であったと考えられる場所であり、水田のための用水路であった可能性が高い。溝遺構いずれも調査区を南北に縦断する形で検出され、官道推定ラインとはほぼ並行の主軸となる。周囲の区画は条理区画に則ったものとなるが、検出された溝遺構はこれと異なる方向を採っており、古代以来の古地形を反映した遺構である可能性が考えられる。遺物はコンテナケース 1 箱分の土師器、須恵器、貿易陶磁器などが出土した。



1. 調査地点の位置 (12 麦野 2881 S=1/8,000)



2. 調査区全景 (北から)

1964 野芥遺跡第 18 次調査 (NKE18)

所在地	早良区野芥 4 丁目 372-1
調査原因	共同住宅建設
調査期間	2020.3.2 ~ 2020.4.10
調査面積	180.0m ²
担当者	木下博文
処置	記録保存

調査の概要

野芥遺跡は、福岡市早良区南東部の丘陵上に立地する旧石器時代～近世の複合遺跡である。第 18 次調査地点は遺跡範囲の南西端部、標高 24 m 前後の地点に位置する。北東隣地の 4 次調査地点 (現 市営野芥住宅) ではカマドを持つ古墳時代後期の竪穴住居跡などが確認されている。

今回の調査では、古代の時期と考えられる南北方向の主軸を持つ溝遺構のほか、古墳時代終末以降の竪穴建物や掘立柱建物などを検出した。遺物はコンテナケース 2 箱分の土師器、須恵器等が出土した。

調査の成果より、調査地点が古墳時代から古代にかけての集落域であったことや古代の時期には官衙施設に関連する遺構が存在していたことが判明した。



1. 調査地点の位置 (84 重留 0319 S=1/8,000)



2. 東側調査区全景 (南西から)

1965 野芥遺跡第19次調査 (NKE19)

所在地	早良区野芥5丁目387番1.388番3.388番15
調査原因	宅地造成
調査期間	2020.3.16～2020.9.23
調査面積	1385.5㎡
担当者	池田祐司
処置	記録保存

調査の概要

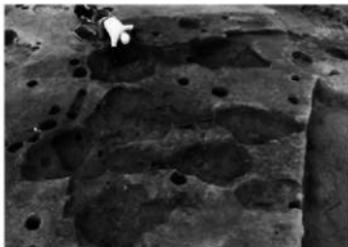
調査地点は油山丘陵西側裾部の緩斜面に位置する。調査では古墳時代の集落を中心に、奈良時代の製鉄遺構や平安時代の土器溜り遺構など、2面の遺構面を確認した。

古墳時代では、前期の集落と後期の古墳2基と集落を検出した。前期の集落は竪穴遺構1基、後期は6世紀末から7世紀初めの竪穴遺構10基以上、総柱建物3基である。古墳は主体部の床面が残り、6世紀中頃の須恵器が出土した。

奈良時代の製鉄遺構は4基を確認した。平安時代の土器溜り遺構は50個体以上の土師器・瓦器が意図的に並び置かれた状態で出土している。調査ではコンテナケース90箱分以上の縄文時代から古代末までの遺物が出土している。



1. 調査地点の位置 (84 重留 0319 S=1/8,000)



2. 製鉄遺構 (南西から)

1966 井尻B遺跡第46次調査 (IGB46)

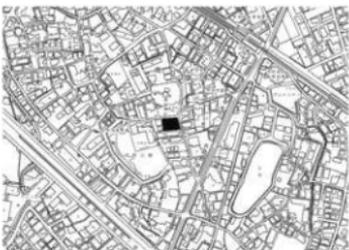
所在地	南区井尻5丁目177-1、177-2、177-7
調査原因	共同住宅建設
調査期間	2020.3.16～2020.4.13
調査面積	150.0㎡
担当者	今井隆博
処置	記録保存

調査の概要

井尻B遺跡は那珂川と御笠川の間形成された洪積中位段丘面上に立地する。今回の調査地点は井尻B遺跡の南部にあたり、地祇社の南側に位置する。道路を挟んで東側の23次・24次地点では土坑や溝等が検出されている。

調査地点は周辺道路より50cm程高く、遺構検出面であるローム面の標高は、調査区東端で13.7m、西端で12.7mで、西に向かって下がる地形である。検出した遺構はビット・土坑で、密度は散漫である。遺構覆土は黒色、褐色、灰褐色等であるが、木根も多いと思われる。ビットの時期は判然としないが、弥生時代～中世のものと思われる。

出土物は弥生時代～近世の土器・瓦等で、コンテナケース1箱分である。黒曜石剥片が1点出土したためロームの掘り下げも行ったが、旧石器を含むローム層は確認できなかった。



1. 調査地点の位置 (25 井尻 0090 S=1/8,000)



2. 東側調査区全景 (東から)

1967 箱崎遺跡第106次調査 (HKZ106)

所在地	東区箱崎6丁目10-1 中央図書館北側通路
調査原因	学術研究 (HKZ1905)
調査期間	2020.2.25 ~ 2020.6.30
調査面積	600.0㎡
担当者	九州大学埋蔵文化財調査室
処置	現状保存

調査の概要

第106次調査地点は、九州大学箱崎キャンパス跡地の北部、中央図書館の北側道路部分にあたり、平成29年度に調査したHKZ1706地点の北側に隣接する。

調査の結果、隣接地点の石積み遺構と合わせて、22.3mの石積み遺構を検出した。石積みは1段のみ残存しており、他地点と同じく、名島層由来の砂岩・礫岩を用いている。既史跡指定地である史跡元寇防塁地蔵松原地区への接続を考えると、本調査地点付近で石積みみのラインが東側へと曲がり始めることを予想していたが、石積み検出地点最南端である94次調査地点(調査番号1840 HKZ1805)から本調査地点まで、石積み遺構はほぼ直線的に伸びていることが判明した。

また、石積み遺構の背後5m付近で、石積みと併行する大溝を確認した。大溝の残存幅は約7mで、石積み基底面からの比高差は約1mである。



1. 調査地点の位置 (33 貝塚 2639 S-1/8,000)



2. 石積み遺構検出状況 (南西から)

1968 五十川遺跡第23次調査 (GJK23)

所在地	南区五十川2丁目106番4
調査原因	専用住宅建設
調査期間	2020.2.18 ~ 2020.3.6
調査面積	49.5㎡
担当者	中園将洋
処置	記録保存

調査の概要

1. 調査に至る経緯

令和元年11月29日付けで該当地における埋蔵文化財の有無についての照会文章が提出された(事前審査番号31-2-926)。これを受けて埋蔵文化財課は令和2年2月13日に確認調査を行い、地表面下約50cmでピット・土坑・住居跡などの遺構を検出した。遺構の保全等に関して申請者と協議を行い、遺構が影響を受ける範囲約50㎡について記録保存のための発掘調査を実施した。調査は対象地が狭小であったため、3区画に分けての調査となった。

2. 位置と環境

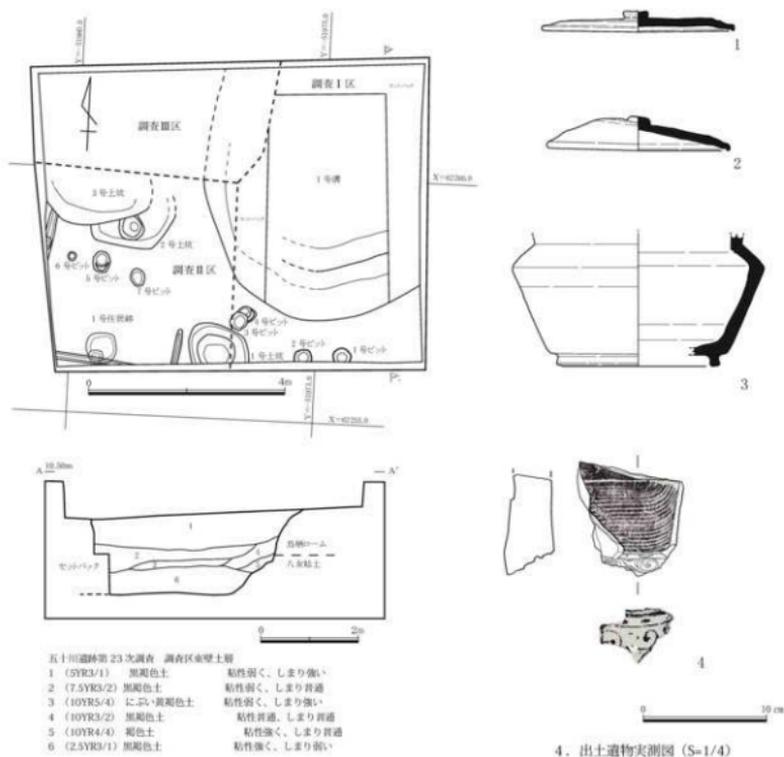
五十川遺跡は、福岡平野を流れる那珂川と御笠川に挟まれた標高9~11m、南北約800m、東西約240mの広さを持つ洪積台地上の遺跡である。第23次調査地点は五十川八幡



1. 調査地点の位置 (24 坂付 0088 S-1/8,000)



2. 東側調査区全景 (南西から)



五十川遺跡第23次調査 調査区東壁土層

- | | |
|---------------------|------------|
| 1 (5YR3/1) 黒褐色土 | 粘性弱く、しまり強い |
| 2 (7.5YR3/2) 黒褐色土 | 粘性弱く、しまり普通 |
| 3 (10YR5/4) に近い黄褐色土 | 粘性弱く、しまり強い |
| 4 (10YR3/2) 黒褐色土 | 粘性普通、しまり普通 |
| 5 (10YR4/4) 褐色土 | 粘性強く、しまり普通 |
| 6 (2.5YR3/1) 黒褐色土 | 粘性強く、しまり強い |

3. 遺構平面図・土層断面図 (S=1/100)

4. 出土遺物実測図 (S=1/4)

宮の南東、遺跡範囲の東縁部に位置している。第23次調査地点周辺のこれまで調査では、弥生時代から近世にかけて幅広い時代の遺構が確認されている。

3. 遺構と遺物

今回の調査では、住居跡1棟・土坑3基・ピット7基と共に大溝の一部を検出した。住居跡・土坑・ピットからは、須恵器・土師器などの破片の出土のみであったが、7世紀後半の遺構と考えられる。溝は、幅が推定で5～6m程、深さは約1.7mを計る。出土遺物は1 須恵器の蓋。口径15.6cm、器高1.7cm、つまみ高2.0cm。2 須恵器の蓋。口径14.8cm、器高2.8cm、つまみ高1.8cm。3 須恵器の壺。口径不明、頸部径16.8cm、底径13.2cm、残存高10.8cm。4 軒平瓦の破片。長(9.2)cm、幅(8.6)cm、厚4.0cm。鴻臚館635型式に推定される。時期は出土遺物から8世紀中頃と考えられる。

4. まとめ

今回の調査では、50m以下の狭い範囲であったが、古代の大溝を確認したことは成果として挙げられる。南北軸の大溝と思われるが、調査区内では南側に溝が続かない事、西側の五十川八幡宮側が地形的に微高地になっている事などから、溝と溝との間の入り口のような場所であり、また瓦の出土からも古代における寺院などの大型建物を取り囲む溝であった可能性も高く、周辺の古代の環境を考える上で重要な成果を得ることができた。

1969 麦野 A 遺跡第 30 次調査 (MGA30)

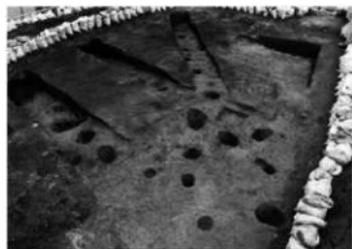
所在地	博多区麦野 6 丁目 5 番 1
調査原因	共同住宅
調査期間	2020.3.23 ~ 2020.4.3
調査面積	71.0㎡
担当者	吉田大輔
処置	記録保存

調査の概要

調査地は、麦野 A 遺跡の南東端に位置する。調査地の標高は、現況で 14.8 m 程で周辺の道路より 1.05 m 程度高い。調査区東半には黒褐色粘質土の遺物包含層が堆積するため、トレンチを 4 箇所設定し堆積状況を確認した。包含層が西から東に向かって傾斜した斜面上に堆積する状況を確認し、奈良時代の土師器・須恵器片が出土した。遺構は、この斜面も含め 18 基のピットを検出したが建物等を復元することはできなかった。遺構からは、奈良時代の土師器杯・甕や須恵器杯・甕・壺片がわずかに出土した。また周辺地形や過去の調査等を合わせて考えると、調査地の東から南側は谷となっており、調査地は丘陵の東側～南側斜面にあたるものと考えられる。調査によって、集落域がこれより北東から東側へは広がらない可能性が高いことが確認でき、また現在は改変されてしまった旧地形の様相を知ることができた。



1. 調査地点の位置 (12 麦野 0048 S-1/8,000)



2. 調査区全景 (西から)

1970 福岡城跡第 81 次調査 (FUE81)

所在地	中央区城内
調査原因	史跡整備
調査期間	2020.3.18 ~ 2020.12.22
調査面積	73.0㎡
担当者	井上藤子 史跡整備活用課
処置	現状保存

調査の概要

中天守石垣は、福岡城跡本丸南側に築かれた天守台を構成する 3 つの区画のうちの一つである。破損・孕み出しがみられ、安全上緊急性の高い範囲について、石垣の一部を解体し、復旧する保存修復工事を実施した。工事では、可能な限り元石材を使用し、伝統的工法を用いた復旧を行い、中天守が築かれた慶長期前半期の石積みの特徴を生かしながら、本来の石垣の状況に戻すことも目的の一つとした。

中天守石垣は昭和 40 年にも修理が行われており、既に改変されている部分も多い。この修理時に石積みは一段分が積み足され、裏込石もほぼ最下段まで手が加えられているような状況であり、天端の発掘調査でも櫓等の痕跡はみられなかった。しかし、築城当時の石材加工技術や基礎構造等、今回の解体工事によって新たな知見も得ることができた。



1. 調査地点の位置 (60 舞鶴 0193 S-1/4,000)



2. 保存修復工事完了後 (北東から)

1805 博多遺跡群第221次 (HKT221)

所在地 博多区上川端町6-38
 調査原因 跡地活用事業
 調査期間 2018.4.26～調査継続中
 調査面積 832.5㎡
 担当者 大庭康時
 処置

調査の概要

第221次調査地点は、博多遺跡群の南西部、西側に向かう緩斜面にあたる。旧冷泉小学校跡地であり、付近は鎌倉時代に亀山法皇の勅願寺と伝わる大乘寺の跡とされている。旧校舎があった西端を1区として調査を着手した。平成30年度に引き続いてⅡ区の調査、Ⅱ区の南につながるⅢ区、さらに調査対象地の南西部に当たるⅣ区の調査を実施した。

Ⅱ区では、最下層の石積遺構前面の旧地形の確認を行った。この石積遺構はⅢ区に連続する。

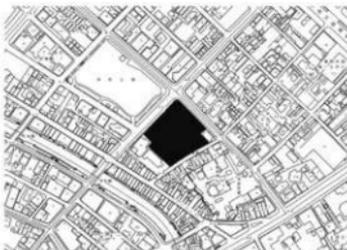
Ⅲ区においては、5面の調査を行った。1面は、小学校造成前の遺構面であり、おおむね明治期に当たる。2面は、近世の遺構面である。3面は鎌倉前期の遺構面である。1面から3面の間に大乘寺の遺構面が存在するはずだが、明瞭な整地面は確認できなかった。大乘寺関連の遺構は、溝・配土土坑・掘立柱建物跡があるが、薄弱であった。3面においては、柱穴、廃棄土坑などが出土した。土師器皿を一括廃棄した土坑など、大乘寺以前に生活域になっていたことがうかがわれる。4面の調査は、Ⅲ区の南三分の二が、旧冷泉小学校校体育館の解体工事に伴う作業ヤードとして、調査を中断して埋め立てたため、150㎡ほどの調査にとどまった。12世紀代の柱穴・土坑などが出土した。

5面では、Ⅱ区から続く石積遺構が出土した。石積遺構は、Ⅱ区からⅢ区にかけて長さ35m以上、幅は1.2mでほぼ一定し、一直線に築かれていた。石積遺構の西面は、四角ばった自然石の小口平坦面をそろえて、3段程度積み上げ、高さ40～60cmの垂直な石垣となっていた。11世紀後半から12世紀前半に機能した遺構である。

石積遺構の前には、洪水堆積層が厚く見られた。洪水層の年代は出土遺物から12世紀中頃とみられ、この洪水によって石積遺構は廃絶したと考えられる。

これまでの発掘調査による旧地形の復元から、石積遺構のラインは砂丘の汀線付近にあっており、鴻臚館から博多に貿易拠点に移行した当初の港湾関連遺構と考えられる。

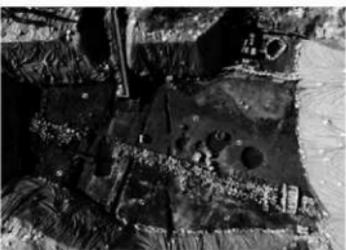
Ⅳ区においては、近世大乘寺の遺構と考えられる礎石建物跡、墓地跡が出土した。墓地は陶器甕や木製の早桶を用いた土葬墓である。狭い範囲に密集して作られており、調査は次年度に継続することになった。



1. 調査地点の位置 (49 天神 0121 S=1/8,000)



2. 対象地全景 (北から 2018年12月撮影)



3. Ⅱ・Ⅲ区石積遺構全景 (上空から)



4. Ⅳ区検出近世豊相墓 (西から)

1833 仲島遺跡第6次 (NKZ6)

所在地	博多区井相田2丁目4番2
調査原因	事務所建設
調査期間	2019.1.15～2019.2.27
調査面積	294.4㎡
担当者	屋山洋・三浦悠葵
処置	記録保存



1. 調査地点の位置 (12 麦野 0037 S-1/8,000)

調査の概要

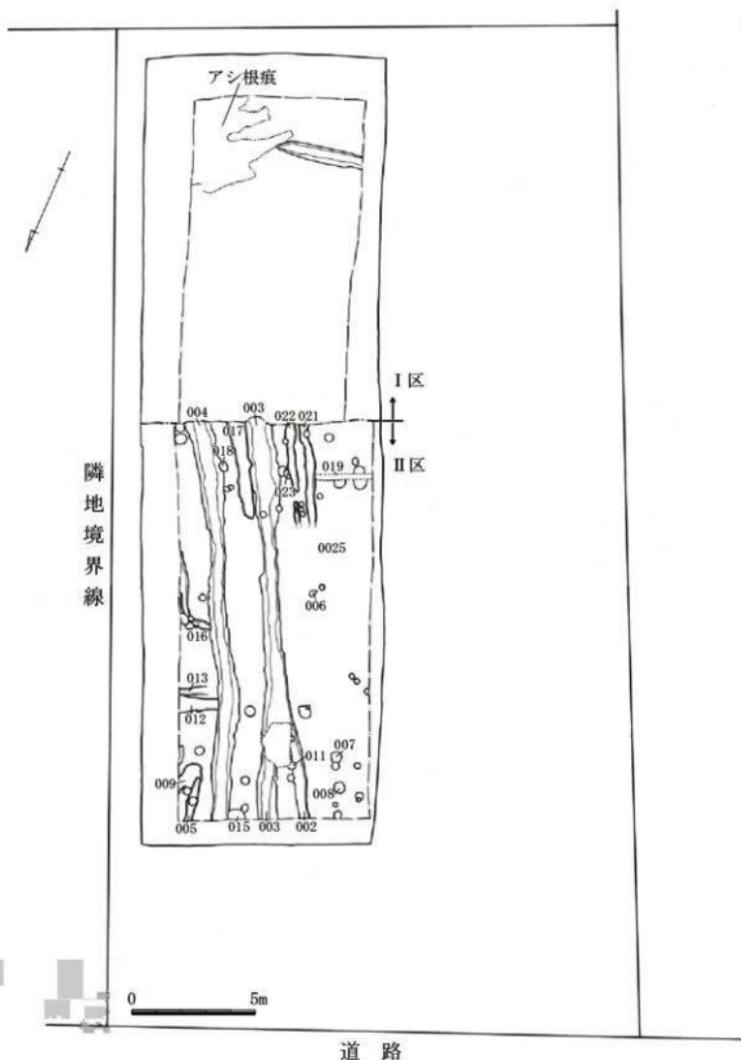
1. 調査に至る経緯

平成30(2018)年7月26日付けで、当該地における共同住宅建設に先立つ埋蔵文化財の有無についての照会が提出された(事前審査番号:30-2-397)。照会地が周知の埋蔵文化財包蔵地である仲島遺跡に含まれていることから、同年8月16日に工事予定範囲内の一部において確認調査を実施した。確認調査の結果、現地地表145cmにおいて溝や柱穴等の遺構を確認した。当該地では事務所建設に伴う基礎杭工事が予定されていることから、協議の結果、埋蔵文化財が影響を受ける294.4㎡において発掘調査を行うこととなった。本調査は平成31年1月15日に開始し、同年2月27日に終了している。

仲島遺跡は御笠川中流の左岸に広がる低丘陵地に位置し、今回の第6次調査地点は仲島遺跡2次調査の西側に隣接する。第2次調査(『仲島遺跡1』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1037集 2009年)は標高11.7m前後の黒色粘質土もしくは暗茶褐色粘質土上で竪穴式住居や掘立柱建物群などの遺構が確認されている。それに対し本調査では標高11.7mまでは近現代の盛土でその下に近代と思われる水田面を2面確認した。水田面下の黄灰色シルト層上面(標高約11.4m前後)で溝や柱穴群を確認した。



2. 仲島遺跡包蔵地範囲と調査地点の位置 (S=1/4,000)



3. 対象地内調査範囲図及び調査区全体図 (S=1/200)

2. 調査の経過

調査は廃土置き場の都合から2区に別けて行った。当調査地点は本来南側に緩やかに傾斜する斜面で、南端では葦の根痕を検出したことから湿地だったと思われる。近代の圃場整備によって段造成が行われ、調査区内では北側と南側の2枚の水田を確認した。水田の境界で調査区を分けて南側をI区、北側をII区としてI区から調査を開始したがI区(南側)水田面は北側より40cmほど低く、II区で遺構を確認した黄灰色シルトが造成時に削平されたため遺構は残っていなかった。

遺構番号	遺物
001	須恵器環(蓋or身の天井部小片1点 ヘラ記号 6c)、土器極小片(2点)
002	須恵器環(蓋or身の小片1点 ヘラ記号 6C?)、須恵器極小片(1点)、土器小片(2点)
003	須恵器環口縁小片(1点 6C)須恵器環蓋口縁小片(1点 6~7C)、須恵器高台付環小片(1点 6末7初)、須恵器小片(1点 壊蓋?)、須恵器小片(3点 丸みを帯びる 坏かハソウなど)、土器極小片(25点)
003A	須恵器蓋(胴部小片 1点)、
003B	須恵器環蓋(口縁部小片 6C?)、
004	須恵器環蓋(天井部小片 ヘラ記号)、須恵器環(口縁部小片)、須恵器蓋(小片3点 うち1点は別個体)、土器小片(11点 弥生~古墳時代か)
004B	須恵器蓋小片、土器小片(2点)
005	土器片(1点)、
006	
007	土器片(1点)
008	土器片(1点)
009	須恵器環蓋(天井部分小片 ヘラ記号)、土器片(2点)
010	土器片(2点)
011	土器片(1点)
012	土器片(1点)
013	須恵器環蓋(口縁部小片 6~7C)
014	須恵器蓋小片(1点)、
015	須恵器環蓋?(天井部分小片)、土器片(2点)
016	
017	土器片(3点)
018	土器片(1点)
019	須恵器片(1点)、
020	須恵器蓋小片(1点)、土器小片(3点)
021	
022	
023	
024	土器小片(1点)
025	須恵器蓋片(1点)、土師質甕取手
026	須恵器蓋(胴部小片)、須恵器蓋小片(1点)、須恵器環(口縁部小片 6C後)、須恵器片(1点)、土師器皿片(1点 糸切り)、土師質瓦片(1点)、土器片(11点)
1区東西方向断面	土器片(1点)
2区遺構検出時	須恵器蓋片(小片1点)、
2区遺構検出(平面図③)	須恵器環口縁部小片(1点)、土器片(5点 不明)
2区3土下げ時	須恵器蓋胴部小片(1点)、須恵器片(3点)、土器片(6点 不明)
2区南端検出時表層	須恵器環口縁部小片(1点)、須恵器片(1点)、土器片(4点)
2区検出時南西端	須恵器蓋胴部小片(小片1点)
0013下タメ押し黄色土下げ中	須恵器蓋胴部小片(1点)
サブレ019より南側土下げ時	須恵器大量胴部小片(1点)、須恵器高台付環口縁部小片(1点)、須恵器環口縁部小片(1点)、土器片(6点)、土師質?高台付坏底部小片(1点)
植物根痕跡中	土器片(1点)

表1 仲島跡第6次調査検出遺構・出土遺物観察表

3. 遺構と遺物

調査で検出した溝、柱穴の多くは検出面から底面まで深さ10cm以内であり、大きく削平を受けたことがわかる。溝 調査区内で11条を確認した。申請地及び調査対象地はやや南北に長い長方形を呈し、溝はその長辺に並行する002(017)、003、004、005、014、020、021、022、と直交する012、013、016がある。

各遺構から出土した遺物については、表1の出土遺物観察表に記載している。溝の底面は南北両端でほぼ同じ高さだが、SD002については北側が8cmほど低くなっている。各遺構について以下に概要の説明を行う。

SD002(017)

調査区南半(Ⅱ区)中央に位置し、SD003を切る。調査区中央で途切れるが、南端の017に続く。最大幅74cm、深さ13cmを測る。

SD003

長さ16m、最大幅112cmを測り、検出面からの深さは34cmである。断面はU字形で埋土は灰褐シルトである。



4. Ⅱ区東壁土層断面(西から)

SD004

最大幅 100 cm、深さ 31 cm を測る。断面は逆台形で埋土は灰褐シルトである。

SD012

調査区東辺に位置し、調査区内での長さ 143 cm、幅 58 cm、深さ 4 cm を測る。

SD013

SD012 の南に位置する。調査区内での長さ 102 cm、幅 32 cm、深さ 2 cm を測る。

SD020

調査区南西端に位置する。長さ 2.2 m、幅 27 cm、深さ 5 cm を測る。

SD021

北は攪乱で切られており長さ 4 m、幅 37 cm、深さ 6 cm を測る。

SD022

調査区南側に位置し長さ 2.7 m、幅 46 cm、深さ 5 cm を測る。

4. 小結

仲島遺跡第 6 次調査では溝 11 条と多数のピットを検出した。調査区南半（Ⅰ区）は現代の水田造成時に削平を受けており、下層の水性堆積層を確認したのみである。調査区北半（Ⅱ区）で検出した SD002 や 003 など南北方向の溝は 2 次調査の SD006 に並行する。これらは本調査区近辺を通る古代官道の水城東門ルートとの関連が指摘されている。また、仲島遺跡は東側に隣接する大野城市域と一体となる遺跡群を形成しており、古代には大宰府と関連する集落が形成されていたことも指摘されている。なお、トレンチの土層では遺構を確認した黄色シルトの下は河川堆積の粗砂が厚く堆積しているのを確認した。



5. 調査区Ⅰ区全景（北から）



6. 調査区Ⅱ区全景（南から）

1843 次郎丸高石遺跡 7次 (JRT7)

所在地	早良区賀茂3丁目423番1ほか
調査原因	共同住宅
調査期間	2019.3.18～2019.4.9
調査面積	421.75㎡
担当者	吉田大輔・清金良太・三浦萌
処置	記録保存

調査の概要

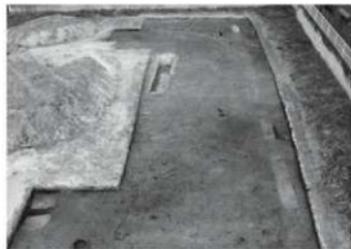
1. 調査に至る経緯

平成30(2018)年10月18日付で、当該地における共同住宅建設に先立つ埋蔵文化財の有無についての照会が提出された(事前審査番号:30-2-590)。照会地が周知の埋蔵文化財包蔵地である次郎丸高石遺跡に含まれていることから、同年10月11日に工事予定範囲内の一部において確認調査を実施した。

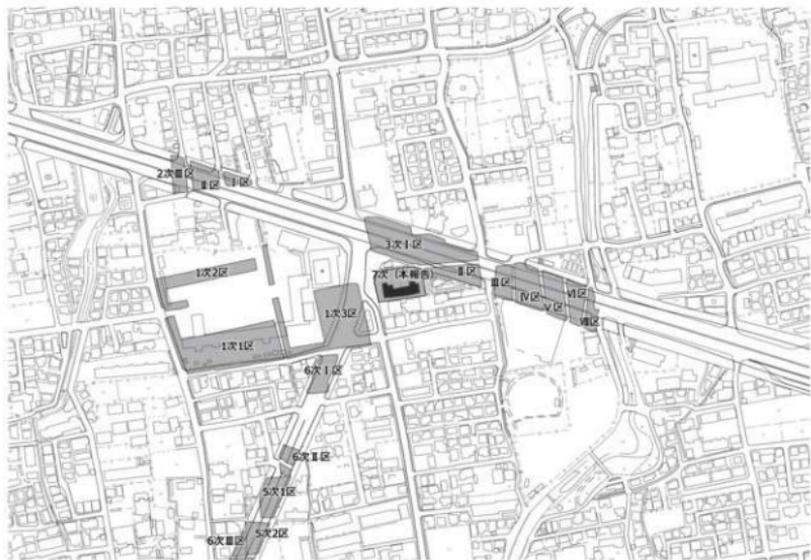
確認調査の結果、現地表下20cmにおいて溝や柱穴等の遺構を確認した。当該地では共同住宅建設に伴う基礎杭工事が予定されていることから、協議の結果、埋蔵文化財に影響を受ける421.75㎡において発掘調査を行うこととなった。本調査は平成31年3月18日に開始し、同年4月9日に終了している。



1. 調査地点の位置 (83 野芥 2447 S=1/4,000)



2. 調査区全景 (西から)



3. 次郎丸高石遺跡第7次調査地点位置図 (S=1/4000)

2. 位置と周辺状況

次郎丸高石遺跡は早良平野の中央部に位置している。周辺は旧来は水田が広がる地域であってが、宅地造成により盛土されているため旧地形を残してはいない。遺跡内ではこれまでに6次の調査が実施されており、縄文時代から中世にかけての遺構・遺物が確認されている。東には次郎丸遺跡、西には免遺跡が知られている。

今回の第7次調査区は次郎丸高石遺跡のほぼ中央部に位置している。東に1次調査区、北に3次調査区が位置する。



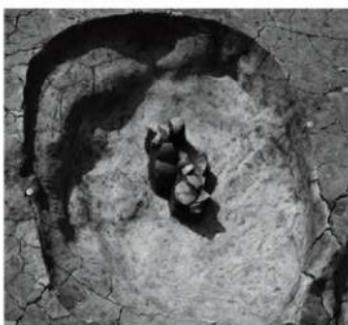
4. SD001 全景 (南から)

3. 遺構と遺物

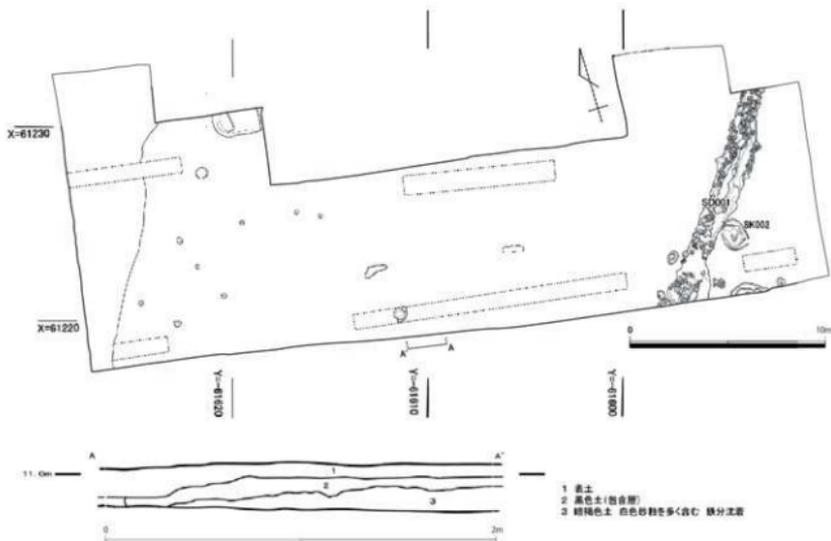
全体的に遺構密度は低く、調査区東部において溝が1条と土坑が数基発見されている。調査区西側はほぼ旧河川であった。主に弥生時代中期の土器の出土が確認されているが、そのほとんどが破片である。

SD001は調査区西側を南北に縦断する幅約1.2m、深さは場所によって異なるものの10～15cm程の自然流路である。小片ばかりではあるものの、弥生時代中期の土器が多く発見された。1・2は甕の口縁部片、4～7は広口壺もしくは高杯の口縁部片である。

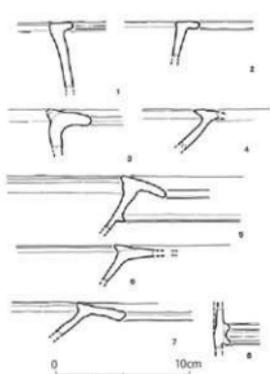
SK002はSD001の西側すぐ傍に位置する長軸約1.6m、短軸約1.2m、最深部約40cmの土坑である。9はほぼ完形の弥生土器の甕である。全体的に調整は風化しているものタテ



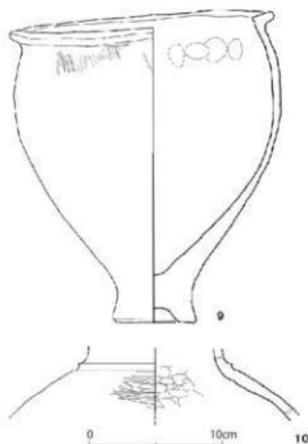
5. SK002 完掘状況 (南から)



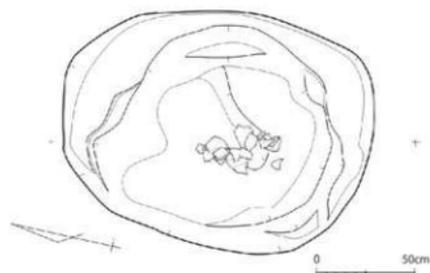
6. 遺構全体図・土層断面図 (S-1/250・1/25)



第5図 SD001出土遺物実測図(S=1/3)



第6図 SK002出土遺物実測図(S=1/3)

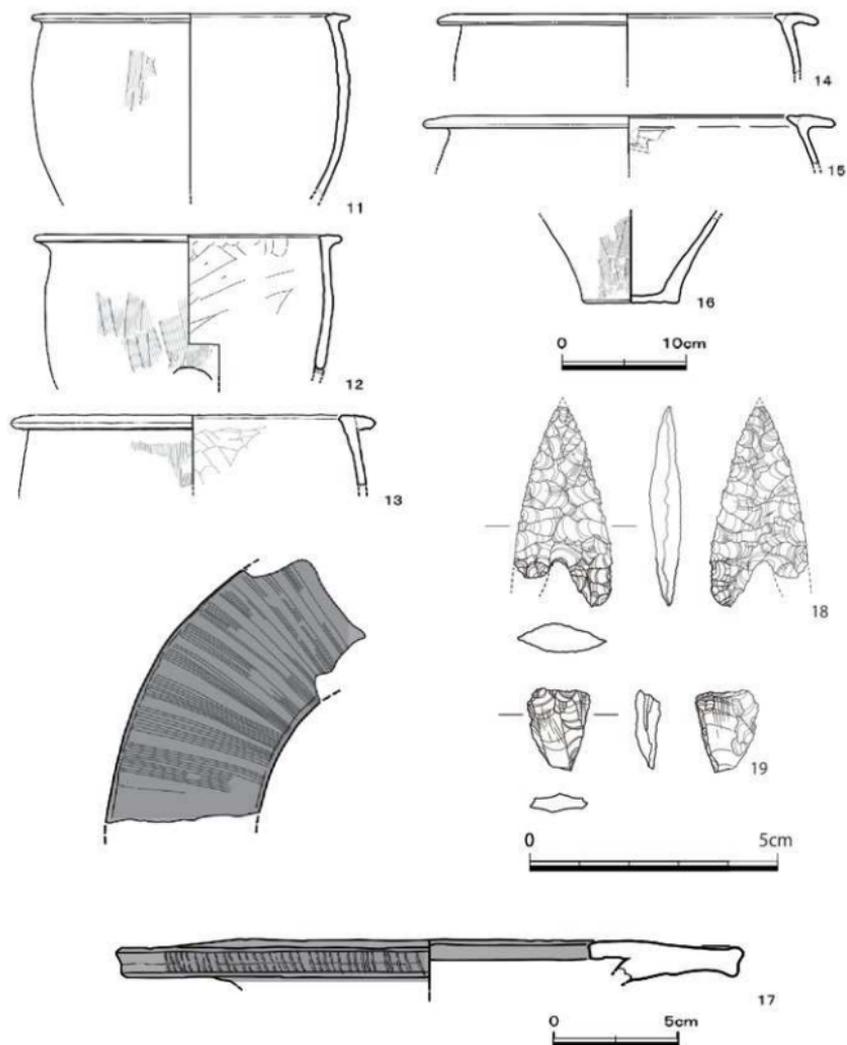


第7図 SK002遺構実測図(S=1/20)

ハケが確認できた。10は壺の肩部である。時期はSD001と同じく弥生時代中期と考えられる。

他には遺構に伴うものではないものの、調査区南西部壁にて土器片を多数確認したため調査区の拡張を行い、土器を回収している。11～15は弥生土器甕の口縁部、もしくは口縁～胴部の破片である。12は胴部に打ちかけがみられる。17は高環の口縁部片であり、口縁平坦部に暗文様のような模様が見える。

18は弥生時代前期に属する黒曜石製の石鏃である。先端部と脚の一部を欠損するが全長4.0cmを測る。19は黒曜石製の剥片で1.6cmを測る。



第8図. 調査区南西部包含層出土遺物(11~16:1/4, 17:1/2, 18・19:1/1)

4. まとめ

今回の調査では溝1条と土坑数基、竪穴式建物跡と考えられる遺構が1基発見された。出土遺物のほとんどがSD001と包含層からの出土であり、小片が多かった。

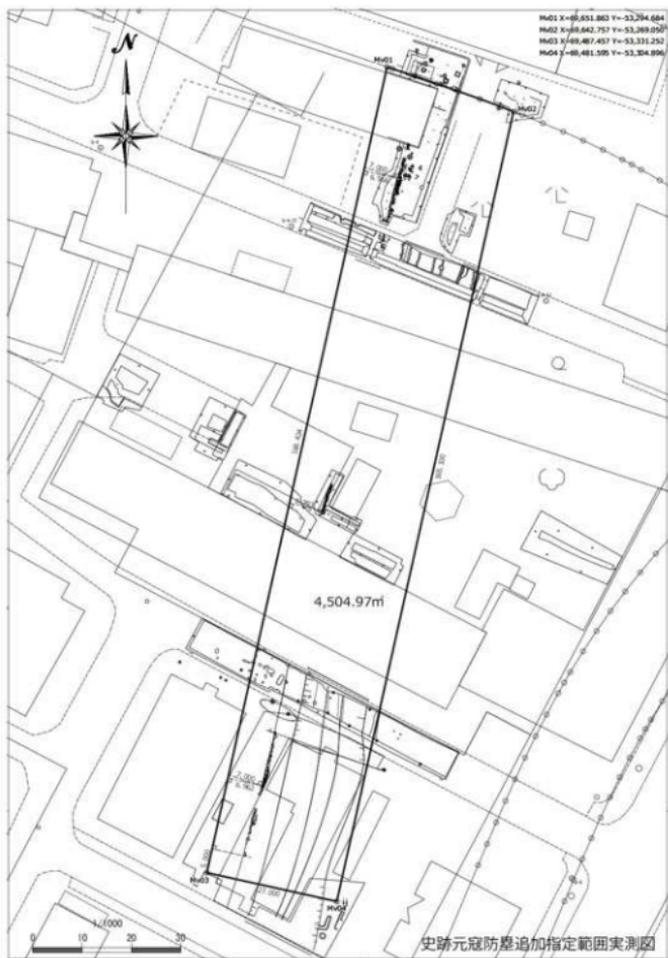


Fig.2 史跡元寇防塁箱崎地区南地点指定範囲実測図位置図 (S=1/1,000)



Ph.1 HZK1604 石積み遺構横切出状況 (北から)



Ph.2 HZK1701 石積み遺構横切出状況 (南西から)

Ⅶ 令和元年度福岡市新指定および新登録文化財

令和元年度の福岡市新指定および新登録文化財は、令和2年2月14日開催の福岡市文化財保護審議会において、13件の文化財について答申を得、令和2年3月23日の福岡市公報により告示された。

1 指定文化財の概要

区分	種別	指定名称	員数	所在地	保有者・保持団体
有形文化財	考古資料	あきせ いせきしつづつじん 岸田遺跡出土品 (第1次調査)	79点	福岡市博多区井相田2-1-94 福岡市埋蔵文化財センター	福岡市
民俗文化財	無形民俗文化財	あさのしづ ぼんねんのかまよつじ 小呂島の紙團山笠行事		福岡市西区小呂島10	小呂島の紙團山笠行事保存会

(1) 岸田遺跡出土品 79点（有形文化財／考古資料）

室見川中流西岸の早良区早良に所在する岸田遺跡は、扇形を呈する早良平野最南部の最も狭隘な要部に位置する。土地改良事業に伴い2009(平成21)年から2010(平成22)年にかけて行われた第1次調査(調査番号0930)では、標高約50mを測る中位段丘で甕棺墓、木棺墓、土坑墓計86基で構成される弥生時代前期末から後期初頭を主体とする墓地が確認された。この墓域は、南北方向に延びる尾根に沿って列墓の様相をなし、約20mの空閑地を挟み、南北2群(「北群」、「南群」)に分かれ、このうち、計6基(甕棺墓5基、木棺墓1基)に金属器の副葬が認められた。

このうちK0443出土の鉄戈は、現在のところ、本市唯一の出土例である。K0471出土の中細形銅剣は、国産初期の段階の所産であり、生産開始時期を把握する上で、重要な例となる。K0473出土の十字形把頭飾は、列島最古かつ最大級の国産製品で、出現時期を知ることのできる極めて貴重な例である。また、出土状況から木製赤漆塗把に紐で結束された状態で銅剣に装着されており、使用形態や固定方法が判明することも価値を高めている。

早良平野における弥生時代の青銅器を副葬する埋葬遺跡の事例を概観してみると、遺跡の分布は、概ね2km程



写真1 岸田遺跡第1次調査地点(北から)

度のある一定距離を置いて占地しており、有力者が統率する集団が地理的なまとまりを単位として、複数が併存したことが窺える。

このうち、平野奥部の興味深い立地にある本遺跡は、中期初頭から中期後半の長期にわたる有力集団の墓地であり、かつ平野でも少数である青銅製武器の複数埋葬遺構を含んでいる。また同時に発掘調査された集落遺構とも併せてその歴史的评价は高い。しかしながら、前半段階では吉武遺跡(高木)を頂点としながらも、後半段階では、糸島平野や福岡平野で認められるいわゆる「王墓」/複数前漢鏡群一遺構集中副葬が存在しない。

岸田遺跡出土の金属器は、早良平野における弥生時代中期前半までの青銅武器副葬例の追加資料として貴重である。さらに中期後半に至っても本市唯一の出土である鉄戈を副葬するなど、長期におよぶ有力集団の存在を想定できる。また、岸田遺跡より南側の市域では、弥生時代の顕著な遺跡はこれまで発見されておらず、同平野における交通や文物交流の要衝としての重要な役割を担ったことも推測できる。本平野における社会構造や集団墓の形成を考察する上でも、貴重と言える。

よって、これらの金属器を副葬した貴冑などを含めて指定し、保存や活用を図るものである。



写真2 岸田遺跡出土金属器

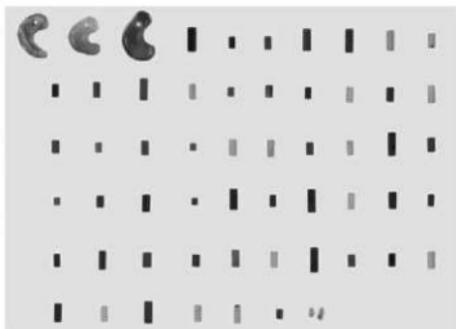


写真3 岸田遺跡出土玉類

遺構番号	点数	種別	時期	出土遺物	備考
SR0437	1	木棺墓	中期初頭	楕形銅剣	1 出土時、鞘の腐食痕跡あり
K0443	3	甕棺墓	中期後半	鉄戈	1 戈の身部には鞘の痕跡があり、茎部には木製の柄が残る
				甕棺(上)	1 内面には水銀朱が塗布される
				甕棺(下)	1
K0471	5	甕棺墓	中期初頭	中楕形銅剣	1 剣にはベンガラ付着。また出土時、赤漆塗り鞘の痕跡
				小壺	1
				小壺	1
				甕棺(上)	1
				甕棺(下)	1 バラバラ
K0473	5	甕棺墓	中期初頭	楕形銅矛	1 銅矛の一部には布痕跡あり
				楕形銅剣	1 銅剣と把頭飾の間には漆皮膜を伴う木質痕跡あり
				甕棺(上)	1
				甕棺(下)	1 内面には水銀朱が塗布
K0482	61	甕棺墓	中期前半	中楕形銅矛	1
				楕形銅剣	1
				勾玉	3
				管玉	54
				甕棺(上)	1
				甕棺(下)	1 内面には水銀朱が塗布される
K4916	4	甕棺墓	中期前半	楕形銅矛	1 矛の茎部には柄の木質が遺存
				楕形銅剣	1 剣の出土時、鞘の腐食痕跡あり
				甕棺(上+穿孔片)	1
				甕棺(下)	1
員数	79			員数計	79

表1 岸田遺跡第1次調査埋葬遺構別指定文化財一覧

(2) 小呂島の祇園山笠行事（民俗文化財／無形民俗文化財）

小呂島の祇園山笠行事は、毎年7月15日に行われる。飾り山と昇き山を作り、集落の氏神である七社神社の祭礼として行われている。毎年、当屋が3軒ずつ定められ、当屋を中心に山笠の準備が行われる。

小呂島は玄界灘に浮かぶ周囲3.3kmの島であり、福岡市西区に属する。人口は71世帯173人で（令和元年7月末現在）ある。島にはほとんど平坦な土地がなく、南岸に集落が集中している。中世には宗像社領であった。なお、宗像氏が人を移住させ開墾を試みたが失敗したと伝えられている。正保2（1645）年に北嶋から「五軒屋」と呼ばれる5世帯を福岡藩が移住させ、これが現在の島民の始まりとされている。享保2（1717）年に家数は19軒になり、寛政期には家数26軒、人数141人、牛20頭との記録が残っているが、明治以降ほとんど世帯数は増加しておらず、戦前までの世帯数は28軒であった。島民の生業は、教員や市営渡船、漁協の職員である場合を除いて、漁業を主としている。

島内に寺はなく、七社神社が島の南岸に、島の中腹に嶽宮神社がある。他にも、恵比須社、稲荷社、薬師堂など人々の信仰を集めている社等が島内にはいくつかあり、それらに付随した行事が年間を通して行われている。神職は在島しておらず、宮浦にある三所神社の宮司である党家が代々その職を務めている。党家に保管されているという天明6（1786）年に記された神社由来書には、既に七社大明神の名が見え、祭礼の項に9月21日と10月18日の祭礼が記されている。これは、現在でも行われている「おくんち」と「秋祭り」を記したものと思われる。七社神社の祭神は、宗像三神に、猿田彦命、蛭子命、天岩樟樅命、大國主命の4神を加えた7神からなる。

山笠がどのようにして小呂島に定着したかを明確に示す資料は現時点では確認できていない。現在、6月下旬に福岡市西区宮浦まで御神体を受け取りに行くところから山笠が始まる。御神体は「ごしんさま」と呼ばれ、普段は七社神社の拝殿裏の祠におさめられている。また、この時に、山笠を作るのに必要な青竹や笹竹、籾藁なども調達をする。その後、7月1日に棒洗ひ、8日に山笠の部材作り、11日に山笠の飾り作りが行われる。7月14日は、当日朝から山笠の組み立てが行われる。飾り山と昇き山は、それぞれ中年組と若者組によって作られる。飾り山は、高さ約7～8mで、昇き棒が3本（現在は飾りのため、縄で縛ってはいない）、山台の上にペニヤ板を四方に張る。ペニヤ板には穴が開いており、その穴に「ナミ」、「サカナ」、「コブ」、「サガリバナ」などの飾りを差し込んで飾り付けをしていく。また、前面と背面に「絵馬」を飾る。博多の山笠でいう杉壁は、現地でススキと呼ばれる植物を板状に張り巡らせて作る。昇き山は、高さ約3mで、昇き棒が3本である。山台の上には人形は載せずに、木製の



写真4 小呂島の祇園山笠行事 集落の中を行く山笠

祠があり「ごしんさま」が納められる。3本の昇き棒の例は、北九州市の山笠にも一部見られるが、小呂島の山笠の昇き棒が3本である詳しい理由はわからない。山笠が通る道の狭さという、小呂島の環境的な特徴が影響した可能性も考えられる。

小呂島の山笠の変容の様子については、資料等が限られているため、その様子を詳細に知ることはできないが、聞き取りや写真等から行事の変容の様子が一部明らかになる。

現在、小呂島では据え山としての飾り山と昇き山の2種類が作られるが、かつては飾り山が担がれていた。飾り山が動いていた当時は、斜面をのぼることはできなかったため、南岸の通り沿いの集落だけをまわっていた。もともと、現在斜面に建つ家々は、島の南岸に建つ家の分家のため、比較的新しい家が多く、昭和35(1960)年以降に建てられたものが多い。当時の飾り山は、3本の昇き棒を有し、高さが高いために、重りに大きな石を用いて転倒を防いだという。なお、昇き山と飾り山に分化したきっかけとして、島内に電線が張り巡らされたことを理由として記憶している伝承者が多い。ただし、昭和36(1961)年に書かれた「小呂島に於ける部露祭祀」には、「四尺四方の台の上に絵馬二枚を掲げて」という記述が見え、この特徴は飾り山の特徴と重なることから、少なくともこの時までには飾り山が動いていたものと考えられる。その後の昭和39(1964)年に出力の大きい発電機が導入されたこと、昭和25(1950)年生まれの伝承者が青年組に加入した時には飾り山は既に動いていなかったという聞き取り等から推測すると、昭和37～39年の間に飾り山と昇き山の分化が生じたものと推測できる。なお、最初の昇き山がどのようにして作られたのかということについては不明であるが、現在に至るまで、基礎部分は何度か作り替えられているようで、「島内に住む大工(の経験者か)に山の台を作ってもらった」こともあるという。

小呂島の祇園山笠行事の中で歌われる祝い唄は、木遣り唄の形式で音頭取りの独唱から始まり、そこに全員が斉唱で呼応していく。出だしの歌詞は「博多祝い唄」と共通してお



写真5 小呂島の祇園山笠行事 山笠の飾り付け作業



写真6 小呂島の祇園山笠行事 飾り山

り、節回しも博多のそれとほぼ同じであるが、小呂島の祇園山笠行事で歌われる祝い唄は、他所と共通する歌詞の間に、山笠が止まる場所の特徴などを歌い込んだ小呂島独自の七七七五調の歌詞を挟み込んだ構成となっており、博多を中心とした地域で広く歌われている「祝い唄」が小呂島で採取された後に、島独自の展開を遂げたことがわかる。

北部九州には山笠が数多く分布しており、小呂島の山笠は形態などの点から博多系の山笠の1つと考えることができる。法被の着用や山笠出発時の太鼓の使用などは、明らかに博多の山笠を意識した変容であり、島における博多という土地への意識の存在がうかがえる。一方で、漁業を生業とする島らしく、山笠の飾りに昆布や魚など海に関する飾りが多用されている点や、昇き棒が3本である点は、小呂島の山笠の特徴と言える。また、年齢別に座が設けられ、島民の信仰を集める場所では山笠が止まり、祝い唄が歌われるという行事の形態には、元来からの島の習俗と島へ流入してきた山笠文化との習合の可能性が感じられる。小呂島の祇園山笠行事は、北部九州に広く分布するハカタウツシの祇園山笠行事が離島の漁村において特色ある地域的展開を遂げた一事例といえ、本市の文化財に指定することにより、地域住民の手で長く継承保存されることが望まれる。

2 登録文化財の概要

区分	種別	登録名称	所在地	所有者・保持団体
民俗文化財	無形民俗	しもむらたのしんじや 下和白大神社の獅子廻り	福岡市東区和白丘	大神神社下和白獅子廻り保存会
		なごたかばし 奈多高浜の獅子舞	福岡市東区奈多	奈多高浜町内会
		なごにしや 奈多西方の獅子舞	福岡市東区奈多	奈多西方町内会
		なごまきや 奈多前方の獅子舞	福岡市東区奈多	奈多前方町内会
		なごやまの 奈多年田方の獅子舞	福岡市東区奈多	奈多年田方町内会
		いせいぎやまの 今泉若宮神社の獅子祭り	福岡市中央区今泉	若宮神社総代会
		こやまぢり こどもしんまつり 紺屋町子供獅子祭	福岡市中央区大名	紺屋町子供獅子祭振興会
		うしやまの 鳥飼八幡宮子供獅子まわし	福岡市中央区今川	鳥飼八幡宮夏ごし祭実行委員会
		たかみやほらまの 高宮八幡宮獅子まつり	福岡市南区高宮	高宮の伝統を守る会
		あらい 荒江柳田神社の獅子まわし	福岡市城南区荒江	荒江柳田神社氏子会
そら 祖原獅子まつり	福岡市早良区祖原	祖原獅子祭り保存会		

獅子とはライオンを形象化したもので、古来わが国においては仏法を護り、悪霊を退散させる霊獣としてのイメージが共有されてきた。特に獅子が邪霊を祓い、神仏を護る仕草を舞踊化したのが獅子舞であり、古代中国大陸や朝鮮半島より伝来した伎楽の一部として行われて以降、長い時間をかけて各地に伝播し、悪霊祓い・豊作祈願・雨乞い等の目的を持つ民俗芸能として地域に伝承されてきた。

福岡県下の獅子舞についてはかつて平井武夫氏により検討がなされ、①祓い獅子②伎楽系舞楽的獅子舞③演劇・狂言の獅子舞の三種に分類されている。この中でも①の系統に属し、神社でお祓いを受け神遣しをした獅子が、村の家々を戸別に回り、無病息災・五穀豊穡を祈願するという「門祓いの獅子」に類する行事が、現在も福岡市内の多くの地区で継承されている。

福岡市内の祓い獅子の多くは7月、神社の夏越の祓の祭に併せて行われている。青少年が中心となる事例が多いが、奈多や祖原のように成年に達したものが主体となる事例も存在する。いずれも雄雄の獅子頭を担ぎ地域を巡回する形式で共通しており、本年度の登録候補となる多くの地区では戸別に祓いを行う「門祓い」が現在でも行われている。獅子は多くの場合一人立ちで頭上に獅子頭を担ぐ場合が多いが、奈多では二人立ちで行われ、鳥飼・高宮では担ぎ手となる子ども達の負担を考慮して、御輿状の台に獅子頭を乗せて運搬する事例も見受けられる。

行事の来歴について、下和白や高宮・祖原のように江戸時代に始められたという伝承を持つものもあり、今泉や相屋町のように獅子頭を取納する箱に江戸時代の銘文を持つものもあるが、それらを含めて史料から開始時期を特定できる事例は存在しない。北部九州には昭和戦前まで、伊勢地方から伊勢神宮の神霊を遷した獅子頭を奉じた「伊勢太神楽」の団が訪れて家祝い・籠払いを行っていたことが知られ、その影響下で「門祝いの獅子」が地域に定着した可能性が指摘されている。福岡市内では平成30年度登録の類例を含め、市中心の都市部（旧唐津街道沿線）から平野の農村部、博多湾岸の漁村部まで広い地域で伝承されている。また福岡県内では筑後地方に特に濃密に分布する他、筑豊地方や福岡平野周辺、糸島地方等に類似の行事が伝承されている。

福岡市内に伝承される祝い獅子の行事は、近世から近代にかけて地域に定着、継承されてきた基礎的な民俗慣行として、本市民の基盤的な生活文化を理解する上で重要な価値を持つ。また形を変えながら現在も継承される祝い獅子は、それぞれの地域において地域コミュニティの維持や青少年の育成に寄与する重要な年中行事であり、市文化財に登録することで行事の保存継承と地域の一層の活性化を図ることができる。

福岡市内に伝承される祝い獅子の行事は、近世から近代にかけて地域に定着、継承されてきた基礎的な民俗慣行として、本市民の基盤的な生活文化を理解する上で重要な価値を持つ。また形を変えながら現在も継承される祝い獅子は、それぞれの地域において地域コミュニティの維持や青少年の育成に寄与する重要な年中行事であり、市文化財に登録することで行事の保存継承と地域の一層の活性化を図ることができる。



写真7 下和白大神神社の獅子廻り



写真8 奈多前方の獅子舞



写真9 荒江柿田神社の獅子まわし



写真10 祖原獅子まつり

報告書抄録

誌名 副題名 巻次 シリーズ名 シリーズ番号 編者名 編集機関 所在地 発行年月日	福岡市埋蔵文化財年報 福岡市埋蔵文化財年報 令和元(2019)年度版 34 本田浩二郎 福岡市教育委員会 福岡市中央区天神1丁目8-1 令和3(2021)年3月								
所収遺跡名	所在地	座標		東経	調査期間		調査面積 (㎡)	調査理由	
		市町村	遺跡番号		調査開始	調査終了			
宝台遺跡 (1908 4次) <small>福岡市中央区</small>	<small>福岡市中央区</small> 城南区榊井川4丁目367	40137	0208	33°32'51"	130°23'2"	2019.4.12	2019.4.24	68.00	個人宅毛建設
鹿野A遺跡 (1916 27次) <small>福岡市中央区</small>	<small>福岡市中央区</small> 博多区妻野5丁目	40132	0048	33°33'0"	130°27'42"	2019.5.10	2019.5.17	180.00	共同住宅建設
有田遺跡群 (1918 269次) <small>福岡市中央区</small>	<small>福岡市中央区</small> 早良区小田原2丁目93番1, 93番2	40137	0309	33°33'59"	130°20'8"	2019.6.13	2019.6.19	691.00	駐車場整備
飯倉A遺跡 (1919 4次) <small>福岡市中央区</small>	<small>福岡市中央区</small> 早良区飯倉2丁目449番8	40137	0245	33°33'58"	130°21'17"	2019.6.12	2019.7.12	61.00	戸建住宅建設
重宿B遺跡 (1921 1次) <small>福岡市中央区</small>	<small>福岡市中央区</small> 早良区重宿5丁目301-1	40137	2896	33°31'42"	130°20'36"	2019.6.5	2019.6.18	41.00	戸建住宅建設
那珂遺跡群 (1929 176次) <small>福岡市中央区</small>	<small>福岡市中央区</small> 博多区那珂1丁目556番1, 569番, 568番	40132	0085	33°34'18"	130°26'6"	2019.6.28	2019.7.12	126.00	個人宅毛建設
鹿野A遺跡 (1936 29次) <small>福岡市中央区</small>	<small>福岡市中央区</small> 博多区妻野2丁目17-1	40132	0048	33°33'18"	130°27'31"	2019.8.19	2019.8.26	61.00	戸建住宅建設
福岡城跡 (1946 79次) <small>福岡市中央区</small>	<small>福岡市中央区</small> 中央区赤坂1丁目46番	40132	0193	33°35'8"	130°23'23"	2019.10.9	2019.10.18	17.00	ビル建設
比恵遺跡群 (1956 156次) <small>福岡市中央区</small>	<small>福岡市中央区</small> 博多区博多駅南6丁目19-1	40132	0127	33°34'33"	130°25'56"	2020.1.15	2020.1.25	66.00	共同住宅建設
仲島遺跡 (1833 6次) <small>福岡市中央区</small>	<small>福岡市中央区</small> 博多区井植田2丁目4番2	40132	0037	33°33'21"	130°27'58"	2019.1.15	2019.2.27	294.40	事務所建設
次郎丸高石遺跡 (1843 7次) <small>福岡市中央区</small>	<small>福岡市中央区</small> 早良区霞見3丁目423番1ほか	40137	2447	33°33'1"	130°20'11"	2019.3.18	2019.4.9	421.75	共同住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宝台遺跡 (1908 4次)	集落跡	弥生時代	竪立柱建物・土坑・ピット	弥生土器・石器	
鹿野A遺跡 (1916 27次)	集落跡	弥生～古代	竪穴住居・土坑・ピット	土師器・須恵器	
有田遺跡群 (1918 269次)	集落跡	弥生～中世	竪立柱建物・土坑・ピット	弥生土器・土師器・須恵器	
飯倉A遺跡 (1919 4次)	集落跡	弥生～中世	住居・土坑・ピット	弥生土器・土師器・石器	
重宿B遺跡 (1921 1次)	集落跡	弥生～中世	土坑・溝・ピット等	土師器・国産陶器・貿易陶磁器	
那珂遺跡群 (1929 176次)	集落跡	弥生～中世	井戸・土坑・ピット	弥生土器・土師器・須恵器・貿易陶磁器	
鹿野A遺跡 (1936 29次)	集落跡	弥生～古代	溝・土坑・ピット	土師器・須恵器・石器	
福岡城跡 (1946 79次)	城郭	近世	溝	近世陶磁器	
比恵遺跡群 (1956 156次)	集落跡	弥生～古代	溝	弥生土器・土師器・須恵器	
仲島遺跡 (1833 6次)	集落跡	縄文～古代	溝	土師器・須恵器	
次郎丸高石遺跡 (1843 7次)	集落跡	弥生～古代	土坑・溝・ピット	弥生土器・石器	

福岡市埋蔵文化財年報
Vol.34
—令和元(2019)年度版—

発行日 令和3年3月25日
 編集・発行 福岡市教育委員会
 〒810-8620 福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 松古堂印刷株式会社
 〒819-0373 福岡市西区周船寺3丁目28-1

THE ANNUAL REPPORT
OF
THE BURIED CULTURAL OF FUKUOKA CITY
VOLUME 34



THE BOARDS OF EDUCATION OF FUKUOKA CITY

DECEMBER 2020

JAPAN